

1818

(表紙)

追 舊 記 雜 錄  卷八十八	吉 貴 公	自寛保二年七月
	繼 豐 公	至同三年十二月
	宗 信 公	

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様益御機嫌能被成御座、今度

有章院様二十七回御忌御法事於増上寺御執行相濟、四月

廿九日 御靈屋 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤、紙面

之趣各申談及 上聞、恐、謹言、

朱力  
寛保二年 七月六日

(萬津吉貴)  
松平上總入道

本多中務大輔  
忠良判

1819

繼豐公御譜中

正文在文庫

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之、遂披露、

之御仕合、恐、謹言、

(朱)  
「寛保二年」

七月六日

忠良判

(萬津繼豐)  
松平大隅守殿

忠良

(朱)  
「在口裏」

本多中務大輔

1820

全上

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之候、遂披露、

之御仕合、恐、謹言、

(朱)  
「寛保二年」

七月六日

乘賢判

松平大隅守殿

乘賢

(朱)  
「在口裏」

松平能登守

1821

繼豐公御譜中

扣正文在右筆所

私領薩摩國川邊郡七嶋之内諏方之瀬嶋船壹艘、人數貳拾壹人乗組、去々年申秋爲數物積琉球國に差渡、那覇より同國八重山嶋に罷渡筈外處、水主之内壹人於琉球相果、壹人老病氣ニ由水主不足ニ付、琉球人貳人雇入、貳拾壹人乗組、去酉三月八重山嶋に相渡、那覇に致歸帆候節、於洋中逢難風本船乗沈、壹人致溺死、貳拾人橋船ニ乗移、同七月唐國之内舟山と申所に致漂着、夫より唐人共相送、同十二月浙江省之内乍浦に送届、始終丁寧致介抱置、當五月長崎に送來、於奉行所被逐吟味、何そ不審之儀無之付、彼地へ差置外家來之者に被預置、追々何分可被仰渡旨致承知外段申遣外由、國許家來共申越外、此段申上外、以上、

(朱) 一覽保二年

七月十一日

(島津總督) 御名

(朱) 「右御届書御用番本多中務大輔様江被差出候」

繼豊公御譜中

扣正文在家老座

覺

(朱) 長崎御奉行より仰渡

一先達を預置外薩州之者并琉球人、唐國に漂着、貳拾人之者共國許に差返外條、無構相應之渡世可被申付外、

但猥他國に不差出、御領分より外ニ不爲致住居様可被申付候事、

一琉球人之儀老彼國に差戻可被申外事、

一右之者共は於唐國與へ唐銀并錫ゆひかね、其外衣類等其儘爲取之外事、

右之趣江戸表に相伺、依 御下知申渡之候、以上、

(朱) 一覽保二年 戊七月「廿三日」

全上

扣正文在家老座

覺

一昨廿三日萩原伯耆守様より御用之由被仰渡、罷出候處

(長崎奉行、美雅)

被成御逢、此内私に御預被仰付置外唐國に致漂着候者共之儀、於洋中遭大風無是非唐國に致漂着候段、委細被聞召届外趣を以、江戸に御伺被成候上、無御構國元は被差返外間、相應之渡世可被申付外、猥他國に不差出、御領分より外不爲致居住、琉球人之儀老彼國に差戻、右之者共は於唐國あたへ外品ハ其儘爲御取被成外、此段依御下知被仰渡外間、右之趣早く御國元御家中に申越、漂着者共は及致安心外様申聞、勝手次第御國

許に差越可申旨御直被仰渡、御書付一通御渡被成候付奉畏り、右之段國元に申越、漂着者共は申聞、此内國元より差越置り警固幸領之者相附、中途入念り様申付、國元に列届候様可仕り、右儀に付る者早竟伯耆守様より段々被爲入御念、江戸に表被仰上り故、首尾好被仰渡、於私も難有仕合奉存り由御請御禮申上り、右仰渡之御書付壹通差上申外、

一右仰渡付る者、私より御請書相調、早速差出可申旨（長）石井平學を以被仰渡、御案文御渡被成り付、於御奉行所相認印形仕差出申り、右之扣一通差上申り、

一右之者共果り節之儀、何分ニ表不被仰渡候付、平學迄相尋申り處、先例之通御届可有御座よし承候、

一漂着者共日帳其外之書付等此内被成御取揚置り處、其内日帳二冊被留置、惣様御返被成り付、右之者共は相渡申り、於唐もらい銀子并指かねハ江戸に表被差上、

御用相濟り由に御返被成り、右者共所持道具品書帳一冊差上申り、

一右付の漂着者共貳拾人警固川上彌右衛門（親符）、橋口次兵衛（家應）、

肝煎中馬善右衛門、幸領足輕拾五人今日小早兩艘に乗船、中途入念列歸り様申達差越申り、

一先達の申上り通、右之者共御國元に致到着候ハ、伯耆守様に仰渡之御答御禮可有御座奉存り、右付の伯耆守様何比可被成御立哉と内々承合り處、九月廿三日可被成御立と御内々御日取有之候由承候間、右之御考を以御使者可被差越り、且又伯耆守様に御禮物并御家老御用人に被下物之儀、（長崎町年寄）藥師寺久右衛門に致内談候處、重ク可被仰付無之り、先年久留米之者四人唐に致漂着候節、御引渡以後兩御奉行に表晒十疋ツ、被進、兩御家老に表銀五枚ツ、宗門方御取次御用人兩人に金子五百疋ツ、被進り間、右例之通被仰付りる表相濟可申候得共、此節表琉球人乗組居り付、前々之漂着者共は相替、伯耆守様に表別る御世話被思召、御奉行所御厄害ニ表罷成、其上御國表御家柄表格別り間、久留米より表少く御付届之品相増り様有之可然と奉存り由申候付、

御禮物品之儀表於御國許何分ニ表御見合有之善り得共、私存寄之趣表申越度由申達、品之儀表又別紙之通申談、爲御見合右別紙差上申り、此上表何分ニ表御吟味次第奉存り、

一田附阿波守様に、右之御禮被仰達等なる者無御座り得共、伯耆守様に御禮使被差越儀候間、爲御見廻何そ一

種被進こる可有御座外哉、

一御引渡首尾好相濟外ハ、御國元より以御使者御禮者可被仰達外得共、伯耆守様方段、御丁寧爲被仰聞事外間、御國元より之御禮相濟外以後、私より表御肴一折進上仕、御禮申上可然と存外由、久左衛門より兼る存寄之趣承置外得共、押かけ進上表難仕候付、服部政太郎に申合、(長崎奉行家老)長谷川嘉内は政太郎存寄之筋こる致沙汰外處、其通存外ハ、勝手次第可仕由挨拶こる外由承外間、追る御禮使之勤相濟候引次、御物調こる御肴一折進上仕度外、乍然何様可仕外哉、奉得御差圖外、

一送來外唐船に被下物之儀付る者、私所存之趣久左衛門に委細申込、御奉行所に御内々致沙汰置外段者、先達る申上置外通御座外處、唐船主に御米七拾表被下、其上順番無御構早速歸帆可仕旨被仰渡、別る難有奉存外由承知仕、先例之一筋不相替結構被仰付安堵仕外、右被下物之儀仰渡無之候ハ、何様可被仰付哉、御差圖次第奉存外由相伺可申外旨被仰渡置、其心得こる罷在候得共、右之通被仰付外由、昨日於御奉行所、平學并久左衛門より表申聞外付、最早奉得御差圖外、不及差扣申外、

一最初者唐船主に御國より被下物可有之と致沙汰外由、

一通り迄を承候處、其後又く承外者、漂着者共佐浦に滞留仕外内者、長崎に船仕出外問屋揚相公と申者之所に被差置、右揚相公甥三官と申者、毎度長崎に罷越、日本言葉少く通申外付、漂着者共何角差引いたし長崎迄送來、佐浦より船中迄悉皆世話爲仕由御座外、依之三官より御褒美之願申出、通事共より取持申外得共、先例無之事外故、於御奉行所表難被成との御沙汰之由、左候得者三官に表御國方被附御氣外無之外、先年御國船致破損、水主共四人溺居外を唐船より助揚、長崎に乘來外節さへ、御附人より謝禮之先例有之外間、此節者猶以其通可有之と通事共專沙汰いたし外由御座外故、先年詰合之附人心入を以唐船中に酒肴贈外儀と、前後輕キ事こる此節之例に表難準、殊御大法表有之事外得者、唐人に私より直贈物之儀曾る存寄表無之儀候、夫共御奉行所より屹被仰渡儀外ハ、格別外由、兼る申合置外趣を以久左衛門に致内談外處、唐船に御奉行所より被下物被仰付外ハ、三官に表同様可被仰付事候間、何分こる沙汰可仕由詰合申外、然處政太郎舅大通事官梅三十郎より三官に被下物之儀通事共へしらへ被仰

付、若薩州御屋鋪より御禮物之儀共御内談有之ハ、

通事共心入を以被下候筋可申談り、御屋鋪より御内談無之候る及手寄を以宜様致沙汰可然り、先例及無之儀外故御奉行所より老御沙汰難被成由、御用人より内承り、早竟此儀老政太郎内縁故右之通爲承管候故、沙汰なしにも難成、政太郎に申聞り由承候付、御差圖老格別、無左り得老、通事共存寄こゝ何様承りる及難致落着由、久左衛門に申達り趣を以致挨拶、乍其上政太郎存寄を以唐人に私より贈物之儀先例及無之事外故、何共其通こ老難仕よし三十郎及能請合り様申込り、

一右付の又々三十郎より、三官御褒美付る老通事共しらへ之趣、御奉行所に段々申上置り間、私より及三官始終世話仕り段老船頭より申出り通、御奉行所に申上り様有之度旨、政太郎こゝ承り付、御褒美抱り候る申上り儀老絶る難成候、然老三官より申上たる由り得老、漂着者共申出り趣、一通り老私より及可申上儀候由致挨拶、御奉行所に罷出平學に取合、三官世話仕り段漂着者共申出り、右之段老三官より及可申出儀外故、承置様こ老難仕、平學迄申上り由申達り處、成程三官より及申出何そ相違之儀無之り、入念爲申出事り間、伯

看守様に可申上由申候、

一三十郎事老大通事之頭役こゝ何事及差引仕り故、右之者請合りハ、首尾克可相濟と存り處、三官伯父揚相公より、三官長崎へ致入津りハ、御褒美被仰付候様との儀、書翰を以通事共の段々頼越り由御座り、夫故被下物無之り及頼越り詮無之候故、先例を引、私より謝禮物有之候様こ折角爲申談事之由承候付、三十郎壹人に申込り迄こゝ老無心元存り故、當年番三十郎粹大通事林三郎太と申者に及政太郎より段々頼込り様申含、父子申談御奉行所に宜様申上り由、内々承居り處、此節三官に及爲御褒美御奉行所より御米三十俵被成下、別る難有奉存り由致承知り、米三拾俵こゝ相濟儀こり得老不重事り得共、最前老輕りる及銀子十貫目及可被下哉と申沙汰及有之、員數及然と不相究、第一

通事共所存を以新法相初り儀付る老難黙止事外故、久左衛門老勿論、三十郎父子に及段々申込り付、別紙之通被下物を及被仰付度と申上事御座候、

一右貳拾人之者共船中飯米・故實代・仕錢等老、此内御屋敷に格護仕置り通、先出入を以渡方申渡、物奉行に御屋代より送狀相附差越申り間、拂切こゝ及又老船頭

上納之筋ニ由テ御法樣次第可被仰渡候、

右之段早々宿次を以申上テ、被仰上可被下テ、以上、

〔寛保二年〕  
七月廿四日

大脇正兵衛（為貞）

1824 継豊公御譜中

同年七月二十四日

大樹吉宗公使大久保郷七兵衛教平來于芝邸、賜御鷹所、搏撃之雲雀三於繼豊、即日嗣嫡宗信代繼豊二繼豊二未愈故宗三之信代、詣執政各位之第一、奉申謝之一、

1825 継豊公御譜中

正文在文庫

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之外、遂披露外處一段之御仕合テ、恐々謹言、

〔寛保二年〕  
八月四日

乘邑判

松平大隅守殿

乘邑

（在口裏）  
松平左近將監

1826 全上

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之外、遂披露外處一段之御仕合テ、恐々謹言、

〔寛保二年〕  
八月四日

乘賢判

松平大隅守殿

乘賢

（在口裏）  
松平能登守

1827

吉貴公御譜中

正文在文庫

返々矢野清右衛門その御地へくたりまいらせりせつ、御事つて仰被進本マ、テ御ねん入らせられり、仰被下り、くハしき御左右きかせられ、さそく御悦こ思しめしり、かすく御ほしめしり、こ御ほとこても御揃あそハし御機嫌よくいらせられり、何もよろしく御申上被成りへくり、めてたくかしく、御ふみのやう忝思しめしり、いまた殘暑もつよく御座りへ共、まつくその御地こゝ  
總州様御機嫌よく被爲入御事きかせられ、かすく御めて度思しめしり、扱ハ端午の御祝義

公方様方 大守様へ御はいりやう物あそハしり、 姫君様へ

公方様

右大將様方本ノマよりしきしを御はいりやうあそハし御事御悦仰被進、かすくめてたくかたしけなく思しめしり、誠にいく久しくといわるいらせられり、何もよろしく御申上被成りへくり、めてたくかしく、

寛保二年

6

ひち嶋

荻原

はやとさま

嶋津

岡田

權左衛門さま

御返事

藤え

1828

全上

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、六月九日東叡山

淨圓院様御位牌所 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤り、紙

面之趣各申談及 上聞り、恐々謹言、

寛保二年 八月十六日

松平左近將監

乘邑判

松平上總入道

1829

吉貴公御譜中 正文在文庫

御札令披見り、

公方様 右大將様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、將又同氏大隅守嫡子薩摩守儀嘉定御規式之節、初め着座被 仰付、御菓子頂戴之、難有由得其意り、紙面之趣各一覽之事り、恐々謹言、

寛保二年

八月十八日

松平左近將監

乘邑判

松平上總入道

1830

全上

御札令披見り、

公方様 右大將様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、將又同氏大隅守嫡子薩摩守事嘉定御規式之節、

初め着座被 仰付、御菓子頂戴之、難有由得其意り、紙面之趣令承知り、恐々謹言、

寛保二年

八月十八日

松平能登守

乘賢判

松平上總入道

繼豊公御譜中

正文在琉球國司

爲年頭之嘉儀被差渡使翰、殊更目錄之通贈給之、入念

段令祝着、猶期後喜之時、恐惶不宣、

〔寛保二年〕  
八月十八日 中將繼豊御判

謹上 中山王

宗信公御譜中

正文在琉球國司

爲年首之嘉儀被差渡使簡、殊更別錄之通贈給之、入念

之段令祝着、猶期後喜之時、恐惶不宣、

〔寛保二年〕  
八月十八日 侍從宗信御判

謹上 中山王

繼豊公御譜中

扣正文在右筆所

私領琉球國より大清國に相渡り進貢接貢料銀引替之儀、

正徳三巳年同氏上總入道より奉願り處、同員數を以引替

被仰付、其段琉球に申渡、中山王より御禮之儀上總入道

〔卷二〕御付紙  
從琉球國大清國に相渡候進貢接貢料銀吹替御免に付、中山王より御禮之儀伺、

迄使翰差越申り、其節在國故、薩州より以使札御禮申上

外、此節進貢接貢料銀吹替之儀御免被仰付、先年と素

譯表相替候得共、願之上御免爲被仰付儀御座り得者、中

山王より御禮之儀先年之通可仕候哉、御差圖被成可被下

外、以上、

〔寛保二年〕  
八月十九日

〔島津繼豊〕  
御名

全上

扣正文在右筆所

琉球國より大清國に相渡り進貢接貢料銀吹替之儀、正

徳三巳七月御免被仰渡、其段琉球に申渡、中山王より御

禮之儀、翌年夏至薩州上總入道迄使翰差渡り、右之段上

總入道方以使札申上り付る、午九月十三日井上河内守様

に御連名之一通差上申り、同日土屋相摸守様〔政〕一通、間

部越前守様〔餘〕・本多中務大輔様〔忠〕に御連名之一通、右使者を

以差上申り、以上、

〔寛保二年〕  
八月

全上

扣正文在右筆

一年頭御禮

思召事ニ付、

鳥津圖書殿家督被仰付外付、何そ御規式事、月次御禮之格式、先頃被仰出外得共、委敷無之故、左之通被

正文在文庫

吉貴公御譜中

1837

右之通御奉行所より被仰渡、

〔寛保二年〕 戊八月「廿三日」

去秋唐國舟山に令漂着、先比送來、在所に被差戻り様申達り薩州之者共、國元へ致着り由、依之右之者共相果候節御届之儀御尋之趣承届り、右人數死失之節者、先格之通御取計御届可被有之候、以上、

1836

繼豊公御譜中

扣正文在家老座

〔寛保二年〕 八月

正徳三巳年進貢接貢料銀引替御免被仰付り節、御當地御藏より同員數を以引替被下り、此節吹替銀御免ニ付る者部増を以京都銀座より吹替相渡申り、以上、

公義之御格式ニ有る

(前田吉徳)

御三家御着座之末席、松平加賀守様御着座被成り様成事ニ有、御一門并部屋栖之小源太殿之末席ニ一列ニ有無之、只今之次第ニ有り、

(貴傳 垂水家)

玄 蕃殿

(忠紀 越前家)

周 防殿

(久門 加治末家)

兵 庫殿

(貴澄 貴傳發子)

小源太殿

(久亮 宮之城家)

圖 書殿

右之心ニ有り、月次御禮者御一門一所ニ御出、御挨拶有之、其次圖書殿 御目見可有之外、大身分之人ニ其

身圖書殿之格之人有之時者、右之通ニ可有之外、

(繼豊三男、久家)

獨禮格之家筋ニ有無之、鳥津太郎次郎殿・入來院干之

(繼豊四男、定勝)

丞殿杯之様成人ハ、大身分之部屋栖之次ニ御禮可有之

外、御國持格之御大名之御禮之席ニ、御國持ニ有及無

之御方者、四品ニ被仰付り有ハ、其列ニ御成被成り様

成事ニ有り、

八月

(朱)

「寛保二年戊八月晦日嶋津圖書殿・嶋津太郎次郎殿・入來院干之丞殿御禮席之儀ニ付

總州様思召之次第御書付書通、中津檜齋を以町田仲右衛門承  
知之仕事(横力)  
知之仕事(後雄)

(挿入)

御咎目者并親族御構式目

一遠方寺入

一寺入之内御役料高・御役料銀米等、年數之割を以差引被下間敷外、

一高屋敷家財無御構、

但依料之譯者高半地被召上、又者屋敷所替被仰付

儀可有之候、家財者御構無之外、部屋栖之者及

家財没収被仰付儀可有之外、

一家ニ付被下外御切米等不及差引外、

但高被取揚程之御咎目之節者右御切米等可被取揚

外、

一家内慎、

一部屋栖之者寺入者其身妻子まで慎、

一寺入者之子別立外者者在宿、

一他家に養子に遣し置外子并縁付之娘無御構、

一子寺入之節者親に無御構、

一寺入者之家内にて罷在、當人兄弟并親類、御奉公相

勤外者無御構、

一寺入内門立置、小門より可致通融、小門無之者片扉

可立置、

一逼塞

一逼塞内御役料高・御役料銀米等月數日數之割を以被下間敷外、

一家ニ付被下外御切米等不及差引外、

一家内慎、

一部屋栖之者逼塞者其身妻子まで慎、

一別立之子、他家に養子に遣置外子并縁付之娘無御構、

一子逼塞之節、親に無御構、

一逼塞者家内に罷居外當人兄弟并親類、御奉公相勤外

者無御構、

一逼塞内門立置、小門より可致通融、小門無之者片扉

可立置外、

一閉門

一雖爲縁者親類、通融被差留外、病氣又者無據儀致到來外節者、親類之内被差免外親類、依願醫師通融被

差免外、

一出火ニ付立退外義被差免外、

一 閉門被仰付<sub>レ</sub>當人屋敷内に他之者罷在、相迦度存<sub>レ</sub>ハ、其通可有<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>、

一 部屋栖之者閉門者其身家之戸口窓可閉置候、親と同家に罷居<sub>レ</sub>者者時々吟味次第可被仰付<sub>レ</sub>、

一 屋敷不致所持、他之屋敷に罷居<sub>レ</sub>者閉門之御咎目被仰付<sub>レ</sub>節者、當人家之戸口窓可閉置<sub>レ</sub>、

一 屋敷帳面名代を頼罷居<sub>レ</sub>者閉門之節、名代之人も同屋敷に罷居<sub>レ</sub>者、其身家之戸口窓可閉置<sub>レ</sub>、名代之人同屋敷に罷居<sub>レ</sub>者、本門其外屋敷廻可閉置<sub>レ</sub>、

一 閉門内御役料高・御役料銀米等日數之割を以差引被下間敷<sub>レ</sub>、

一 依料之譯、右條之通都力重く被仰付者も可有<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>、其節ハ時々吟味之上可相究<sub>レ</sub>、

一 遠慮

一 御役料高・御役料銀米者不及差引<sub>レ</sub>、

一 月代仕間敷<sub>レ</sub>、

一 普請仕間敷<sub>レ</sub>、

一 一家内慎、

一 一部屋栖之者ハ其身妻子迄慎、

一 在宿

一 御役料高・御役料銀米者不及差引<sub>レ</sub>、

一 月代仕間敷<sub>レ</sub>、

一 普請仕間敷<sub>レ</sub>、

一 一家内慎、

一 一部屋栖之者其身妻子迄慎、

一 一 慎

一 月代仕間敷<sub>レ</sub>、

一 普請仕間敷<sub>レ</sub>、

一 御斷申上置、何分も不被仰付内差扣罷在<sub>レ</sub>者

一 脇方徘徊仕間敷<sub>レ</sub>、

一 月代仕間敷<sub>レ</sub>、

一 普請仕間敷<sub>レ</sub>、

一 一家内ニ勤有<sub>レ</sub>者ハ可得差圖<sub>レ</sub>、

一 江戸御國元往返ニ付、何分之仰渡延引相成、其内差支有之者之義者、勤方并脇方徘徊・月代・普請等之義時々可得差圖外、

一 怪我ニ付御斷申上置外者

一 御役所勤方之義、支配頭に可得差圖外、

一 脇方徘徊仕間敷外、

一 江戸御國許往返ニ付、何分之仰渡延引相成、其内差

當り支有之者之義ハ、脇方徘徊・普請等之可得差圖外、

外、

一 禁足

一 月代仕間敷外、

一 一家内無御構、

一 在所之外他出被差留外、

一 在所徘徊無御構、

一 他國出被差留置外者

一 御領内徘徊無御構、

一 出家押隠居

一 他國出被差留外、

一 依譯外城又ハ遠島に被遣置外者も可有之外、

一 所持道具無御構、

一 諸門首逼塞等にて御咎目被仰渡外節者、御寺相迎し、末寺又者脇寺に可罷居外、

一 科銀、科錢、科普請、科祝

右 上納不相濟内ハ當人并家内差扣へ可罷居外、

一 士外之者ハ科錢被仰付事外得とも、吟味之上、士外之

者にも逼塞被仰付事も可有之外、

一 商賈等被差留外者

一 月代仕間敷外、

一 見せ店閉家内遠慮、

一 船持居船御咎目之者

一 在所徘徊無御構、

一 一家内無御構、

一 首尾御役御免之者

一 當人小普請に可被召入外、無高之者ハ小普請並被仰

付外、

但 小普請被仰付外者一帳ニ可記置外、

一 御番其外御奉公不被仰付外、

一 小普請銀上納可仕外、小普請並不及其沙汰外、

一 重御役之所に見廻外義可差扣外、

一 脇方徘徊不及遠慮外、

繼豊公御譜中  
扣正文在右筆所

一年頭五節句其外 御目通に罷出<sub>レ</sub>義御構無<sub>レ</sub>之、

但小普請之内遠慮被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>者ハ格別ニ<sub>レ</sub>、

一 小普請・小普請並被<sub>レ</sub>仰付置<sub>レ</sub>者之子とも、其外家内  
札之者にても、諸御奉公御番までも不被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>、家  
中<sub>レ</sub>奉公いたし<sub>レ</sub>義無御構、

一 右外家内無御構、

一部屋栖にて首尾不宜御役御免之者

一 諸御奉公不被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>、

但 部屋栖にて右躰之者者、小普請方帳面に名書不  
相載、別冊ニ名前可<sub>レ</sub>記置<sub>レ</sub>、

一 以後家督之願申出<sub>レ</sub>節、此者之儀諸御奉公申付間敷  
旨、何年何月被<sub>レ</sub>仰渡<sub>レ</sub>段、與頭より可<sub>レ</sub>申出<sub>レ</sub>、

右御科目式目之内書抜相濟候條、時々不及差圖、

御格式之通可<sub>レ</sub>申渡<sub>レ</sub>、若式目之通申渡かたく節者

可得差圖<sub>レ</sub>、且又右御咎目者之内、依譯者當人并

家内・親族迄之御咎目相替儀も可有<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>、右躰之

節者分<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>申渡<sub>レ</sub>、

寛保二年壬戌八月

御家老座

繼豊公御譜中

正文在文庫

先達<sub>レ</sub>申上<sub>レ</sub>候私領薩摩國川邊郡七嶋之内諏訪之瀬嶋之船

壹艘遭難風、去年七月唐<sub>レ</sub>致漂着候處、唐人より致介抱

置、人數貳拾人、當五月長崎<sub>レ</sub>送來候付被<sub>レ</sub>遂吟味、何そ

不審之儀無<sub>レ</sub>之、彼地<sub>レ</sub>差置候家來<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>預置<sub>レ</sub>處無御

構、當七月廿三日被<sub>レ</sub>相渡<sub>レ</sub>付、八月三日國許<sub>レ</sub>連歸候旨、

家來共申越<sub>レ</sub>、此段申上<sub>レ</sub>、以上、

〔寛保二年〕

九月七日

御名

〔采〕

〔右御届書御用番松平伊豆守棟江被<sub>レ</sub>差出<sub>レ</sub>處ニ、當七月御届被

仰出<sub>レ</sub>節之御老中棟江茂御首尾之儀ニ而<sub>レ</sub>故、同案を以御届

可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰出<sub>レ</sub>旨、伊豆守棟御差圖有<sub>レ</sub>之、本多中務太輔棟江茂同案

を以御届被<sub>レ</sub>仰出<sub>レ</sub>候〕

爲重陽之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲松平伊豆守可  
述<sub>レ</sub>也、

〔采〕

〔寛保二年〕 九月七日



薩摩

中將殿

爲重陽之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之外、遂披露外處一段之御仕合候、恐々謹言、

〔寛保二年〕 九月七日 松平能登守 乘賢判

松平大隅守殿

嚮是島津但馬守忠就日州佐土原城主請訪宗家且謁祖父吉貴上

許、因十月二日發城經高岡・高城・都城・末吉之道、

同五日至福山、翌六日觀驅馬于彼野歲以八月爲期然忠就、豫請觀覽之故代期

時應需與野馬六匹牝五匹、使三人牽之於佐土原、同

七日航魔府、僑居客舍、同九日登府城、島津玄蕃貴

傳擬大老職、島津大藏久純老、若年寄・大目附・用人等各迎

之、過對面所入書院、獻白麻擬・煙草各一・鴨一於

繼豐、色奉書紙一匣・薯蕷一籠・鴨一籠・美酒一樽於吉

貴一修禮頭年繼豐種疾病淹留于、東都芝邸故不能執禮矣、賜菓子・碾茶而退去、直登

大磯館、謁于吉貴、賜菓子・碾茶而退去、繼豐使

小納戸役者贈白銀三百枚、宗信亦賜重一組上、同十一

日再登磯館、與吉貴緩話、此日吉貴使島津登久贈紗綾

十、同十五日吉貴徵于磯館、賜饗膳、且贈琉球織物匣、

夾竹桃〔鑑〕・孔翠尾羽〔鑑〕、時請還鄉之暇於吉貴、而后留

滯客舍、詣于諸寺、同十八日辭魔府取路於谷山、

喜入、揖宿・山川・穎娃・坊・加世田、詣日新寺、歷

阿多・田布施・伊作・永吉・吉利・日置・市來・向田、

久見崎・西方・阿久根・出水・大口・金山野・栗野・加

久藤・飯野・祓川・東霧島・野尻・綾等、遊覽諸名勝

舊跡、而十一月十四日還佐土原城、

嚮是日州佐土原城主島津但馬守忠就請訪宗家且謁

祖父吉貴上、乃許焉、因今茲十月二日忠就發居城經高

岡・高城・都城・末吉之通路、同五日至福山、翌六日

過福山野、觀馬追每歲以八月爲馬追之期然今、年忠就豫請觀覽之故如此矣、時應二忠就之

需、與牧馬牝五匹、則使中間者牽送之於佐土原也、

同七日航于魔府、僑居客舍、同九日忠就登府城、島

津玄蕃貴傳擬大老職、家老島津大藏久純・若年寄・大目附及

用人等各逢迎之、過對面所入書院、獻穗北白麻一

匣・煙草一匣・鴨一籠于繼豐、色奉書紙一匣・薯蕷一籠・

鴨一籠・美酒一樽于吉貴、修訪宗家之禮頭年繼豐種疾病淹留于東都芝邸

故不能執聽矣

乃賜菓子・碾茶、而退去、直至大磯館入謁于吉貴、乃賜菓子・碾茶、而還客舍、於是繼豐使小納戸役者贈白銀三百枚、宗信亦贈重一組、同十一日忠就又至大磯館與吉貴有閑談、既而出館還客舍、此日吉貴使島津登久連贈紗綾十卷、同十五日吉貴徵忠就於大磯館賜饗應、且贈琉球織物一匣・夾竹桃一鉢・孔雀尾羽數莖矣、此日請還鄉之暇於吉貴、乃出館、忠就留滯數日之際詣于諸寺院、同十八日辭廳府、而取路於谷山・喜入・揖宿・山川・穎娃・坊・加世田、詣日新寺、轉歷阿多・田布施・伊作・永吉・日置・市來・向田・久見崎・西方・阿久根・出水・大口・山箇野・金山・栗野・加久藤・飯野・被川・東霧島・野尻・綾等、遊覽諸名勝舊趾、而十一月十四日還佐土原城矣、

1844

吉貴公御譜中

同氏上總入道事數年病氣付參府難叶、度々御斷申上、緩々致養生外得共次第年罷寄外之故、別不行歩相成外、遠境之所乘輿乘船等迄難成、前方及可申上候温泉入湯及、右之通故難仕御座外、私儀及病氣之奉願歸國不仕候付、久々不致對面外得共、弥氣力衰、殊更六拾有餘

罷成外得者、老病旁以遠境之所參府難叶致迷惑候、依之參府御斷申上外旨申越外、久々、

御目見不仕外條、此以後旅行等及罷成外程御座外者參府仕、奉窺御機嫌外様可奉願由、是又申越外、以上、

(朱)「寛保二年」十月十八日 松平大隅守

令承知外、

(朱)「右御書付、寛保二戊十月十八日御用頼之朽木大和守様を以、本多中務大輔様江被差出外處、同廿二日御留守居相良弥一兵衛被召呼、例年之通令承知外と御付札ニ而被仰渡外事」

1845

繼豐公御譜中

正文在文庫

重陽之 御内書可相渡外間、明日五半時 御城江家來可被差出外、以上、

(朱)「寛保二年」十月廿日 松平伊豆守

松平大隅守殿

1846

全御譜中

去歲六月二十三日德川刑部卿宗尹有可、娶一條前關白兼香公之令愛稱後之 台命甲、因今茲繼豐奉執政松平左

近將監乘邑之教諭<sup>一</sup>爲<sup>レ</sup>助<sup>二</sup>之資裝<sup>一</sup>、十月廿六日使<sup>二</sup>家臣有

川幸右衛門貞利<sup>一</sup>爲<sup>二</sup>使節<sup>一</sup>、呈<sup>三</sup>進黑桐<sup>一</sup>黒塗袴御紋敷一箇小道

於養仙院<sup>一</sup>初稱八重姫君、前關白房公第三子有隣、呼稱信女也、爲房輔公養女、又爲前大樹綱吉公御養女、以嫁于水戸中將吉字矣、兼香公者房輔公未男而爲一條前關白兼輝公之養子、故發仙院與後庭實從弟也

矣、而十一月二十五日宗尹整<sup>二</sup>婚儀<sup>一</sup>、以故翌二十六日繼豐以<sup>二</sup>使者<sup>一</sup>獻<sup>二</sup>佳肴於

大樹吉宗公及

右大將家重公、奉<sup>レ</sup>賀<sup>三</sup>婚儀成<sup>一</sup>焉、乃執政見<sup>レ</sup>投<sup>二</sup>奉書<sup>一</sup>也、

1847

吉貴公御譜中

正文在文庫

德川刑部卿殿婚姻相濟<sup>レ</sup>付<sup>ル</sup>、爲御祝儀鯛一折被獻<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>、

各申談遂披露<sup>レ</sup>處一段之御仕合<sup>レ</sup>、恐<sup>レ</sup>謹言、

十一月廿六日

土岐丹後守

賴稔判

松平上總入道

1848

全上

德川刑部卿殿婚姻相濟<sup>レ</sup>付<sup>ル</sup>、爲御祝儀鯛一折被獻<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>、

遂披露<sup>レ</sup>處一段之御仕合<sup>レ</sup>、恐<sup>レ</sup>謹言、

朱力年

寬保二年

十一月廿六日

松平能登守

乘賢判

1849

繼豐公御譜中

正文在文庫

松平上總入道

德川刑部卿殿婚姻相濟<sup>レ</sup>付<sup>ル</sup>、爲御祝儀鯛一折被獻<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>、

遂披露<sup>レ</sup>處一段之御仕合<sup>レ</sup>、恐<sup>レ</sup>謹言、

(朱)

十一月廿六日

賴稔判

松平大隅守殿

賴稔

(朱)  
「在口裏」

土岐丹後守

1850

全上

德川刑部卿殿婚姻相濟<sup>レ</sup>付<sup>ル</sup>、爲御祝儀鯛一折被獻<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>、

遂披露<sup>レ</sup>處一段之御仕合<sup>レ</sup>、恐<sup>レ</sup>謹言、

(朱)

十一月廿六日

乘賢判

松平大隅守殿

乘賢

(朱)  
「在口裏」

松平能登守

宗信公御譜中

正文在文庫

徳川刑部卿殿婚姻相濟外付の、爲御祝儀鯛一折被獻之外、

遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔寛保二年〕十一月廿六日 頼稔判

〔在口裏〕松平薩摩守殿 頼稔

〔在右裏〕土岐丹後守

徳川刑部卿殿婚姻相濟外付の、爲御祝儀鯛一折被獻之外、

遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔寛保二年〕十一月廿六日 乘賢判

〔在口裏〕松平薩摩守殿 乘賢

〔在右裏〕松平能登守

〔挿入〕「雜抄」

嶋方ニる嶋隠居居住之者并流人共差廻御奉公付差越外者

之家來・下人、又老流人中間に取替米等致シ外節、宿許

返弁之筋ニ不致、於嶋返濟可致外、自然及飢躰之者ニ

宿許返濟ニる無之外得老難叶者老、屋久嶋老庄屋、七嶋

老郡司、道之嶋老與人并其村之掟承付取替、右之趣證文

ヲ以宿許に返濟之儀申斷外様可致外、

右之通此節嶋々江申外間以來證文於有之老、宿本方返

米相渡間敷外、此旨與中諸外城支配中に不洩様可申渡

旨表方に致通達、御勝手方に老寫ヲ以可相達外、  
〔龍山久初〕主計

寛保二年戌十一月

継豊公御譜中

扣正文在右筆所

私儀去酉年御暇年ニる御座外處、病氣全快不仕外付、四

月國許に之御暇被下置候外表、長途之旅行難叶外故、滯

府仕度之旨、去々申十二月奉願外處、其節願之通滯府被

仰出、緩々遂保養難有仕合奉存外、然老來年御暇年ニる

御座外間、病氣快候老來年四月國許に之御暇可奉願外得

共、病氣今以相勝不申同篇ニる、御禮日出仕表不奉願外、

迎表來年四月國許に之御暇被下置外表、只今之筋ニる

者中々長途之旅行難叶奉存候、久々國許に罷越叶條、少々快叶者御暇可奉願叶得共、右之病氣ニ付毎度滞府之願申上、自由ケ間敷事御座候得共、可罷成儀ニ叶ハ、來

年表致滞府、於爰許得と養生仕度叶、尤來春迄見合、至其御滞府之願可申上叶得共、只今之病躰ニ而者全快之程難計御座叶、依之此節奉願叶、以上、

〔寛保二年〕 十二月六日 御名

〔御付札〕

願之通可有滞府叶、

〔右戌十二月六日朽木大和守様を以、御用番松平左近將監様江被差出叶處、同七日右御付札之通被仰渡候付、翌朝御留守居以御使者御禮被仰上叶〕

1855

繼豊公御譜中

正文在文庫

今朝蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之外、遂披露叶處一段之御仕合叶、恐々謹言、

〔寛保二年〕 十二月十八日 乘邑判

松平大隅守殿

乘邑

1856

全上

今朝蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之外、遂披露叶處一段之御仕合叶、恐々謹言、

〔寛保二年〕 十二月十八日 乘賢判

松平大隅守殿

乘賢

〔在口裏〕 松平能登守

1857

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見叶、

公方様益御機嫌能被成御座、十月十四日増上寺御參詣之儀被承之、恐悦旨尤候、紙面之趣各申談及上聞叶、恐々謹言、

〔寛保二年〕 十二月十八日 松平左近將監 乘邑判  
松平上總入道

〔在口裏〕 松平左近將監

1858 吉貴公御譜中

舊是十月十八日繼豐在江府、呈上訟書於執政本多中務大輔忠良、稟吉貴舊病未愈氣力漸衰、數歲不修職之禮、執政承達之、而旨趣傳繼豐、吉貴乃聽之、呈上書牘於執政奉申謝之、投奉書開于左、

正文在文庫

御札令披見外、

公方樣 右大將樣 大納言樣益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤外、將又其方儀病氣今以同篇付參府不被相伺之外、此以後少々表快外者參府仕度由、從同氏大隅守申聞外付、承置外旨相達外、依之被申越外紙面之趣各一覽之事外、恐々謹言、

朱力キ  
寛保二年 十二月十九日

松平左近將監  
乘邑判

松平上總入道

1860 全上

御札令披見外、

公方樣 右大將樣 大納言樣益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤外、將又其方儀病氣今以同篇付參府不被相伺之外、

此以後少々表快外者參府仕度由、從同氏大隅守申聞外付、承置外旨相達外、依之被申越外紙面之趣令承知候、恐々謹言、

謹言、

朱力キ  
寛保二年 十二月十九日

松平能登守  
乘賢判

松平上總入道

1861 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、就寒中

公方樣 右大將樣 大納言樣御機嫌被相同之外、益御安全御儀外間可御心易外、隨而賜一箱被獻之外、各申談遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ  
寛保二年 十二月廿二日

松平左近將監  
乘邑判

松平上總入道

1862 全上

御札令披見外、就寒中

公方樣 右大將樣 大納言樣御機嫌被相同之外、益御安全之御事候間可御心易外、隨而賜一箱被獻之外、遂披露

外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力\*  
寛保二年 十二月廿二日

松平能登守  
乘賢判

松平上總入道

1863 繼豊公御譜中

正文在文庫

爲歳暮之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲土岐丹後守可  
述外也、

(朱)  
「寛保二年」 十二月廿七日



薩摩

中將殿

1864 全上

爲歳暮之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之外、遂披露外  
處一段之御仕合外、恐々謹言、

(朱)  
「寛保二年」 十二月廿七日

松平能登守  
乘賢判

松平大隅守殿

1865 繼豊公御譜中

正文在文庫

大納言様は御破魔弓一節以使者被獻之外、首尾好遂披露  
候、恐々謹言、

(朱)  
「寛保二年」 十二月廿七日 乘賢判

松平大隅守殿

(朱)  
「在口裏」 松平能登守

乘賢

1866 繼豊公御譜中

正文在文庫

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之外、遂披露候處一段之御  
仕合外、恐々謹言、

(朱)  
「寛保三年」 正月七日 乘賢判

松平大隅守殿

(朱)  
「在口裏」 松平能登守

乘賢

1867 全上

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之、遂披露外處一段之御仕合、恐々謹言、

〔寛保三年〕  
正月七日

信祝判

松平大隅守殿

信祝

〔朱〕  
〔在口裏〕  
松平伊豆守

1868

吉貴公御譜中

正文在文庫

誠にいく千とせ萬々年も御めてたさのミかきりあらすといわる入らせられ、此よしよろしく御申上成へくり、返々菊姫様もよろしく御しうき仰上られ、宜申上成へくり、めてたくかし、年始の御祝儀、となたもをなし御事にいわる入らせられ、まつ々その御地にて

總州様御機嫌よく被爲入、春を御むかへあそはし、御にき々しく御いわるあそはしハんと、かす々御めて度おほしめし、そのほか様方も御きけんよくいらせられ、御めてたき春に移らせられ、御にき々しく御いわるあそはしハんと一入御めて度思召、こ々御ほと

こても

大守様はしめさせられ御揃あそはし御機嫌よく、御にき々しく御いわるあそはし、扱ハ此御目録のごとく、年始の御しうき御いわるあそはし被進外御事御さ、めてたくかし、

〔朱カキ〕  
寛保三年

ひち嶋(範房) 荻原  
集 人さま 岡田  
しま津(久通) 權左衛門さま 藤え  
人々

1869

全上

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之、遂披露外處一段之御仕合、恐々謹言、

〔朱カキ〕  
寛保三年  
正月十一日

土岐丹後守 頼稔判

本多中務大輔 忠良判

松平伊豆守 信祝判

松平左近將監 乘邑判

松平上總入道

吉貴公御譜中

正文在文庫

爲年頭之御祝儀、

右大將様 大納言様は以使者御太刀・御馬代黄金被獻之

外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱カキ

寛保三年

正月十一日

松平能登守

乘賢判

松平上總入道

繼豊公御譜中

正文在文庫

吉書

一 神社佛閣修造興行事、

一 可專勸農事、

一 可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨可有沙汰之狀如件、

寛保三年正月十一日 繼豊御判

全上

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被

獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(卷)「寛保三年」

正月十一日

信祝判

松平大隅守殿

(朱)「在右裏」

松平伊豆守

信祝

全上

爲年頭之御祝儀、

右大將様 大納言様は以使者御太刀・御馬代黄金被獻之

外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(朱)

「寛保三年」

正月十一日

乘賢判

松平大隅守殿

(朱)「在右裏」

松平能登守

乘賢

宗信公御譜中

正文在納戸方

公方様より

薩州様は

御納戸奉行は

御刀 大和志津代金二拾枚折紙有  
長二尺三寸二分半

一腰

一御三所物赤銅色繪牛花車鋪咄 (マ)

一御籠二重金

一御切羽金

一御鐔赤銅磨

一御縁赤銅七子

一御柄鮫白糸卷

一御鞘黒塗

一御鷓目金

一御下緒紫

一御小刀伯耆守藤原信高

一御袋緞子

右老元文四年未十二月十一日

薩州様於御黒書院御元服之節被遊御拜領外、右御道具

太守様御納戸御讓物之内致格護、後年紛敷無之様帳面

可記置外、以上、

寛保三年亥正月十一日

(種子島時成)

織部

(祐山)

主計

1875

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 右大將様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悅

旨尤外、然者舊冬徳川刑部卿殿婚姻相濟外段被承之、目

出度被存由得其意外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々

謹言、

朱力平 寛保三年

正月廿一日

松平伊豆守

信祝判

松平上總入道

1876

全上

御札令披見外、

公方様 右大將様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悅

旨尤外、然者舊冬徳川刑部卿殿婚姻相濟外段被承之、目

出度被存由得其意外、紙面之趣及言上候、恐々謹言、

朱力平 寛保三年

正月廿一日

松平能登守

乘賢判

(島津久重)

全

(島津久重)

大藏

松平上總入道

1877 繼豊公御譜中

寛保三年正月二十一日繼豊奉<sub>レ</sub>賀<sub>二</sub>

大樹吉宗公六十壽算<sub>一</sub>、使<sub>三</sub>家臣<sub>留</sub>守<sub>四</sub>本莊藏堯言登<sub>三</sub>柳營<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>檜之間<sub>一</sub>就<sub>二</sub>奏者番松平豊後守資訓<sub>一</sub>獻<sub>二</sub>鮮鯛一折<sub>一</sub>、乃執政見<sub>レ</sub>投<sub>二</sub>奉書<sub>一</sub>也、

全上

正文在文庫

御賀之爲御祝儀、鯛一折被獻之外、遂披露<sub>レ</sub>處一段之御仕合<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

<sup>(朱)</sup>「寛保三年」 正月廿一日 信祝判

松平大隅守殿 <sup>(島津繼豊)</sup>

松平伊豆守 <sup>(朱)</sup>「在右裏」

1879 宗信公御譜中

正文在文庫

御賀之爲御祝儀、鯛一折被獻之外、遂披露<sub>レ</sub>處一段之御

仕合<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

<sup>(朱)</sup>「寛保三年」 正月廿一日 信祝判

松平薩摩守殿 <sup>(朱)</sup>「在口裏」  
信祝

松平伊豆守 <sup>(朱)</sup>「在右裏」

1880 吉貴公御譜中

正文在文庫

猶<sub>レ</sub>何も<sub>レ</sub>よろしく申上まいらせ<sub>レ</sub>へ<sub>レ</sub>、めてたくかしく、

十二月廿三日付<sub>二</sub>て御ふみ下され<sub>レ</sub>、

刑部卿様 御簾中様御安全に御座なされ、御めて度覺しめし<sub>レ</sub>由、しかれば先月廿五日御婚姻濟せられ<sub>レ</sub>段御めて度覺しめし<sub>レ</sub>由、右之御祝儀

刑部卿様 御簾中様へ御申上被成<sub>レ</sub>御ふみの趣、よろしく申上まいらせ<sub>レ</sub>へ<sub>レ</sub>、めてたくかしく、

<sup>(朱)</sup>寛保三年

松平 豊岡

上總入道様 御返事

浦尾

高瀬

全上

いかほともよろしく御禮御申あけ被成通にて、なを  
 〳〵餘寒もふかく御座りまゝ、なを御障あらせられ  
 す、御機けんよきやうことおほしめしり、なをはる  
 ふかく御めてたさとも仰られたくり、めてめてたく  
 かしく、

あら玉りぬる春のめてたさ、仰之よしにて御文のやう、  
 まつ〳〵その御地にて

總州様御機嫌好干とせのはるをまちへさせられ、千代萬  
 歳の御ことふき、御にき〳〵しく御いわぬすませられり  
 御事、數々御めてたくおほしめしり、こゝ御程こても  
 太守様初させられ御そろいあそはし御機嫌よく、春をま  
 ちへさせられ、御にき〳〵しく御ことふき御祝濟せられ  
 り御事ニ御座り、春の御祝儀と御座りて御ふみのやう、  
 殊ニ御目錄のとをりしんしられ、かす〳〵かたしけなく  
 覺しめしり、なを幾久しく萬〳〵年千代萬歳の外も御機  
 嫌好、幾はるも〳〵あひかハラすと祝〳〵入らせられり  
 御事ニ御座り、めてたくかしく、

朱カキ  
寛保三年

6

ひち嶋  
 隴津 隴津 人さま  
 權左衛門さま  
 萩原 岡田 藤枝

吉貴公御譜中

正文在文庫

返〳〵誠にいく久しくとの御事にて レ おほしめ  
 しり、なにもよろしく申上被成りへくり、 菊姫様  
 もよろしく仰上られたきとの御事ニ御さり、めてか  
 しく、

いまた餘もつよく御座りへ共、まつ〳〵  
本マ、(兼脱カ)

總州様御機嫌よく被爲入りや、被爲聞たく思しめしり、  
 こゝ御ほとこても御揃あそはし御きけんよく被爲入り御  
 事ニ御さり、扱ハ正月十六日ニハ

姫君様 菊姫様御同道にて御本丸へ御年禮に入らせられ  
 り、あいかハラす御にき〳〵しく御祝ひあそはしりて、  
 めて度御悦ニ思しめしり御事ニ御座り、夫ニ付此御はこ  
 の内にて

公方様御はいりやうあそはしりまゝ、あいかわらす御

すそわけに進しられ御事御座外、何もよろしく御申上  
被成りへくり、めてたくかしく、

朱力キ  
寛保三年 二月三日

ひち嶋

嶋津

人さま

荻原

嶋津

權左衛門さま

岡田

人々

藤元

1883 継豊公御譜中

正文在文庫

歳暮之 御内書可相渡り間、明日五半時 御城に家來可

被差出外、以上、

(朱) 一寛保三年 二月廿日

土岐丹後守

松平大隅守殿

1884 吉貴公御譜中

正文在文庫

今度

(備川孝直等、近衛氏)

天英院様三回御忌御法事御執行付ぬ、以使者御香奠被獻  
之外、於増上寺奉納之事情、右之趣及言上外、恐々謹言、

朱力キ  
寛保三年 二月廿九日

土岐丹後守

頼稔判

松平上總入道

1885 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、正月十日東叡山 御靈屋

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上

聞外、恐々謹言、

朱力キ  
寛保三年 三月十一日

土岐丹後守

頼稔判

松平上總入道

1886 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 右大將様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦

旨尤外、然者正月十六日

竹姫君様被爲 入外節、菊事御懇之蒙 上意、從

公方様 右大將様拜領物被 仰付之、其上從右衛門督殿

刑部卿殿及被遺物有之、且亦從

公方様同氏大隅守・薩摩守に及拜領物被仰付之、重難

1888

有由得其意外、紙面之趣各一覽之事外、恐々謹言、

朱力平  
寛保三年 三月十三日

土岐丹後守  
頼檢判

松平上総入道

全上

御札令披見外、

公方様 右大將様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然者正月十六日大奥に

竹姫君様被爲 入り節、菊事御懇之蒙 上意、從

公方様 右大將様拜領物被 仰付、其上右衛門督殿 刑

部卿殿より表被遣物有之、且又從

公方様同氏大隅守・薩摩守に拜領物被 仰付之、重疊難有由得其意外、紙面之趣令承知り、恐々謹言、

朱力平  
寛保三年 三月十三日

松平能登守  
乘賢判

松平上総入道

吉貴公御譜中

正文在文庫

猶く何もくよろしく申上まいらせり、めてかし

1889

二月十二日付にて御ふみ下されり、

公方様

右大將様 大納言様ますく御機嫌よくならせられ、御めて度覺しめしり由、しかれば正月七日御同氏大隅守殿をむらち御使にて、年頭の御祝儀御申上り所、御めミへ仰付られ、そのうへ 上意を蒙り、御料理被下り事、有かたき仕合に覺しめしり由、右之御禮御申上被成り御ふミの趣、よろしく申上まいらせり、めてたくかし、

朱力平  
寛保三年

松平

上総入道様

御返事

豊岡

浦尾

高瀬

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、正月廿四日増上寺 御靈屋

御参詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面趣各申談及 上聞

外、恐々謹言、

朱力平  
寛保三年 三月廿三日

土岐丹後守  
頼稔判

松平上總入道

1890 継豊公御譜中

扣正文在家老座

一筆致啓達り、當地那覇百姓貳人、誣訪瀬嶋船之雇水主  
この八重山嶋罷渡、歸帆之節唐致漂着、商船より去年五  
月長崎に送來り處、無御構段被仰渡被返下之り、右之次  
第二の唐致漂着り得共、御威光故首尾好被仰渡、難有次  
第奉存り、

太守様は右之御禮爲可申上如此御座り、可然様御披露頼  
存り、恐惶謹言、

〔朱〕  
「寛保三年」  
卯月十二日

御老中

中山王  
尚敬判

1891 継豊公御譜中

正文在文庫

今朝御香具一箱并丸熨斗一箱被獻之り、遂披露り處一段  
之御仕合り、恐々謹言、

〔朱〕  
「寛保三年」  
四月十八日

乘邑判

松平大隅守殿

乘邑

1892 全上

今朝御香具一箱并丸熨斗一箱被獻之り、遂披露り處一段  
之御仕合り、恐々謹言、

〔朱〕  
「寛保三年」  
四月十八日

乘賢判

松平大隅守殿

乘賢

〔朱〕  
「在右裏」  
松平能登守

1893 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、二月廿八日増上寺  
天英院様御靈前 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤り、紙面  
之趣各申談及 上聞候、恐々謹言、

朱力年  
寛保三年 四月廿六日

松平左近將監  
乘邑判

松平上總入道

1894 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 右大將様 大納言様益御機嫌能被成御座、三月

十三日

公方様徳川刑部卿殿亭に被爲 成り段被承之、目出度被

存由得其意外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

朱力年

寛保三年 閏四月十二日

松平伊豆守  
信祝判

松平上總入道

1895 継豊公御譜中

正文在文庫

大納言様に菖蒲御兜一飾以使者被獻之外、首尾好遂披露

候、恐々謹言、

(朱)

「寛保三年」

閏四月廿七日

乘賢判

1896

松平大隅守殿

乘賢

(朱) 一在右裏一  
松平能登守

継豊公御譜中

正文在文庫

御記録奉行に

御系圖系續被仰付外付、別紙申出趣左之通被仰付外、

一 姫君様御實方之儀、改選系圖之通、清閑寺様御官位大

納言、御實名表書載外様被仰付外、林家に御尋被仰達

不及外、

一 於喜代様御事御系圖可書載外、  
(吉貴養女、阿部正福老)

總州様御養女に被遊り年簡を以相記り得老、總州様

御子様末に相記善外得共、於喜代様御年生之時節を

以、御子様之次第相記筋に及可有之哉、其子細ハ

(吉宗養女、伊達宗村老)  
利根姫君様御養女様被 仰出

右衛門督様御妹様 刑部卿様御姉様之筋に外故、於

喜代様ニ及其御格を以、御系圖ニ可相記事ニ被 思召

上外、右ニ付難致儀表外ハ、重功申出外様被仰付外、

一 鳴津中務久茂息女

(高津光久) 寛陽院様爲御養女、先之鳴津但馬守殿に御縁與有之外  
(佐土原藩主、久雄)

事御譜中ニハ可書記外、右息女者但馬守殿死去以後、

鹿兒嶋居住ニ御家中同前ニ故、御系圖ニ者相記ニ

及間敷外、

一 嶋津圖書久(供)息女諦觀院殿

大玄院様爲御養女、先之嶋津淡路守殿(佐土原城主 惟久)御縁與、本御

家中ニ御得共、

大玄院様御養女被成り得者

總州様御兄弟之筋ニ故御譜中ニ記置、御系圖ニ表

於喜代様御同前可書載外、

右之通承知仕御系圖ニ書載外様可致外、

〔寛保三年〕五月

(種子島時成)  
織部

全上

正文在文庫

爲端午之祝儀、帷子單物到來歡覺候、委曲松平左近將監

可述外也、

〔寛保三年〕五月二日

吉宗公  
印

薩摩

中將殿

1898 継豊公御譜中

正文在文庫

爲端午之御祝儀、以使者御帷子單物被獻之外、遂披露外

處一段之御仕合候、恐々謹言、

〔寛保三年〕五月二日 松平能登守 乘賢判

松平大隅守殿

1899 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、四月廿日東叡山 御靈前

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上

聞外、恐々謹言、

朱力牛  
寛保三年 六月朔日 本多中務大輔 忠良判

松平上總入道

1900 全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、四月晦日増上寺 御靈屋

御參詣之儀被承之、恐悅旨尤<sup>レ</sup>、紙面之趣各申談及 上  
聞<sup>レ</sup>、恐<sup>レ</sup>謹言、

<sup>朱カキ</sup>寛保三年 六月朔日

本多中務大輔 忠良判

松平上總入道

1901 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見<sup>レ</sup>、就酷暑之節

公方様 右大將様 大納言様御機嫌被相伺之<sup>レ</sup>、益御勇  
健御儀<sup>レ</sup>間可御心安<sup>レ</sup>、隨<sup>レ</sup>齎節一箱被獻之<sup>レ</sup>、各申談  
遂披露<sup>レ</sup>處一段之御仕合<sup>レ</sup>、恐<sup>レ</sup>謹言、

<sup>朱カキ</sup>寛保三年 六月六日

土岐丹後守 賴稔判

松平上總入道

1902 全上

御札令披見<sup>レ</sup>、就酷暑之節

公方様 右大將様 大納言様御機嫌被相伺之<sup>レ</sup>、益御安  
全之御事<sup>レ</sup>間可御心易<sup>レ</sup>、隨<sup>レ</sup>齎節一箱被獻之<sup>レ</sup>、遂披  
露<sup>レ</sup>處一段之御仕合<sup>レ</sup>、恐<sup>レ</sup>謹言、

<sup>朱カキ</sup>寛保三年 六月六日

松平能登守 乘賢判

松平上總入道

1903 継豊公御譜中

正文在文庫

今朝琉球布一箱・砂糖漬天門冬一器・赤貝塩辛一器・琉  
球泡盛酒二壺被獻之<sup>レ</sup>、遂披露<sup>レ</sup>處一段之御仕合<sup>レ</sup>、恐  
<sup>レ</sup>謹言、

<sup>朱</sup>「寛保三年」 六月六日

賴稔判

松平大隅守殿

賴稔

<sup>朱</sup>「在右裏」 土岐丹後守

1904 全上

今朝琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・赤貝塩辛一器・泡  
盛酒二壺被獻之<sup>レ</sup>、遂披露<sup>レ</sup>處一段之御仕合<sup>レ</sup>、恐<sup>レ</sup>謹  
言、

<sup>朱</sup>「寛保三年」 六月六日

乘賢判

松平大隅守殿

乘賢

(朱)  
〔在右裏〕  
松平能登守

1905

継豊公御譜中

正文在文庫

端午之 御内書可相渡り間、明日五半時 御城に家來可

被差出外、以上、

(朱)  
「寛保三年」  
六月廿四日

松平左近將監

松平大隅守殿

1906

吉貴公御譜中

正文在文庫

なをく御表よりも御申上外へとも、なを御申上被

成りとの御事、何もくよろしく申上まいらせり、

かしく、

五月二日付にて御ふミ下されり、

公方様

右大將様 大納言様益御安全に御座なされ、御めて度覺

しめしり由、土用中なを以

右大將様御機嫌御伺被成り由、御ふミのとをりよろしく

申上まいらせり、めてたくかしく、

朱カキ  
寛保三年

松平

上總入道様

御返事

高瀬

浦尾

豊岡

1907

吉貴公御譜中

正文在文庫

返くいよく御機嫌よくいらせられ外や、なをき

かせられ度御ほしめしり、何もよろしく御申上成へ

く外、

菊姫様もよろしく仰上られり、宜申せとの御事御さ

り、かしく、

八期の御祝義となたもおなし御事にいわる入らせられ  
り、まつくその御地にて

總州様御初方々様御揃あそハし御機嫌よく被爲入、御に  
きく鋪御祝ひあそハしりハんと、かすく御めて度思

しめしり、こゝ御ほとこても御揃あそハし御機嫌よく、

御にきくしく御いわるあそハしり、扱ハ此御もく録の

ことく、八期の御しう義御いわるあそハし進しられり御

1909

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之外、遂披露外處一段

全上

1908

継豊公御譜中

正文在文庫

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之外、遂披露外處一段  
之御仕合外、恐々謹言、

〔寛保三年〕  
七月六日

乘邑判

松平大隅守殿

乘邑

〔在右裏〕  
松平左近將監

事ニ御座り、誠にいく萬々年も御繁昌の御事にて、相  
かへらす御祝義仰被進りやうにといわる入らせられり、  
此よし宜御ひろう御申上成へくり、めてたくかしく、

〔寛保三年〕  
七月三日

ひししま

津 人さま

をき原

嶋

權左衛門さま

岡田

人々

藤え

1910

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、五月八日東叡山 御靈前  
御參詣之儀被承之、恐悦旨尤り、紙面之趣各申談及 上  
聞外、恐々謹言、

〔寛保三年〕  
七月十二日

松平左近將監  
乘邑判

松平上總入道

1911

継豊公御譜中

同年七月十二日

大樹吉宗公使島田莊五郎政氏來于芝邸、賜御廬所、  
搏撃之雲雀十三於繼豊、即日嗣嫡宗信代繼豊、  
故宗信代之

之御仕合外、恐々謹言、

〔寛保三年〕  
七月六日

乘賢判

松平大隅守殿

乘賢

〔在右裏〕  
松平能登守

詣二執政各位之第二奉申謝之一、

全上

扣正文在家老座

〔奉〕御返答

渡唐銀吹替去年御願之通被仰渡外二付、從中山王御禮  
本文被由越越致事知候、猪兵衛去ル廿六日致書、勤方左之通相濟申候、  
次使者伊地知猪兵衛被差立書外段者、先月十六日一通

一文正徳三年吹替御免之節者

申越置外、正徳三年吹替御免之節者薩州迄使翰被差上、  
御當地方繼使者を以書翰被差上御勤相濟外付、右例を  
被出候外、御使札御勤ニ而候得共、此節者、御在府故、御書付ニ而可

以去年御用番様ニ御伺有之外處、先年之通と被仰渡外  
水野殿守薩江御内被爲被助進候ニ候故、此節被仰出候御書付も被入御内見  
付、其段琉球ニ申渡有之、此節南風原親方を以御禮書

候処、思召者無之候付、松平左近將監様江四本庄様、猪兵衛同進仕、猪兵衛  
翰被差越、先月十五日登、城被仰付書翰等差上外、  
薩州迄使翰被差上、其節者御在國ニ御當地方以使札

御御有之外、中山王右書翰者  
番様江可差出候、右之段左近將監様御差函被成候由、右御用人ニ而被仰聞、  
總州様迄被差上事外得共、御用番様江御内見被入置外

一右通書翰儀之ハ、太守様迄ニ被差上たる事外得共、御  
老中様江及被差出事外付、萬一書違共有之外者如何  
外付、奉同封を解、各致披見相違無之外付、白切封ニ

筋二亦被差出、追御奉書翰申渡、中山王右書翰及被相  
下外旨帳面ニ相見得外二付、右例を以奉伺趣有之外處、  
候付、御用番本多中務大輔様江庄殿、猪兵衛同進仕、御取次御用人千馬殿左

此節之儀も御當地方より繼使者伊地知猪兵衛來年江戶詰  
御門江取寄、右通り左近將監様御差函之旨を以申渡、御書付者猪兵衛差出、  
迄表被仰付被差越、直ニ相詰外様被仰付外付、今日三

中山王書翰御返事江藏より差出候処、御書付之紙被成御承知候由、右御取次

道中靜ニ被差立、右書翰并御目錄等被差越外間、致着  
ニ而被仰聞候、中山王書翰之儀者道中御返可被成由、御取次より庄藏承候段  
外ハ、猶又其元帳面等被相札、御勤相濟外様首尾可

申出候、書翰被成御返候者、何分ニも又、可申越候、右通ニ而御返候ニ而  
被致外、使者柄之儀及先年御使札御勤之節新御番被遣  
ニ支候儀者無之候付、此度被差越事候、此段者各為御存候、別紙御家文二通

外付、此節之儀も新御番之内外被差越外、此段者為御  
存外、  
一姫君様、太守様、薩州様江御家老中迄披露狀を以右御

禮進上物被差上外付、翌目錄三通差上申外、返札之儀  
品物之儀者相届次第可差上候、概三冊留置候  
者遂披露外段例之通可致首尾外、右進上物之内其元ハ  
差上外品之儀者先例之通差上可申外、御銘々様江進

上物帳三冊差上申外、右付の者、總州様江及進上物有  
之外付、御使番方直ニ磯江差上外、爲御存進上物帳一  
冊差越申外、  
一右通書翰儀之ハ、太守様迄ニ被差上たる事外得共、御

老中様江及被差出事外付、萬一書違共有之外者如何  
外付、奉同封を解、各致披見相違無之外付、白切封ニ  
筋二亦被差出、追御奉書翰申渡、中山王右書翰及被相  
下外旨帳面ニ相見得外二付、右例を以奉伺趣有之外處、  
候付、御用番本多中務大輔様江庄殿、猪兵衛同進仕、御取次御用人千馬殿左

此節之儀も御當地方より繼使者伊地知猪兵衛來年江戶詰  
御門江取寄、右通り左近將監様御差函之旨を以申渡、御書付者猪兵衛差出、  
迄表被仰付被差越、直ニ相詰外様被仰付外付、今日三  
中山王書翰御返事江藏より差出候処、御書付之紙被成御承知候由、右御取次

1914

越方ニ被相伺、其通被仰付外付、別錄之通と之文句此節者被相除、書翰認被差上たる事外、此段者爲御納得外、

右申越外間被達 貴間、御勤等相濟外ハ、九月中ニ〔卷〕「右之通首尾相濟候御書付写并例書写一通、御留守居首尾書一通差越申候、者使者御暇可被下外間、御返翰之儀者其御考ニ可間後且又中山王五之御返翰ニ通此節差越申候、早晚之通首尾可被成候、猪兵衛儀ニ不罷成様可被差越外、且又猪兵衛勤方相濟外者、直〔動方相濟候付、直ニ相結候様申渡候、以上〕ニ相詰外様可被申渡外、此段者爲御納得外、以上、

〔九月十三日〕

種子嶋織部

〔寛保三年〕 七月十八日

嶋津右平太

〔卷〕 穎娃内膳

〔上〕 嶋津 空

嶋津大藏

嶋津左衛門

〔卷〕 樺山主計殿

〔下〕 鎌田太郎右衛門殿

繼豊公御譜中

扣正文在右筆所

私領薩摩國加世田村之内野間御崎と申所は、去月十九日何方之船共不相知致破船、人數貳拾人計陸に揚居外を見

1915

當相尋外處、來朝東埔寨船壹艘人數七拾四人乘組、洋中ニ逢大風漂來致破船、六拾人者助命、拾四人致溺死、拾人之死骸者揚、殘四人之死骸不相見得由申出外、助命之唐人者人家を明除入置外、及飢外故令介抱、外廻入念申付、番人堅固付置、取揚外荷物ハ唐人一所ニ差置、近邊浦、稠敷番之者相付、流寄外荷物等取揚申外、死骸取置之儀唐人望次第可申付外、唐人并荷物・船等望次第、此方手船ニ如例警固之者相添長崎に可送越由、委細彼地奉行衆に國本家來共申達外旨申越外、此段申上外、以上、

〔卷〕 「寛保三年」 七月廿日

御名

宗信公御譜中

正文在琉球國司

爲年首之嘉儀被差渡使簡、殊別錄之通贈給之、入念外段令祝着外、猶期後喜之時外、恐惶不宣、

〔卷〕 「寛保三年」 八月二日 侍從宗信御判

謹上 中山王

1916 繼豐公御譜中

正文在琉球國國司

爲年始之嘉儀被差渡使簡、殊目錄之通贈給之、入念外段令祝着外、猶期後喜之時外、恐惶不宣、

(朱)「寛保三年」

八月二日 中將繼豐御判

謹上 中山王

1917 全上

正文在文庫

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(朱)「寛保三年」

八月四日

信祝判

松平大隅守殿

(朱)「在右裏」

松平伊豆守

信祝

1918 全上

正文在文庫

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被

獻之候、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(朱)「寛保三年」

八月四日

乘賢判

松平大隅守殿

(朱)「在右裏」

松平能登守

乘賢

1919

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、六月九日東叡山淨圓院様御位牌所 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙

面之趣各申談及 上聞候、恐々謹言、

(朱)「寛保三年」

八月九日

松平伊豆守

信祝判

松平上總入道

1920

吉貴公御譜中

正文在文庫

猶々何も々々よろしく申上まいらせ外へくり、かしく、

七月廿七日付にて御ふミ下されり、  
公方様

右大將様 大納言様ますく御機嫌よくならせられ、御  
めて度覺しめしり由、しかれば先月廿八日

竹姫君様より御使御申上あそハしり所

公方様よりあいすり縮一重菊姫御方御拜領なされ、まこ  
ともて御懇の御事、御手まへさまも有かたく覺しめ  
しり由、右之御禮御申上被成り御ふミの趣、よろしく申  
上まいらせりへくり、めてたくかしく、

朱力平  
寛保三年

あ

松平

上總入道様

御返事

豊岡

浦尾

高瀬

吉貴公御譜中

正文在文庫

(一橋宗尹)

徳川刑部卿殿御簾中安産付ぬ、爲御祝儀干鯛一箱被獻之  
り、遂披露候處一段之御仕合り、恐く謹言、

朱力平

寛保三年

九月朔日

本多中務大輔

忠良判

松平上總入道

1922 全上

徳川刑部卿殿御簾中就安産、爲御祝儀以使者干鯛一箱被  
獻之り、遂披露候處一段之御仕合り、恐く謹言、

朱力平

寛保三年

九月朔日

松平能登守

乘賢判

松平上總入道

1923

継豊公御譜中

正文在文庫

徳川刑部卿殿御簾中就安産付ぬ、爲御祝儀干鯛一箱被獻之

り、遂披露候處一段之御仕合り、恐く謹言、

(朱)

「寛保三年」

九月朔日

忠良判

松平大隅守殿

忠良

(朱)  
「在右裏」

本多中務大輔

1924

全上

徳川刑部卿殿御簾中就安産、爲御祝儀以使者干鯛一箱被

獻之、遂披露候之處一段之御仕合、恐、謹言、

〔寛保三年〕  
九月朔日  
乘賢判

松平大隅守殿  
乘賢

〔在右裏〕  
松平能登守

1925 宗信公御譜中

正文在文庫

徳川刑部卿殿御簾中安産付、爲御祝儀干鯛一箱被獻之、遂披露候一段之御仕合、恐、謹言、

〔寛保三年〕  
九月朔日  
忠良判

〔在口裏〕  
松平薩摩守殿  
忠良

〔在右裏〕  
本多中務大輔

1926 全上

徳川刑部卿殿御簾中就安産、爲御祝儀以使者干鯛一箱被獻之候、遂披露候一段之御仕合、恐、謹言、

〔寛保三年〕  
九月朔日  
乘賢判

〔在口裏〕  
松平薩摩守殿  
乘賢

〔在右裏〕  
松平能登守

1927 繼豊公御譜中

去歲繼豊請、幕府、免許自琉球國所入貢于大清國之進貢接貢料銀吹替之事、因告之於琉球國、故今茲中山王尚敬使、南風原親方齋書翰來于薩府、謝之、於是馳騎馬士番新伊地知猪兵衛季名於東武、捧之於繼豊、而後至執政番本多中務大輔忠良之第一、呈尚敬所捧繼豊之書翰及繼豊之上書焉、既而九月十八日忠良被投奉書、委見于後、

1928 全上

扣正文在右筆所

私領從琉球國大清國に相渡り進貢接貢料銀吹替之願申上、願之通被仰渡り付、其旨去秋中山王に申越り處、別難有仕合奉存り旨、此節私迄差渡使翰申上、右之段申

上、以上、

〔寛保三年〕 九月五日

御名

1929

全上

扣正文在右筆所

琉球國より大清國に相渡り進貢接貢料銀吹替之儀、正徳三巳年御免被仰渡、中山王より上總入道迄爲御禮差渡使翰り、其節在國故薩州より右之段以使札申上り付、中山王より之書翰爲御内見、其節之御用番井上河内守様に差出申り先例御座り、以上、

〔寛保三年〕 九月

1930

全上

扣正文在右筆所

芳墨令披見り、大清國に進貢接貢料銀吹替、願之通従公義被仰渡り、爲謝禮南風原親方薩州迄被差越り、因茲紙面之趣老中衆に申達り、恐惶不宣、

〔寛保三年〕 九月六日 中將繼豊

進上 中山王

1931

繼豊公御譜中

正文在文庫

爲重陽之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲本多中務大輔可述り也、

〔寛保三年〕 九月七日

吉宗公 墨印

薩摩

中將殿

1932

全上

爲重陽之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之り、遂披露候之處一段之御仕合り、恐々謹言、

〔寛保三年〕 九月七日 松平能登守 乘賢判

松平大隅守殿

1933

繼豊公御譜中

扣正文在右筆所

私領薩摩國七嶋之内寶嶋之沖に、當七月九日小船壹艘相見得、漸々鳴近寄來り付番人付置り處、夜中碇を爲御様子り得共難見分、舩出之儀も罷成り處、翌十日未明右

船荒磯に打寄、唐人四人陸に上り、漂來之次第相尋

處、厦門より臺灣に渡り小船人數四人乗組、當六月十三

日逢大風段々波浪、當嶋に漂來旨申出付、船相改

處、網切船底破荷物少く有之、唐人共及飢様子故、食

事等爲給加介抱、人家迎小屋相調入置、外廻圍入念番人

堅固附置、船之儀悉唐人依願燒捨、乘船取仕立警固之者

相付、八月七日同國之内山川と申湊に致着船外、依之唐

人并荷物等手船を以、如例警固之者相添長崎に可送越由、

委細彼地奉行衆に國元家來共申達旨申越外、此段申上

外、以上、

〔寛保三年〕

九月十六日

御名

全上

扣正文在右筆所

先達申上り薩摩國加世田村之内野間崎に、當六月致

破船外來朝東埔塞出唐船荷物段々取揚仕廻り付、唐人

并荷物共手船乗付、警固之者相添長崎に送遣外處、八月

九日彼地奉行衆無儀被相請取り由、國本家來共申越候、

此段申上り、以上、

〔寛保三年〕

九月十八日

御名

1935 全上

從琉球國大清國に相渡り進貢接貢料銀吹替之儀、願之通

被 仰出之付、從中山王其方之書翰被差出之、

各申談及言上り、恐々謹言、

〔寛保三年〕

九月十八日

本多中務大輔 忠良判

松平大隅守殿

1936

繼豊公御譜中

扣正文在家老座

渡唐銀吹替御願之通被仰渡り付、中山王より御禮之書翰

御用番本多中務大輔様に被差出置り、書翰被成御返りハ

、何分ニ及可申越旨、先月十三日朱書を以申越通り處、

同十八日中務大輔様に四本庄藏外之御用付罷出り處、御

用人石原彌右衛門出合、壹人罷出り様只今申越り、中途

ニ爲參達り可有之由ニ申聞り、中山王書翰被差

出、御則答も爲被申達事得共、右付御奉書被成御渡り

由ニ、右彌右衛門より相渡り付庄藏相請取、御奉書并

書翰差出り付、則夜以御書御請被仰上、右之通首尾相濟

申り、御奉書御右筆に相渡、寫壹通差越申り、

右申越り條可被達 貴聞り、以上、

〔寛保三年〕十月三日

〔上〕鎌田太郎右衛門  
樺山主計

嶋津左衛門殿

嶋津大藏殿

〔下〕嶋津左殿

額娃内膳殿

嶋津右平太殿

種子嶋織部殿

1937

〔本〕本文被申越趣致承知り、中山王書翰被差上及言上候由、

御奉書御到來有之り段者中山王に被仰聞置方にも可有之哉と申談、先例見合り得共不相見得、奉伺り處被承

置り様可致り、右に付御禮にハ不及旨可申渡旨御意り付申渡り、且又御返翰之儀者先達を被差越り由是又奉

伺、先月十五日外之疏人一所に先例之通御返翰相渡、使者御暇申渡り、此段も爲御存申越り條可被達 貴聞

儀者御考次第存り、御奉書寫此方に扣置り、以上、

十一月十一日

〔本文書ハ一九三六号文書ノ行間朱書ナリ〕

1938

継豊公御譜中  
扣正文在右筆所

先達を申上り薩摩國七嶋之内寶嶋に、當七月漂來致破船  
り唐人四人荷物共、同八月同國之内山川に送來り付、手  
船乗付、警固之者長崎に送遣り處、先月八日彼地奉行衆  
無吳儀被相請取り由、國元家來共申越り、此段申上り、  
以上、

〔本〕「寛保三年」十月十六日 御名

1939

全上

重陽之 御内書可相渡り間、明日五半時 御城に家來可  
被差出り、以上、

〔本〕「寛保三年」十月廿日 本多中務大輔

1940

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

公方様 右大將様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悅  
旨尤り、將亦今度徳川刑部卿殿御簾中安産之段被承之、

目出度被存由得其意外、紙面之趣各申談及、上聞外、恐  
く謹言、

朱カキ  
寛保三年 十月十九日 土岐丹後守 頼稔判

松平上總入道

1941 全上

御札令披見外、

公方様 右大將様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悅  
旨尤外、將又今度徳川刑部卿殿御簾中安産之段被承、目  
出度被存由得其意外、紙面之趣及言上外、恐く謹言、

朱カキ  
寛保三年 十月十九日 松平能登守 乘賢判

松平上總入道

1942 吉貴公御譜中

正文在文庫

なをく御返事御めてたく御一紙に仰被進外、よろ  
しく御申上被成外へくり、めてたくかしく、

御ふみのやう忝思召外、まつく

總州様御機嫌よく被爲入、方々様ニ及御機嫌好入らせら

れ外御事、御めて度おほしめし外、爰御程にも  
大守様初させられ

姫君様 御子様かたニ及御機嫌よく被爲外御事ニ御座  
外、さやうニ御座外得老

刑部卿様御簾中様御安産ニ付

公方様 右大將様より

大守様

姫君様へ御祝義御拜領あそハし外御事きかせられ、忝御  
悦におほしめさせられ外段仰被進、忝おほしめし外、さ  
て又重陽の御祝義も

大守様

姫君様へいつもの通り

公方様より御はい領被遊外、御よろこひも仰しんしられ、  
御ねん入らせられ外たんかたしけなく思しめし外、此た  
ん何もよろしく御申上被成外へくり、めてたくかしく、

朱カキ  
寛保三年

ひち嶋

人さま

萩原

しま津

權左衛門さま

岡田

御返事

藤丸

6

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、就寒中

公方様 右大將様 大納言様御機嫌被相同之外、益御勇健御儀外間可御心易外、隨而觸一箱被獻之外、各申談遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ 寛保三年 十二月十一日

松平上總入道

松平伊豆守

信祝判

全上

御札令披見外、就寒中

公方様 右大將様 大納言様御機嫌被相同之外、益御安全御事外間可御心易外、隨而觸一箱被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ 寛保三年 十二月十二日

松平上總入道

松平能登守

乘賢判

吉貴公御譜中

寛保三年癸亥十二月十八日

大樹吉宗公御鷹所、擊鶴一隻以奉書、賜於吉貴、元老松

平伊豆守信祝出驛路證印、授之、則家臣喜入十郎右衛門

馨香馬・財部甚兵衛盛容番新護送之、步行士兩人及足輕

數人副之、即日發江都、不舎晝夜取途於東海・山

陽・西海之三道、翌年正月十五日到著廳府大磯館也、

同日齋報章及信祝所出驛路證印、馳中原仲左衛門尚

富馬・長谷場運八純庸番新於江都、且爲謝恩齋、使種

子鳥彈正久達爲使節、同日發大磯館赴於江都也、尚

富・純庸經西海・山陽・東海之驛路、而二月八日至江都、

如三元老松平左近將監乘邑第一、呈報章納驛路證印、同

十八日久達亦至江都、同二十二日以吉貴之書翰捧元

老各第一、三月朔日登營奉一種一荷于

吉宗公、於白書院拜謁

公及

右大將家重公勲使節、久達亦獻上御太刀一腰・馬代

白銀一枚・紗綾一卷于

吉宗公、又於白書院拜謁

兩公、爲私觀禮畢、而登西城奉吉貴之獻物一種

一荷于

家重公、久達亦獻納御太刀一腰・馬代白銀一枚矣、

同五日登<sub>レ</sub>營則於<sub>二</sub>檜間<sub>一</sub>松平信祝被<sub>レ</sub>附<sub>二</sub>奉書<sub>一</sub>、紗綾三卷久達拜<sub>二</sub>戴之<sub>一</sub>、翌六日西城元老松平能登守乘賢亦於<sub>二</sub>其第<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>附<sub>二</sub>奉書<sub>一</sub>、而後同二十六日發<sub>二</sub>江都<sub>一</sub>五月十八日久達還<sub>二</sub>薩府<sub>一</sub>復命也、

1946 一筆令啓達<sub>レ</sub>、

公方様 右大將様 大納言様益御機嫌能被成御座<sub>レ</sub>間可御心安<sub>レ</sub>、將亦御鷹之鶴拜領之<sub>レ</sub>條、以宿次差越之<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

朱力キ  
寛保三年 十二月十八日

土岐丹後守 頼稔判

本多中務大輔 忠良判

松平伊豆守 信祝判

松平左近將監 乘邑判

松平上總入道

1947 全上

寫正文在文庫

寫

此狀箱并鶴壹、從江戶至薩州鹿兒嶋松平上總入道所<sub>レ</sub>相届、返札可來候間、於江戶月番之老中<sub>レ</sub>急度可持參者也、

朱力キ  
寛保三年 亥十二月十八日 伊豆印

右宿中

1948 繼豊公御譜中

同年十二月十五日

大樹吉宗公使<sub>二</sub>大澤式部基寛來<sub>三</sub>于芝邸<sub>一</sub>、賜<sub>二</sub>御鷹所<sub>一</sub>搏擊之鶴一隻於繼豊<sub>一</sub>、即日嗣嫡宗信代<sub>二</sub>繼豊<sub>一</sub>繼豊宿願未愈詣<sub>二</sub>執政各位之第<sub>一</sub>、奉<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>謝之<sub>一</sub>、

1949 全上

正文在文庫

今朝蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之<sub>レ</sub>、遂披露<sub>レ</sub>處一段之御仕合<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

(朱)  
「寛保三年」十二月十九日 信祝判

松平大隅守殿

信祝

(朱)  
「在右裏」  
松平伊豆守

1950 今朝蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之、遂披露處一段之御

仕合、恐々謹言、

〔奉寛保三年〕十二月十九日 乘賢判

松平大隅守殿 乘賢

〔奉在右裏〕松平能登守

1951 繼豊公御譜中

扣正文在右筆所

私領薩摩國水引村之内京泊と申所〔川西〕に、去月廿四日唐船一

艘漂着仰碇付、早速役人共駆付得共風波荒、唐人に

對談難成陸地守居付處、翌廿五日陸方貳拾間計之所に打

揚致破損、唐人陸に揚付付、出所等相尋付處來朝東埔寨

出人數六拾貳人乘組、六月廿二日廣南方出帆、今月廿四

日遭難風漂着及破船、信牌所持仕付、右之内、六拾壹人

老助命、壹人致溺死付旨申出付、早速人家を明除、助

命之唐人共入置、食物等爲給介抱を加、外廻圍入念番人

等堅固申付、近邊浦々稠數番之者附置、猶又唐人共立合

破船場委見届付處、汀より五六拾間計沖之方に砂瀨有之

付を越、河之方に居り、舷少々破り迄二筋水船に罷成り、

砂瀨越り節船底破水入り哉、ふなはた打破り節波入り哉、

大船故本船に乘付り儀難成、荷役不能成り付、破損所何

分と難見究付、且亦致溺死付唐人之死骸及揚付付、唐

人共望次第可申付旨、役人共申越付、破船之様子右之次

第付得者致荷役湊に引入修甫相加、用立筋と可有御

座哉、其筋に付ハ、修甫相調次第唐人荷物共本船を以差

送着、用立不申付ハ、荷物船具等唐人望次第此方手船を

以、如例警固之者相添長崎に可送越旨、委細彼地奉行衆

に國元家來共申達付旨申越付、此段申上付、以上、

〔奉寛保三年〕十二月廿一日 御名

1952 全上

正文在文庫

爲歲暮之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲松平伊豆守可

述付也、

〔奉寛保三年〕十二月廿七日



薩摩

中將殿

全上

爲歲暮之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之、遂披露候之處一段之御仕合、恐々謹言、

(朱)「寛保三年」

十二月廿七日

松平能登守

乘賢判

松平大隅守殿

1954

(表紙)

追 舊 記 雜 錄  卷八十九	吉 貴 公	自 寬保四年 正月
	繼 豐 公	至 延享二年十二月
	宗 信 公	改元

繼豐公御譜中

正文在文庫

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之外、遂披露<sub>レ</sub>處一段之御仕合<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

〔<sup>米</sup>寛保四年〕 正月七日

忠良判

松平大隅守殿

忠良

本多中務大輔

1957

吉貴公御譜中

正文在文庫

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被獻之外、遂披露<sub>レ</sub>處一段之御仕合候、恐<sub>レ</sub>謹言、

1956

1955

全上

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被獻之外、遂披露<sub>レ</sub>處一段之御仕合<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

〔<sup>米</sup>寛保四年〕 正月十一日 忠良判

松平大隅守殿

忠良

本多中務大輔

全上

吉書

一神社佛閣修造興行事、

一可專勸農事、

一可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨可有沙汰之狀如件、

寛保四年正月十一日 繼豐判

寛保四年 正月十一日

土岐丹後守 頼稔判

本多中務大輔 忠良判

松平伊豆守 信祝判

松平左近將監 乘邑判

(島津吉貴) 松平上總入道

1958 継豊公御譜中

正文在文庫

爲若之御祝儀、鯛一折被獻之外、遂披露候處一段之御仕合外、恐々謹言、

(朱) 寛保四年 正月廿三日

乘賢判

松平大隅守殿

乘賢

(朱) 在右裏 松平能登守

1959 全上

爲年頭之御祝儀、  
右大將様 大納言様は以使者御太刀・御馬代黄金被獻之

外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(朱) 寛保四年 正月廿三日 乘賢判

松平大隅守殿 乘賢

(朱) 在右裏 松平能登守

1960 吉貴公御譜中

正文在文庫

爲年頭之御祝儀、

右大將様 大納言様は以使者御太刀・御馬代黄金被獻之候、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(朱) 寛保四年 正月廿三日

松平能登守 乘賢判

松平上總入道

1961 全上

返くはるなからいまた餘塞もつよく御さ外得共、  
なを御さハリもあらせられ外ハぬやうにとおほしめ  
し外、何もよろしく御申上被成へく外、めてたくか  
しく、

年始の御祝義と御座りて御ふみのやう、かたしけなくおほしめしり、まつくその御地にて

総州様御機嫌よく被爲入、そのほか様方御揃あそハし、御にきくしく春ニ移らせられ、御いわる共の御事、かすく御めて度思しめしり、こゝ御ほとこても御揃あそハし、御機嫌よく春に移らせられり、御にきくしく御いわるあそハしり、扱は年始の御祝義と御座りて、御もく録のことく進しられ、かすく御めて度かたしけなく思しめしり、誠にいく久しく萬く年もと祝ひ入らせられり、此よしよろしく御申上成へくり、めてたくかしく、

朱カキ  
寛保四年

ひし嶋  
津 隼 人さま  
嶋 津 権左衛門さま  
をき原  
岡 田  
御返事 藤 え

全上

なをく御ねん入らせられ御ふみのやう、かたしけなくおほしめしり、何もよろしく御申上成へくり、めてたくかしく、

仰之よしにて御ふみのやう、まつくその御地にて

総州様御機嫌よく入らせられり御事、御めてたく覺しめしり、こゝ御ほとこても

太守様初させられ御揃あそハし、御機嫌よく入らせられり御事ニ御座り、さやうニ御座りへは、年頭御祝あそはし、御身鏡一かさりしんしられり御事、御よろこひあそはし、仰被進り御ふみの趣忝覺しめしり、まことに幾久しく萬く年御機嫌好あいかハらすとの御事までニ御座り、めてたくかしく、

朱カキ  
寛保四年

ひち嶋  
は や とさま  
しまつ 権さへもんさま  
荻原  
岡 田  
人々 藤 え

1963

年甫之賀慶、且如目録贈之令祝着り、弥平安超歳珍重、此邊同前、尚期後音り也、

寛保四

正月廿五日

(近衛) 内前公

御判

薩摩中将殿

宗信公御譜中

正文在抱眞院

虚空藏菩薩一鉢

右從

薩州様御寄進候之條、全可令安置者也、仍如件、

寛保四年子二月二日

抱眞院

(鎌田)  
太郎右衛門

政直判

總州様御家督之中被成御持せ、御長刀者御持替之御道

具也、此節御方に被爲拜領之條、全可爲御家寶者也、

私御取次仕り故、爲後證如件、

寛保四年二月三日

嶋津權左衛門

久道(花押) No.11

嶋津周防殿

御形書有り略ス

吉貴公御譜中

正文在文庫

越前島津氏忠紀譜中

寛保四年甲子二月三日有

レ命、賜<sub>フ</sub>

吉貴公家督之中所持之隊中之對鎗二本治工文殊兼久翰黑難紗織掛持替之

長刀一振無銘兼俊傳難紗裏合磨於忠紀上、島津久道傳之且附證書、詳

見于左、

覺

一對御鎗貳本共ニ文殊兼久作翰黑難紗織掛

御拵書在別紙

一御長刀 一振無銘兼俊傳難紗裏合磨

御拵書在別紙

右對之御鎗者

返く菊姫様もをなし御事よろしく仰上られ度

おほしめしり、いよく御きけんよくいらせられり

や、きかせられたくおほしめしり、十二日ニハ御天

氣もよく御座りて

御本丸へいらせられり、いかほとか御悦ニ御ほしめ

しり、菊姫様御ほうそう以後初めいらせられりニ付、

公方様御満そくさまニ御ほしめさせられり御事御さ

り、何もよろしく御申上成へくり、めてたくかしく、

したいに長閑成まいらせり、まつくその御地にて

總州様御機嫌よく被爲入りや、被爲聞度思しめしり、こ

ゝ御ほとこても御揃あそハし御機嫌よくいらせられ、當

月十二日二ハ

御本丸へ姫君様 菊姫様御同道にて御年禮に被爲入  
公方様へ御たいめんあそハしり、 菊姫様も御めきへ  
あそハしり、御にきくしく御いわるあそハしり御事こ  
御座り、夫こ付此御はこ之内

公方様方御はいりやうあそハしりまゝ、あいかハらず御  
すそわけに進しられり御事こ御さり、此よし宜御申上成  
へくり、誠にいく久しく萬く年もといわる入らせられ  
り、めてたくかしく、

朱力キ  
寛保四年 二月十七日

ひち嶋 隼 人さま  
嶋津 權左衛門さま  
荻原 岡田 藤え

6

1968 全上

返く菊姫様も御口上之通仰進しられ、かたしけな  
く思しめしり、御機嫌よくいらせられり御事、御め  
て度かしく御ほしめしり、よろしく仰上られ度思し  
めしり、何もくよく仰上られへくり、めてたくか  
しく、

なをまたこの度嶋津宇平太のほりこ付 總州様方御口上

仰被進、かすくかたしけなく思しめしり、御機嫌よく  
被爲入り御事、御くハしきかせられ、一入めてたく御  
うれしくおほしめしり、此よし宜御申上成へくり、めて  
たくかしく、

朱力キ  
寛保四年 二月十七日

ひち嶋 隼 人さま  
嶋津 權左衛門さま  
荻原 岡田 藤え

6

1969

(朱) 「雜抄」

營中進使者序寄一翰り、青陽加儀珍重、弥可爲平安、此  
邊無事、仍如目錄令贈與り也、

寛保四 二月十八日 近衛内前公 御判

薩摩中將殿

1970

継豊公御譜中

正文在文庫

歳暮之 御内書可相渡り間、明日五半時 御城江家來可

被差出外、以上、

二月廿日

松平伊豆守

松平大隅守殿

1971  
全御譜中

今茲寛保四年二月二十九日於江府改元延享、因三月二十一日令達於薩府、

1972  
吉貴公御譜中

正文在文庫

返々菊姫様にも御なし御事ニよろしく仰上られ度

御ほしめし外、何もよく申せとの御事ニ御ざり、

よろしく御申上被成へくり、めてたくかしく、

上巳の御祝義御めてたき、をなし御事にいわる入らせられり、まつく

れり、まつく

總州様御機嫌よく被爲入、そのほか様方も御揃あそハし御機嫌よく、御にきくしく御いわるあそハし外ハんと、かすく御めて度おほしめし外、こゝ御ほとこても御揃あそハし御機嫌よく、御にきくしく御いわるあそハし外、扱ハ此御もく録のことく、上巳の御祝義御いわるあ

そハし外て進しられり御事ニ外、誠にいく久しくとの御事迄におほしめし外、此よしよろしく御申上成へくり、めてたくかしく、

朱カキ  
寛保四年

方

1973

吉貴公御譜中

寛保四年甲子二月二十九日改元號延享、同年三月二十一日至三鷹府傳令、

1974

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 右大將様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤外、將亦舊臘以宿次奉書御鷹之鶴拜領之、難有由得其意外、依之爲御禮以種子鳴彈(久遠)正御樽肴被獻外、遂披露候處 御前には被召出之、入念外段御喜色之御事外、恐く謹言、

ひし嶋  
津 隴 人さま  
權左衛門さま  
人々  
萩原  
岡田  
藤え

全上

返く何もくよろしく申上まいらせりへくり、め

松平上總入道

朱力本  
延享元年  
三月五日

松平能登守  
乘賢判

御札令披見り、  
公方様 右大將様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦  
旨尤候、將亦奮騰以宿次奉書御鷹之鶴拜領之、難有由得  
其意り、依之爲御禮以種子嶋彈正御樽肴被獻之候、遂披  
露り處 御前に被召出、入念り段御喜色之御事り、恐く  
謹言、

全上

松平上總入道

松平伊豆守  
信祝判  
松平左近將監  
乘邑判

朱力本  
延享元年  
三月五日

土岐丹後守  
頼稔判  
本多中務大輔  
忠良判

てたくかしく、  
二月六日付にて御ふみ下されり、  
公方様

右大將様 大納言様ますく御機嫌よくならせられ、御  
めて度おほしめしり由、しかれば正月七日御同姓大隅守  
殿御召仕むらちにて、年頭の御祝儀御申上なされり所  
御めミへ仰付られ、そのうへ 上意を蒙り、御料理下さ  
れり御事、有かたき仕合におほしめしり由、右之御禮  
右大將様へ御申上なされり御ふみの通、よろしく申上ま  
いらせりへくり、めてたくかしく、

朱力本  
延享元年

松平

上總入道様

御返事

豊岡  
梅その  
うら尾  
高瀬

緒豊公御譜中  
扣正文在右筆所

先達の申上り薩摩國水引村之内京泊(山内)なる、去年十一月廿  
五日致破船り來朝東埔寨出唐船、荷物段々取揚仕廻り付

る、唐人并荷物共手船乗付、警固之者相添長崎に送遣り  
處、正月十九日彼地奉行衆無異儀被相請取り由、國許家  
來共申越り、此段申上り、以上、

(卷)  
「延享元年」三月六日  
(島津維豐) 御名

1978 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、正月廿日東叡山 御靈屋

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤り、紙面趣各申談及 上聞

り、恐々謹言、

朱力キ  
延享元年 三月廿一日

本多中務大輔  
忠良判

松平上總入道

1979 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、正月廿四日増上寺 御靈屋

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤り、紙面之趣各申談及 上

聞り、恐々謹言、

朱力キ  
延享元年 三月廿五日  
本多中務大輔  
忠良判

松平上總入道

1980 吉貴公御譜中

正文在文庫

返々いよ々御機嫌よくいらせられりや、なをき

かせられたく思しめしり、こゝ御ほとこても

大守様もかはらせられ御事も御さあそハしりハす、

御心よくいらせられり、

菊姫様もをなし御事ニ御しうき仰上られり、何もよ

ろしく御申上成へくり、めてたくかしく、

端午の御祝義御めてたさいわゐ入らせられり、まつ々

その御地にて

總州様御機嫌よく被爲入、そのほか様方にも御きけんよ

く、御にき々しく御いゐるあそハしりハんと、かす

々御めて度思しめしり、こゝ御ほとこても御揃あそハ

し御機嫌よく、御にき々しく御祝ひあそハしり、扱は

此御もく録の通、端午の御しうき御いゐるあそハしりて

進しられり御事ニ御さり、誠に幾久敷との御事迄におほ

しめしり、此よしよろしく御申上成りへくり、めてたく  
かしく、

朱カキ  
延享元年 四月三日

ひち嶋 人さま 萩原  
嶋津 權左衛門さま 岡田  
人、 ぶちえ

1981 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

公方様 右大將様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦  
旨尤り、然者二月十二日

竹姫君様被爲 入り節、菊事御懇之蒙 上意、從

公方様 右大將様拜領物被 仰付之、從(田安宗武) 刑(橋宗尹)

部卿殿表被遣物有之、且又從

公方様同氏大隅守・薩摩守に表拜領物被 仰付、重疊難

有由得其意り、紙面之趣各一覽之事り、恐く謹言、

朱カキ  
延享元年 四月十二日

松平上總入道

土岐丹後守

賴稔判

1982

全上

御札令披見り、

公方様 右大將様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦  
旨尤候、然者二月十二日大奥に

竹姫君様被爲 入り節、菊事御懇之蒙 上意、從

公方様 右大將様拜領物被 仰付、其上右衛門督殿 刑

部卿殿より表被遣物有之、且又從

公方様同氏大隅守・薩摩守に拜領物被 仰付之、重疊難  
有由得其意り、紙面之趣令承知り、恐く謹言、

朱カキ  
延享元年 四月十二日 松平能登守 乘賢判

松平上總入道

1983

繼豊公御譜中

正文在文庫

今朝御香具一箱并丸熨斗一箱被獻之り、遂披露り處一段  
之御仕合り、恐く謹言、

朱カキ  
「延享元年」 四月十八日 賴稔判

松平大隅守殿

賴稔

〔在右裏〕  
土岐丹後守

全上

今朝御香具一箱并丸熨斗一箱被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐く謹言、

〔延享元年〕四月十八日

乘賢判

松平大隅守殿

乘賢

〔在右裏〕  
松平能登守

宗信公御譜中

正文在抱眞院

覺

一虚空藏木佛一鉢

御長六寸八部 御厨子有

從 薩州様

一右御戸帳 表京今錦織  
裏あさ桐赤地

從 菊姫様

右之通被遊御寄進外間致安置、無懈怠御祈願可相勤外、

依之太郎右衛門殿書附壹通相添渡置外條、住替之節堅固可次渡外、以上、

寺社奉行

延享元年子四月十八日

本田作左衛門  
由親判

山岡 齋

久柄判

抱眞院

繼豊公御譜中

延享元年四月十九日執政降奉書於繼豊曰、應代ニ因幡・

伯耆兩國之主松平相摸守宗泰一勤増上寺鎮火番焉、雖、

然繼豊頃年嬰ニ病痾ニ不能ニ身親勤勤ニ事、故若失火則嗣

嫡宗信宜ニ代勤ニ之也、而翌年四月十九日奥州仙臺城主

〔伊達〕松平陸奥守宗村代ニ繼豊一勤ニ之、

全上

正文在文庫

増上寺火之番爲松平相摸守代被 仰付外間、被得其意可

有勤仕外、以上、

〔延享元年〕四月十九日

土岐丹後守

本多中務大輔

1988

松平大隅守殿

松平左近將監

全上

松平大隅守

今般増上寺火之番被 仰付外、然所病氣之事ニ表外之條、  
出火之節素同氏薩摩守罷出外様ニ可被致外、

(卷)  
「延享元年」

1989

全上

松平大隅守

端午之 御内書可相渡之處、<sup>(p.2)</sup>奉丹後守卒去ニ付、なかれ  
に成外間可被得其意外、

(卷)  
「延享元年」

1990

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 右大將様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦  
旨尤外、將又今度年號改元之儀被承之、玆重由得其意外、

1991

紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

朱力半  
延享元年

四月廿三日

土岐丹後守

賴稔判

松平上總入道

全上

御札令披見外、

公方様 右大將様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦  
旨尤外、將又今度年號改元之儀被承之、玆重由得其意外、

紙面之趣及言上候、恐々謹言、

朱力半  
延享元年

四月廿三日

松平能登守

乘賢判

松平上總入道

1992

繼豊公御譜中

正文在文庫

爲端午之御祝儀、以使者御帷子單物被獻之外、遂披露外  
處一段之御仕合候、恐々謹言、

(卷)  
「延享元年」

五月二日

松平能登守

乘賢判

松平大隅守殿

## 吉貴公御譜中

## 正文在文庫

なをく御あつさもつよく御座りまゝ、なを御さわり  
 らせられはぬやうにとおほしめしり、何もよろしく御申あけ被成りやうにとの御事ニ御さり、め  
 てたくかしく、

土用中なからことのほか御あつさもつよく御座り得とも、まつくその御地にて

總州様御機嫌好被爲入、御あつさの御障もあらせられハすりや、きかせられたく覺しめしり、こゝ御ほとこても  
 太守様初させられ

姫君様 御子様方なにの御障もあらせられハすり、さては此御箱のうち御ちゝみ御美しからず御座りへとも、  
 あひかハらす御あつさの御左右被爲聞り御事までにしん  
 しられり、此よしよろしく御申あけ被成へくり、めてたくかしく、

朱加平  
 延享元年

比志嶋

津

人さま

嶋

權左衛門さま

人々

藤枝

荻原

岡田

## 吉貴公御譜中

## 正文在文庫

返くことのほかの御あつさにて御座りへ共、いよ  
 く御機嫌よく被爲入りや、被爲聞たくおほしめし  
 り、

菊姫様もおなし御事ニよろしく仰上られ度おほし  
 めしり、何もよく御申上被成へくり、めてたく  
 かしく、

七夕の御祝義御めてたさ、となたもをなし御事にいわる  
 入らせられ、まつく

總州様御機嫌よく被爲入、そのほか様方にもかわらせら  
 れり御事御さあそハしりハす、御にきく鋪御いわるあ  
 そハしりハんと、かすく御めて度思しめしり、こゝ御  
 ほと

大守様御初御揃あそハし御きけんよく、御にきくしく  
 御いわるあそハしり、扱は此御もく録のことく、七夕の御  
 しうき御いわるあそハしりて進しられり御事に御さり、  
 誠にいく久しく萬く年も相かハらすとの御事迄におほ  
 しめしり、此よし宜御ひろう御申上成へくり、めて度か  
 しく、

1995

朱力キ  
延享元年  
五月十七日

荻原  
ひち嶋  
隼  
嶋津  
人さま  
權左衛門さま  
岡田  
人々  
藤え

全上

返くこのほかの御あつきにて御座外へ共、いよ  
く御きけんよくいらせられ外や、猶きかせられ度  
御ほしめし外、何もよろしく御申上成へくり、めて  
たくかしく、

御生身玉の御しう義御めて度いわる入らせられ外、まつ  
くその御地にて

總州様御機けんよく被爲入、御にきく鋪御祝ひあそハ  
し外ハんとかすく御めて度思召外、こ御ほとにて御  
揃あそハし御きけんよく、御にきくしく御いわるあそ  
ハし外、扱ハ此御目錄のことく、御生身玉の御祝義御い  
わるあそはし進しられ外御事にて、誠にいく萬く年も  
總州様御機嫌よく御繁昌の御事にて、相かハらす御しう  
き被進外様にといわる入らせられ外、此よし宜御ひろう  
御申上成へくり、めてたくかしく、

1996

朱力キ  
延享元年  
五月十七日

荻原  
ひち嶋  
隼  
嶋津  
人さま  
權左衛門さま  
岡田  
人々  
藤え

吉貴公御譜中  
正文在文庫

返くいよく御機嫌よくいらせられ外や、なをき  
かせられたくおほしめし外、

菊姫君様もをなし御事ニ御しうきおほせ上られたく  
思しめし外、よろしく御申上成へくり、かしく、

八朔の御祝義御めてたき、をなし御事にいわる入らせら  
れ外、まつくその御地にて

總州様御機嫌よく被爲入、その外様方もかハらせられ  
外御事御座あそハし外ハす、御にきくしく御いわるあ  
そハし外ハんと、かすく御めて度おほしめし外、こ  
御ほと

大守様はしめさせられ御揃あそハし御機嫌よく、御にき  
くしく御いわるあそはし外、扱ハ此御もく録のことく  
八朔の御祝義わさと御いわるあそハし外て進しられ外御

事に、誠にいく久しくとの御事迄思しめし、此よ

しよろしく御申上被成へく、めてたくかし、

朱カキ  
延享元年  
五月十七日

お

ひち嶋

荻原

しま津

岡田

權左衛門さま

藤元

1997  
吉貴公御譜中

夫和泉氏之元祖下野守忠氏者、四代太守忠宗二男、初號

島津、後改和泉、昵近

將軍家、補丹後國田邊庄・肥前國松浦庄早湊村等之地

頭職、爲九州成敗職、子孫直久從八代太守久豐命

爲二方將、應永二十四年丁酉九月師于川邊、進勳武

勇二戰死野頸、爾來絶後三百二十餘歲于茲、豈不有

感慨二乎、於是延享元年甲子五月二十五日吉貴代三太守

繼豐繼豐飲病弱淹、留東武故也、與廢繼絶、令三男三次郎續和泉家名

跡、效二男島津周防忠紀之例稱源姓、以續和泉

氏故立三家二男稱島津氏爲一門之列、事詳于繼豐

譜一也、

1998  
繼豐公御譜中

夫和泉氏之元祖下野守忠氏者、當家四代忠宗之二男而、

初號島津、後改和泉、事將軍尊氏公、元亨・建武間補

薩州南郷今改永吉・丹後州田邊莊・肥前州松浦庄早湊村等之

地頭職、與高越後守師泰・齊藤彌四郎左衛門尉利泰共爲鎮

西成敗職或曰侍所奉行、及其子右衛門兵衛忠直離二敵輩之親戚、

屬二西征將軍官稱良親王、移居豐後國、其子能登守氏儀、其

子式部太輔久親延居豐後國、六代氏久嘗及其季年、從

容語元久曰、和泉式部太輔久親有名之後也、汝必召之、

故及元久之時、徵久親於豐後國、使其居于日州志布

志、且賜百町之采地於救仁院深川村、其子又四郎直久

從八代久豐之命爲一方將、應永二十四年丁酉九月師

于川邊、進勳武勇、與弟又五郎忠次俱戰死野頸、

實是同年十一月、爾來絶後三百二十餘歲也、於是今年

五月二十五日吉貴代繼豐時繼豐受疾淹留于東武芝郎故吉貴代之、與廢繼絶、令

第三次郎後改因繼豐續和泉家名跡、效二男島津周

防忠紀之例、稱源姓及島津氏立三家二男以奉其祀、

而使其家世爲一門之例、家格連名列島津玄蕃貴傳次

也、乃繼豐所令之書及吉貴口自所傳于三次郎之件々

併錄于左、

全上

扣正文在文庫

寫

(鳥津忠經)  
三次郎

右

總州様御隠居御跡礮付高被下思召<sup>レ</sup>、依之和泉家名跡一門之列ニ申付、嶋津と可名乘<sup>レ</sup>、一所之地も可遣<sup>レ</sup>、

(卷)  
「延享元年」五月

右御書付之通從 太守様被 仰出候、

全上

扣正文在文庫

寫

五月廿五日御座之間ニ有

太守様より御意之趣

總州様 御直ニ三次郎殿に被 仰聞<sup>レ</sup>、其趣者御書付

左之通

和泉家名跡ニ有者藤原氏之筈ニ候得共、周防殿越前嶋

津家相續ニ有

總州様御二男ニ御系圖ニも有之源氏ニ有候、三次郎殿

も周防殿同様ニ諸事被仰付<sup>レ</sup>故、總州様御三男ニ被

立<sup>レ</sup>、家格者和泉家之相續故、御二男之格ニ有間、御

一門之列ニ被仰付<sup>レ</sup>故、玄蕃殿之家之次ニ被仰付<sup>レ</sup>、

當時其身ニ付有之座席ハ、玄蕃殿 周防殿 三次郎殿

兵庫殿右通之筈ニ有、

一右通三次郎殿御事

總州様御三男ニ有和泉家相續被仰付、源氏ニ有有間、

此以後末家者源氏之筈<sup>レ</sup>、古キ別之末家者唯今之通藤

原氏之筈ニ有、

一御隠居料壹萬五千石者、以後者表に可被返<sup>レ</sup>、其外礮

付御高・御屋敷・諸御道具迄惣有不殘三次郎殿に被遣

有故、分有諸事差分ニ不及候、此儀者權左衛門に委細

被仰聞<sup>レ</sup>、

一一所之地拜領之節、佐多之内櫛山御隠居御方御用之筈

ニ有<sup>レ</sup>、此所を一所之地被下<sup>レ</sup>節、同前ニ拜領被仰付

太守様思召<sup>レ</sup>有、

一紋所之儀者十文字桐之丸可被付<sup>レ</sup>、

一惣有周防殿之例ニ何事も同<sup>レ</sup>儀ハ可致<sup>レ</sup>、

一以後高上<sup>レ</sup>之事者周防殿に御免之高より八千石少ク被

定<sup>レ</sup>、

右之通ニ付得共、外ニも被定テ事共ハ、時々伺可申  
外、此御書付之通者、承置外可然御役、之可申聞  
外、御記録奉行ハ委ク書留等仕外様ニ可致外、

(朱) 「延享元年」 五月

右之通子五月廿三日於 礪御屋敷、嶋津權左衛門殿  
(記録奉行、久傳) (同上、俊雄)  
より被仰渡、川上平右衛門・町田仲右衛門承知之仕  
候、

2001 継豊公御譜中  
和正文在文庫

寫

三次郎殿事和泉家名跡

總州様御三男ニ被立外儀付、嶋津權左衛門より委細書  
(卷) 本文之御書付子五月廿七日大藏殿より三輪平太御取次を以被仰渡、町田仲右  
付を以御記録奉行に被申渡置外通、帳面委ク記置外様可  
衛門承知之仕候事

致旨、御記録奉行に可申渡置外、  
(朱) 「延享元年」 五月「廿七日」

(島津久總) 大藏

2002 吉貴公御譜中  
正文在文庫

私事神當流致稽古外付、馬貴乘方軍用等之儀口外仕間

鋪候、此段申上置候、以上、

延享元年六月六日

松平薩摩守

宗信(花押No.9)

進上總州様

2003 継豊公御譜中、  
和正文在右筆所

去年十一月薩摩國水引村之内京泊ニ東埔塞出唐船致破

(川内)

損外、唐人六拾壹人以手船長崎に差送外處、唐人乗船水  
手之内袖類於長崎爲賣渡聞得有之付、段々遂愈儀外處、  
右水手之内與次右衛門と申者、唐人頼之品物賣掛外、唐  
人賣買之儀御大禁被仰渡置趣有之付得者、領内稠敷兼外  
申付置之處、仕形不屈者故、早速相擲番人堅固附置遂穿  
鑿、委細長崎奉行衆に國元家來共申達、得御差圖置外旨  
申越外、此段申上外、以上、

(朱) 「延享元年」 六月六日  
(島津總書) 御名

2004 吉貴公御譜中  
正文在文庫

御札令披見外、就酷暑之節

公方様 右大將様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御安

全御儀<sub>レ</sub>間可御心易<sub>レ</sub>、隨<sub>ル</sub>鯉節一箱被獻<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>、遂披露<sub>レ</sub>外處一段之御仕合<sub>レ</sub>、恐<sub>ク</sub>謹言、

朱力キ

延享元年 六月十二日

酒井雅樂頭

忠知判

松平上總入道

2005

全上

御札令披見<sub>レ</sub>、就酷暑之節

公方様 右大將様 大納言様御機嫌被相伺<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>、益御勇

健御儀<sub>レ</sub>間可御心易候、隨<sub>ル</sub>鯉節一箱被獻<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>、各申談

遂披露<sub>レ</sub>外處一段之御仕合<sub>レ</sub>、恐<sub>ク</sub>謹言、

朱力キ

延享元年 六月十二日

本多中務大輔

忠良判

松平上總入道

2006

繼豊公御譜中

正文在文庫

今朝琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・赤貝塩辛一器・琉球泡盛酒二壺被獻<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>、遂披露<sub>レ</sub>外處一段之御仕合<sub>レ</sub>、恐<sub>ク</sub>謹言、

朱力キ

「延享元年」 六月十二日

忠知判

2007

松平大隅守殿

忠知

朱力キ

酒井雅樂頭

全上

今朝琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・赤貝塩辛一器・琉球泡盛酒二壺被獻<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>、遂披露<sub>レ</sub>外處一段之御仕合<sub>レ</sub>、恐<sub>ク</sub>謹言、

朱力キ

「延享元年」 六月十二日

忠良判

松平大隅守殿

忠良

朱力キ

本多中務大輔

2008

繼豊公御譜中

扣正文在文庫

大目付<sub>ニ</sub>

金銀吹替以後、古金銀未世上ニ相残り有之様ニ相聞<sub>レ</sub>外間、元文元辰年定之通、古金<sub>ニ</sub>六割半、古銀<sub>ニ</sub>五割増之積を以、古金銀取交通用可致事、

但 古金銀と有之者、慶長金銀并正徳年中より吹改、

去ル午年迄通用致<sub>レ</sub>外金銀之事<sub>レ</sub>、

一御年貢諸運上を始

公義に納り類并合力、或奉公人給金、諸商賣物代等其外金銀の取やり儀、只今迄之通文字金銀通居置、古金銀老右割合を以通用可致事、

一古金銀引替おくれ外敷、又右之古金銀引替申度者ハ、金銀座に出し、勝手次第引替可申外、尤古金老六割半、古銀老五割増之積を以引替外答ニ外事、

右之通可相心得外、且辰年吹替以來、又老金銀吹替可有之杯と取沙汰有之由相聞外、此以後決る其儀無之事外、世間金銀手廣通用之ために外之條、末之考心得違無之様能く可申聞外、以上、

右之通可被相觸外、以上、

〔采〕  
「延享元年」六月

松平左近將監殿御渡外御書付寫壹通相廻外、被得其旨無遲滯順達、留りより朽木山城守方(高橋)に可被相返外、以上、

六月十六日

大目付

(高津 緒豊)  
松平大隅守殿奉  
(伊達 宗村)  
松平陸奥守殿

右留守居

〔采〕  
「六月十六日

大目付様御廻狀并御書付寫壹通、只今有馬中務大輔様衆カ到來、本書者松平陸奥守様衆へ則順達仕申外間、差上申外旨四本庄藏申出、御兩殿様達 貴聞外」

2010 吉貴公御譜中

正文在文庫

なをく御表よりも御申上被成りへとも、なを又御申上なされりとの御事、何もよろしく申上外へくり、かしく、

五月十一日付にて御ふミ下されり、

公方様

右大將様 大納言様ますく御安全に御座なされ、御めて度覺しめし外由、土用中なをもて

右大將様御機嫌御伺被成り御ふミの通り、よろしく申あけ外へくり、めてたくかしく、

朱カキ  
延享元年

松たいら

上總入道様

御返事

浦尾

豊岡

梅園

繼豐公御譜中

松平上總入道

朱力キ  
延享元年 七月九日

松平左近將監  
乘邑判

2015  
繼豐公御譜中

同年六月十七日繼豐之實母前太守吉貴次妃所於須磨  
家臣名越右衛門恒機妹始嬰疾日益  
漸、於是禱爾藥療萬方無應驗、卒以七月三日棄世于

2012

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、五月八日東叡山 御靈前

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面趣各申談及 上聞

外、恐々謹言、

松平上總入道

朱力キ  
延享元年 七月五日

松平左近將監  
乘邑判

2014  
全上

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之候、遂披露外處一段  
之御仕合外、恐々謹言、

朱  
「延享元年」 七月六日 乘賢判

松平大隅守殿 乘賢

朱  
「在右裏」  
松平能登守

2011

吉貴公御譜中

正文在文庫

高瀬

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、四月晦日増上寺 御靈屋

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上

聞外、恐々謹言、

正文在文庫

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之候、遂披露外處一段  
之御仕合外、恐々謹言、

朱  
「延享元年」 七月六日 乘邑判

松平大隅守殿 乘邑

朱  
「在右裏」  
松平左近將監

廳府城中四配館、法諡月桂院殿心一獻珠大姉、同五日夜

出於四配館至廳府淨光明寺、同八日夜島津大學久尚

代繼豐、比志島隼人範房代吉貴燒香、既而葬、送于淨光

明寺中、現住壽門爲引導師、國老島津大藏久純奉持

靈牌、而自同十一日至二十五日於淨光明寺修中陰

之梵儀、乃安靈牌建廟爲院殿、寄附高二十五石、

且以院殿之遺命安置靈牌於陣中於廳府妙顯寺、又寄附

高百石焉、時繼豐嬰疾淹留于江都、故同三日飛脚

力告之、同六日亦吉貴使平田九郎右衛門純以小副

中島市兵衛良位土歩行馳于江都問繼豐之起居、既而同

月二十三日訃音至于江都芝邸、於是翌二十四日竹姫君

遣伊勢仲右衛門貞陳守殿鎮口添番、繼豐關山軍兵衛金麻近習、宗

信竹內源藏實員調小姓、凝府問吉貴之起居、且就淨光明

寺廟中祭之、同日

大樹吉宗公及

右大將家重公使秋元攝津守涼朝結衆來于芝邸、弔慰繼

豐之哀傷、以故嗣嫡宗信代繼豐、即日詣上使涼朝

之第及執政各位之第奉申謝之、而後自八月二日至

同四日爲院殿、修梵儀於芝大圓寺也、

2016

全上

扣正文在家老座

於須磨樣御去付(朱一御返答マテ)

本天平田九郎右衛門事去ル廿二夜中致到着候、勅方等之儀、付而奉委出申

被仰付、足輕壹人被相添、今日御使中嶋市兵衛に被相

添、委細之儀比志嶋隼人殿・嶋津權左衛門より被申

越外、

一靈龍院樣御卒去之節(吉貴等)

御女中樣方より爲御見舞御使被差越候得共、此節者不

及其儀、御口上書可被差上旨被 仰出、御口上書被差

越外條可被差上外、

一太守樣 薩州樣に大御目附以上之御役より進上物

仕、奉伺御機嫌度外間、被申談相應之品以御序被差上

度外、人數之儀者別紙之通外、(鳥津久門)

靈龍院樣御卒去之節者玄蕃殿・兵庫殿依願自分使を以

御機嫌被相同、大御目附以上之御役、寄合並以上之

面より及相中使御馬廻壹人差上進上物仕、諸士相中

外御步行使る進上物仕外、此節之儀御内奉伺外處、

不及旨被 仰出候付、兵庫殿より自分使并相中使無之

外、此段者爲御存外、

2017

一右次第ニハ故、兵庫殿并大身分之面々ハ兼而御機嫌被  
(卷一本文兵衛殿并大身分之面々より以書狀被差御機嫌候付、連書聞候)  
相同外方ハ老、今日之御使便ニ以書狀可被伺御機嫌旨

致通達外付、書狀被差越ニ可可有之ハ、

一姫君様ハ伺御機嫌之儀、隼人殿迄尋遣外處、總州様

(卷一本文致承知候)

より  
太守様迄ニ被進物及有之、

薩州様ハ老御安否御尋一通被仰進、櫻田・三田ハ態ト

御安否御尋不被仰進外付、姫君様 菊姫様ハ伺御機

嫌及間鋪旨隼人殿ニ承知仕外付、

姫君様 菊姫様ハ伺御機嫌不申上外、

一德姫様 於民様ハ伺御機嫌之儀、隼人殿ハ申談外處、

(卷一本文致承知、安元より及)  
御忌及無之ハ故不及旨、大藏承之外、此段及爲御存外、

德姫様 お民様 御遺躰 御卒去ニ付而之際御機嫌不申上候  
御遺躰昨五日淨光明寺ハ

御入、來ルハ日御葬禮之筈外、右ニ付御法名等之儀、

大藏より別紙を以申越外、

一太守様御忌掛ニ付而老、京・大坂・長崎御役場ハ一通

之御届申出可然旨被 仰出外付、今日之便ニ京・大坂

ハ申越、長崎ハ及飛脚を以申越外、

一右付隣國ハ之御知せ之儀及可申遣旨被 仰出外付、御

(卷一本文三ヶ條之趣致承知候)  
知せ相濟申外、

一玄蕃殿御忌中ニ付而老、大御目附以上之御役々より何

(卷一本文被申越越其意候、玄蕃殿御有被成候ハ、何モ差上、油而首尾可)  
モ差上度外間、御見合を以宜頼存外、人數之儀老別紙

申越候、別紙名簿留置候  
之人數ニ隼人殿被相込外、權左衛門儀老別立而差上物

有之外、

一先達而表申越外通、月次御禮ニ罷出外御役人・諸士・

(卷一本文致承知候、可差 廣開佛者申上置候、)  
在番疏人・御當地寺院着座之門主計奉伺御機嫌、外城

右及御返答候、以上  
之寺院・移地頭・地頭代并外城衆中之儀及不及其儀外

旨被 仰出外、然老 靈龍院様御卒去之節ト老諸事輕

ク被仰付、御法事旁ニ付而及右ニ準シ被仰付事ニ候、

此段大藏より別紙を以申越外、

右段々之趣申越外條、被達 貴聞外儀共老可被申上

外、以上、

(卷一)  
「延享元年」 七月六日

(卷一)  
「七月晦日」

(卷一)  
「上」北條 織部  
鎌田太郎右衛門 (政道)

(卷一)  
「首尾」嶋津 左衛門

嶋津 大藏 (大藏)  
嶋津 左衛門 (左衛門)

(卷一)  
樺山主計殿

(卷一)  
嶋津右平太殿

繼豊公御譜中

扣正文在家老座

於須磨様御不快之爲御左右、今月二日其元被差立り飛脚今八ツ後到着、同三日飛脚今暮前到着、色々御養生被盡り得共其全無御座、<sup>(卷)</sup>今月三日晚七ツ時前被遊去り段被申越趣承知仕、絶言語奉存り、御紙面を以御兩殿様に先御内々申上り處、別々御殘多被 思召御事り、然共於御機嫌者御障不被遊御座、御忌服之御屈被仰上、日積相しらへり處、三日を今日迄十六日罷成、早速御届被仰上候者早過り付、來ル廿三日右御届被仰出答こゝる、其内者御到來之儀御穩便被仰付置り、依之 御守殿に及先御内々こゝる達 御聽置り、廿三日御屋敷中愼等之儀申渡、櫻田・三田に及爲御知申上答御座り、御兩殿様御忌服日數之儀、其外被仰越ケ條之趣、一々致承知り、先此段爲可申越急飛脚兩人今夜中差立被遣り、廿三日後爰元御側廻之内御使被進こゝる可有御座り、其節私共より之伺御機嫌及可申上り、

一於須磨様御卒去之段

總州様 <sup>(編貴御等)</sup> 信證院様 <sup>(編貴女)</sup> 於榮様御殘情被思召候得共、御機嫌御障者不被遊御座り段被申越り趣達 貴聞り、

右申越り、以上、

〔延享元年〕七月十八日

〔卷〕 嶋津右平太  
〔上〕 樺山主計

嶋津 左衛門殿  
嶋津 大藏殿  
嶋津 左殿  
嶋津 内膳殿  
嶋津 部殿  
北條 織部殿  
鎌田太郎右衛門殿

〔卷〕 「御返答」

本文被申越趣致承知、紙面を以達 貴聞り、以上、

八月十六日

〔本文書ハ二〇一八号文書ノ行間朱書ナリ〕

全御譜中

扣正文在家老座

大守様より 於須磨様爲御寺參關山軍兵衛被差越り、  
總州様御機嫌を及被相同  
御女中様方に及軍兵衛こゝる御左右被仰進り、

一總州様に從 薩州様御機嫌御伺之御使、竹之内源藏に被 仰付被差越り、塗御重一組被進告り、其段御使番方同役に申越させり、

穎 娃 内 膳殿  
北 條 織 部殿  
鎌田太郎右衛門殿

信證院様 於榮様 (録豐傳室) 於嘉久様に及御見廻被仰進候、源藏儀 於須磨様御寺參を及相動方可有御座哉、於其元

2021  
(朱)「御返答」

被申談差圖可被成り、

本文之趣致承知り、軍兵衛去ル十五日致着り付、則日

一 於嘉久様に澁谷喜三左衛門母相果り御見廻之御使右同人被仰付、輕丰被進物差元より被差越り、此内飛脚便

太守様より 總州様御機嫌御伺之御使者勤申渡、御口上書之通申上り、翌十六日 御女中様方に之御使者相

ニ被進物之儀、織部殿方御問合之趣有之、御返答申越り、

勤、是又御口上書之趣申上相濟り、

一 右被進物者最早相濟爲申る可有御座と存り、

一 源藏ニ及軍兵衛一所ニ致着り付、則日 總州様に

一 軍兵衛・伊勢仲右衛門・源藏三人共ニ爰許代合前ニ付、

薩州様方御機嫌御伺之御使者勤申渡、御口上書之趣申上、被進り二箱差上り、翌十六日 御女中様方に之御

直御眼被下被差越候條、其元より御返答之儀者別人を

使者勤も相濟申り、

以被仰進る可有御座り、

右申越り條被申談可被致首尾り、以上、

(朱)「延享元年」 七月廿四日 (朱) 嶋津右平太「殿」

(朱)「上」 樺山主計「殿」

関山軍兵衛便

嶋津 左衛門殿

嶋津 大藏殿

嶋津 左殿

一 右ニ付總州様より御禮之儀各迄隼人殿・權左衛門方書

狀を以被申越告り、

一 御女中様方より者御ふみを以被仰進る可有御座り、

一軍兵衛・源藏儀、去ル廿一日四拾九日御法事之節、御寺參可有之方申談、達 貴聞外上御寺參申渡、勅方相濟外、

一薩州様よりお嘉久様は、先比澁谷喜三左衛門母不幸ニ付、御見廻之御使、去ル十六日源藏相勤、被進外二箱差上、御口上之趣申上相濟外、先達外及御問合外被進物ハ、もはや相濟、先便御返答申越通外、

一軍兵衛・仲右衛門・源藏代合前ニ直ニ御暇被下外段得其意外、前條之通御ふミ又老書狀ニ御挨拶被仰進外付、別人被差越儀ニ老無之外、

右及御返答外、可被達 貴聞儀ハ可被申上外、御重

調御返銀之儀ハ、例之通問合申越させ外、以上、

八月廿五日

(本文書ハ三〇二〇号文書ノ行間朱書ナリ)

全御譜中

扣正文在家老座

於須磨様御卒去ニ付

(朱)御返答  
本文政承知、仲右衛門儀去廿一日、四拾九日御法事ニ候故、御寺參相勤方可御守殿より御鎖口添番伊勢仲右衛門其御元御寺參、且有之申談、達 貴聞外上御寺參申渡、勅方相濟候、又御尋之御使被仰付、御香奠御寺納之儀共被仰出外付、

左ニ申越外、

一仲右衛門儀老一通り之御寺參を相勤申答外、

一右御使之人を以  
(朱)本文御尋又者菊姫様より御見廻被仰進候者別紙ニ朱書を以申越候  
總州様 信證院様 お榮様に御尋可被仰進外、菊姫様よりも右御三人様に同人を以御見廻可被仰進外、

一御香奠銀三枚

(朱)本文御香奠御寺納之儀達 貴聞候處、四拾九日御法事之節御寺納可然由被姫君様より御側御用人を以御寺納御代參可被仰付外、御出候外、去九廿一日御法事之節、御側御用人を以御寺納相濟候  
御香奠銀・御目錄其元調被仰付外、

一御香奠銀二枚

(朱)本文御香奠之儀達 貴聞候處、薩州縁託之より御香奠一枚御中除之節御菊姫様より添御用達を以御寺納御代參可被仰付外、御寺納相濟候外、菊姫様より二枚御寺納候而ハ不相並候外、一枚御寺納候儀  
御目錄其元調被仰付外、

右之通萩原殿より致承知外、目錄等之儀可被致差圖

(朱)右之通御香奠御目錄其元調ニ而御寺納相濟申候間、可被差 御聽候外、御香奠銀并御目錄其元調、御返銀等之儀ニ付外、御返銀等之儀ハ例之通致首尾候様御使番申渡候、以上  
ハ、御側御用人御使番より同役ニ問合申越させ外、

此段申越外、以上、

八月廿五日  
七月廿四日

鳴津右平太「殿」  
上 樺山主計「殿」

鳴津左衛門殿  
鳴津大藏殿

岡山軍兵衛使

2024

繼豐公御譜中

同年七月二十二日

(朱) 嶋津 李殿  
[下] 穎娃 内 膳殿  
北條 織 部殿  
鎌田太郎右衛門殿

大樹吉宗公使<sup>三</sup>大久保郷七兵衛教平來<sup>三</sup>于芝邸<sup>一</sup>、賜<sup>三</sup>御鷹所<sup>レ</sup>搏擊之雲雀<sup>三</sup>於繼豐<sup>一</sup>、即日嗣嫡宗信代<sup>三</sup>繼豐<sup>一</sup>  
繼豐旧納未愈故宗  
之<sup>レ</sup>價代<sup>三</sup>詣<sup>二</sup>執政各位之第<sup>一</sup>奉<sup>レ</sup>申<sup>三</sup>謝<sup>一</sup>之<sup>一</sup>、

2025

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見<sup>レ</sup>、

公方様益御機嫌能被成御座、六月九日東叡山

(音祭法母)

淨圓院様御位牌所御參詣之儀被承之、恐悦旨尤<sup>レ</sup>、紙面

趣各申談及 上聞候、恐<sup>レ</sup>謹言、

朱カキ

延享元年

八月十一日

松平上總入道

本多中務大輔

忠良判

2026

吉貴公御譜中

正文在島津肥前忠紀

寫

(音傳) 嶋津玄蕃殿  
(忠紀) 島津周防殿  
(久保) 島津兵庫殿

右御一門衆八朔進上物來月朔日進上之筈<sup>レ</sup>、依之右家來使之者熨斗目着用可致<sup>レ</sup>、熨斗目着用之儀者家來身<sup>三</sup>付<sup>レ</sup>之儀<sup>二</sup>之無<sup>一</sup>、主人之御格式<sup>三</sup>之右使相勤<sup>レ</sup>譯を以致着用儀<sup>二</sup>之得共、家來之役目<sup>三</sup>無構、何役<sup>二</sup>之及熨斗目可致着用<sup>レ</sup>、且又熨斗目着不致格之者<sup>三</sup>之及右使之場<sup>二</sup>相勤<sup>レ</sup>ハ、熨斗目着用可致<sup>レ</sup>、右進上物之節請取之面<sup>レ</sup>者熨斗目着用不及<sup>レ</sup>、

右之通山澤十太夫・肥後平左衛門<sup>三</sup>申渡、奏者番<sup>二</sup>及申渡、其外首尾係<sup>レ</sup>及可申渡<sup>レ</sup>、

朱カキ

延享元年

八月

(島津久徳) 大藏

2027

越前島津氏忠紀譜中

延享元年甲子八月二十五日有<sup>レ</sup>命、忠紀移<sup>二</sup>居於鼓川宅<sup>一</sup>、然年猶幼也、成長之際、ヒトシク齊<sup>レ</sup>居<sup>二</sup>城内<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>勤<sup>二</sup>宅<sup>一</sup>

公事<sup>一</sup>、家士未多故、所屬之士撰、而詳降<sup>ニ</sup>命於比志

島隼人範房<sup>一</sup>、御下亭之家屋都而無殘賜<sup>レ</sup>之、且添<sup>下</sup>賜運<sup>ニ</sup>

移<sup>ス</sup>之於鼓川宅<sup>ニ</sup>之資用上、國老頼娃内膳久周傳之、範房代

奉<sup>ル</sup>之、見于左今茲七月三日於須磨方卒去、六十六、號月桂院殿心一獻珠大姉、志紀舊蒙大師之勳育同居于御下亭、然卒去故有移居於鼓

川宅之命、所屬大師之士及醫師老女衆、  
故實儀延及九月朔日、各家臣使者着熨斗目一登、城可捧之、

2028

嶋津周防殿

右鼓川屋敷に被移、只今之通ニる今程被居家來表當分人少ニ外故、被附置外者之儀、委細隼人に被仰付置外、御下屋敷御作事不殘周防殿に被下、引料表可被下外、

右之通被 仰出外間此段申達外、

朱力年  
延享元年甲子八月廿五日

八月

(頭桂久周)  
内膳

2029

同月二十九日有レ命、島津貴備・島津忠紀・島津久門者國之懿親也、故八朔上進御太刀・御馬、今茲九月朔日朔日月桂院殿未除、故實儀延及九月朔日各家臣使者着熨斗目一登、城可捧之、

着熨斗目<sup>(久地)</sup>非家士之衣服、依主人之格式也、國老島津大藏久春使<sup>(久地)</sup>木村四郎左衛門時央<sup>(久地)</sup>傳<sup>(久地)</sup>之山澤盛香、

詳于左、

2030

寫

島津玄蕃殿

島津周防殿

島津兵庫殿

右御一門衆八朔進上物來月朔日進上之筈外、依之右家來使之者熨斗目着用可致外、熨斗目着用之儀家來身ニ付之儀ニる無之、主人之御格式ニる右使相勤外譯を以致着用儀ニ外得者、家來之役目ニ無構、何役ニる者熨斗目可致着用外、且又熨斗目着不致格之者ニるも右使之場ニ相勤外ハ、熨斗目着用可致外、右進上物之節請取之面々者熨斗目着用不及外、

右之通山澤十太夫・肥後平左衛門に申渡、奏者番に表申渡、其外首尾係へも可申渡外、

朱力年  
延享元年甲子八月廿九日

八月

大藏

2031

繼豊公御譜中  
正文在正建寺  
寶永五子年  
一白銀拾五枚

吉貴公より爲月牌料被附置り、

享保七寅年

一新銀五枚

信證院様より右同斷、

右老正建寺に（上杉家女）心空院様御位牌被成御座り付、右之通

被附置り、

大玄院様前御前様（高津綱重）に被成御離別候得共、御嫡母之筋

と思召之譯有之右之通にり、此内 月桂院様御回向被

遊候得共、此已後何方様より奉御上ケ物無之り、

總州様より奉毎年御正忌日に官香一把、礮奥小役人御

使に御寺納之筈にり、右通

總州様被遊りとの譯にり、後年其例を被取に不及事に

間、以來之儀奉右之通先年被附置り月牌料を以、正建

寺寺役に相勤筈にり、此旨紛敷無之様可被記置り、

（米）「延享元年」九月

2032

右之通此節被仰渡り間、先年被附置り右銀子を以、御月牌等寺役可被相勤り、左にり後年紛敷無之様可被記置、

住替之節堅固に可被次渡り、以上、

子九月八日

正建寺

寺社奉行所

2033

吉貴公御譜中

正文在文庫

なをくしたひに冷氣になりまいらせりへ共、御さ

ゝわりも御座あそハしりハすりや、かすゝきかせ

られたくおほしめしり、何もくよふ申せとの御事

に御座り、めてたくかしく、

重陽の御祝儀御めてたさ、まつく

總州様御機嫌よく入らせられ、御祝儀御にきく敷御い

わるあそハしり半と御めてたくおほしめしり、爰御程に

ても

太守様御機嫌よく

姫君様 御子様かた御き嫌よく、御にきくしく御いわ

るあそハしり、さてハ此御もくろくのことく、いつもの

通重陽の御祝義までに進しられり、誠に幾久しくあひか

はらすと祝入らせられり御事、御座り、此よしよろしく

申せとの御事、御座り、めてたくかしく、

朱力キ 延享元年

お

繼豊公御譜中

扣正文在右筆所

ひち嶋  
嶋津

人さま

荻原

權左衛門さま

岡田

人、  
藤え

先達申上上り薩摩國水引村之内京泊にあり、去年十一月東埔棄出唐船致破損り、唐人共以手船長崎に送遣り處、唐人乘船水主之内與次右衛門と申者、唐人頼之品物賣拂り仕方不届り故、相搦逐穿鑿り趣、長崎奉行衆に家來共より得御差圖置り處、與次右衛門事入墨之上、家財半分取上無構所住居者差免、唐人漂着之場所挽船等は不差出、長崎表に罷越り様可申付旨、此度長崎奉行衆に被相達り趣を以、早速御仕置申付、右之段彼地奉行衆に申達り由、國元家來共申越り、此段申上り、以上、

〔延享元年〕  
九月十三日

御名

〔右御用番松平左近將監様へ差出り節、若最前被召出り御方も差出り様にと被仰聞儀も可有之と、用心に貳通相調差上り得共、用心ハ無用に相成り〕

宗信公御譜中

正文在琉球國國司

爲年始之嘉儀被差渡使簡、殊如目錄贈給之、入念り之段令祝着り、猶期後喜之時候、恐惶不宣、

〔延享元年〕

九月十五日 侍從宗信御判

謹上 中山王

繼豊公御譜中

正文在琉球國國司

爲年始之嘉儀被差渡使簡、殊別飲之通贈給之、入念候段令祝着り、猶期後喜之時り、恐惶不宣、

九月十五日 中將繼豊御判

謹上 中山王

全上

正文在文庫

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之外、遂披露り處一段之御仕合り、恐々謹言、

〔延享元年〕

九月十八日

乘賢判

2038

松平大隅守殿

乘賢

松平能登守

全上

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔延享元年〕

九月十八日

乘邑判

松平大隅守殿

乘邑

松平左近將監

2039

正文在文庫

全上

爲重陽之祝儀、小袖一重到來歡覺外、委曲松平左近將監可述外也、

〔延享元年〕

九月十八日



薩摩

中將殿

2040

全上

爲重陽之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之外、遂披露外之處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔延享元年〕

九月十八日

松平能登守

乘賢判

松平大隅守殿

2041

繼豊公御譜中

正文在文庫

端午之奉書可相渡外間、明日四時西丸の家來可被差出外、以上、

〔延享元年〕

九月十九日

松平能登守

松平大隅守殿

2042

吉貴公御譜中

同年七月三日繼豊實母稱於領醫方法醫月桂院殿心一卒殿深大姉、名越右衛門源次也、府城中

四醜亭、同月二十四日

大樹吉宗公

右大將家重公使上使秋元攝津守涼朝來芝邸弔於繼

豊上、事達于薩州大磯館、即吉貴上書謝之、仍執政被

投<sub>二</sub>奉書<sub>一</sub>矣、尚繼豐譜中詳也、

2043 正文在文庫

御札令披見<sub>レ</sub>、同氏大隅守實母死去付<sub>レ</sub>、從

公方様 右大將様以 上使、大隅守事御懇之蒙 上意、

難有由得其意<sub>レ</sub>、紙面之趣各一覽之事<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

朱カキ  
延享元年 九月廿二日 松平左近將監 乘邑判

松平上總入道

2044 全上

御札令披見<sub>レ</sub>、同氏大隅守實母死去付<sub>レ</sub>、大隅守に以

上使御懇之 上意、難有由得其意<sub>レ</sub>、紙面之趣令承知<sub>レ</sub>、

恐<sub>レ</sub>謹言、

朱カキ  
延享元年 九月廿二日 松平能登守 乘賢判

松平上總入道

2045 吉貴公御譜中

正文在文庫

返<sub>レ</sub>何も<sub>レ</sub>幾久しくと御いわるあけなされ<sub>レ</sub>、

此よし何もよろしく仰あけられ<sub>レ</sub>やうにと御たのミ  
おほしめし<sub>レ</sub>、めてたくかし<sub>レ</sub>、  
姫君様より仰あけられ<sub>レ</sub>、まつ<sub>レ</sub>

總州様御機嫌よく御座被遊<sub>レ</sub>御事、御めて度おほしめし  
あけられ<sub>レ</sub>、さては御年賀の御いわる御する<sub>レ</sub>と被遊  
御事、かす<sub>レ</sub>御めてたくおほしめし<sub>レ</sub>、右に付此御  
目錄の通り御祝あけ被成<sub>レ</sub>しるしまてに、御あら<sub>レ</sub>し  
き御事なから進しられ<sub>レ</sub>、まことに干とせ萬代の外まて  
も、かきりなき御壽御幾賀も御いわるあそハされ<sub>レ</sub>御事  
と、御めてたくおほしめし上られ<sub>レ</sub>、めてたくかし<sub>レ</sub>、

朱カキ  
延享元年

ひし嶋

嶋津 はやとさま

荻原

權左衛門さま

人、

2046 繼豊公御譜中

今茲十月十四日相<sub>二</sub>當

(羅川家遺)  
文昭院殿三十三年忌景、因

將軍家被<sub>レ</sub>修<sub>二</sub>梵儀於増上寺<sub>一</sub>、故翌十五日繼豊使<sub>三</sub>蒲生十  
郎左衛門清高<sub>番頭</sub>人<sub>預</sub>獻<sub>二</sub>納香奠銀拾枚于 尊靈前<sub>一</sub>也、

2047

全上

正文在文庫

重陽之 御内書可相渡外間、明日五半時 御城の家來可被差出外、以上、

〔延享元年〕

十月廿日

松平左近將監

松平大隅守殿

2048

継豊公御譜中

正文在島津備前實傳

今日拜領被仰付外御時服牡丹之御紋、永々御嫡々老勝手次第被相用外様 御意候、

〔延享元年〕

十月廿一日

御取次 榊山主計

嶋津玄蕃殿

2049

全上

牡丹之御紋拜領被仰付外 思召者、十文字八自被相用事外、桐之御紋者從

大玄院様嶋津大學亡父江拜領、

總州様桐之丸之御紋者嶋津周防殿拜領ニ由外、依之此節

2051

全上

牡丹之御紋拜領被仰付外、右之趣老屹被仰渡儀ニ由老無之外、爲御納得申達置外様被仰付外、

〔延享元年〕 十月

榊山主計

嶋津玄蕃殿

2050

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 右大將様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悅

旨尤外、將亦今度日光 御宮 御靈屋 正遷宮 正遷座

相濟外段被承之、目出度被存由得其意外、紙面之趣及言

上外、恐々謹言、

〔延享元年〕

十一月十二日

松平能登守 乘賢判

松平上總入道

御札令披見外、

公方様 右大將様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悅

旨尤外、將又今度日光山 御宮 御靈屋御修復出來 正

遷宮 正遷座相濟外段被承之、目出度被存由得其意外、紙面趣各申談及 上聞外、恐く謹言、

朱カキ 延享元年 十一月十二日

酒井雅樂頭 忠知判

松平上總入道

吉費公御譜中 正文在文庫

返くことの外のかんしにて御さ外へ共

總州様いよく御機嫌よくいらせられ外や、かす

くきかせられたくおほしめし外、

大守様も寒氣の御さハリもあらせられすいらせられ

外て、をなし御事と御悦ニ思しめし外、何も宜申上

へく外、

菊姫様も宜仰上られたきとの御事ニ御さ外、此よし

も宜御申上成へく外、めてかしく、

なをまたほんこハ相かハらすはすの飯進しられ迄こ

て、御禮と御座外て御ふミのやう、かたしけなく思

しめし外、誠に御ねん入らせられ外御事ニ思しめし

外、いく久しくとの御事迄こおほしめし外、此よし

もよろしく仰上られ被成へく外、かしく、

寒中なからことのはか御ひえくしく御座外へ共

總州様御機嫌よく被爲入、その方く様こもかハらせら

れ外御事御さあそハし外ハすや、きかせられたく思しめ

し外、こ御ほとこても

大守様はしめさせられ御揃あそハし御機嫌よく被爲入

外、扱ハ此御もくろくの通、寒中の御左右きかせられ外

御事迄に進しられ外御事ニ御座外、此よし宜御申上成へ

く外、めてたくかしく、

朱カキ 延享元年

ひし嶋

隼

人さま

荻原

しま津

權左衛門さま

岡田

人々

藤え

全上

返くいよく御機嫌よく御にきくしく御いわる

あそハし御事、御めてたくおほしめし外、何もよろ

しく御申上成へく外、めてたくかしく、

暮の御めてたさ、となたもをなし御事こいわる入らせら

れ外、まつく

總州様御機嫌よく被爲入、御にきくしく御いわるあそ

ハしハんと、かすく御めて度思しめしり、そのほか様方にも御き嫌よく、めてたくおほしめしり、こゝ御ほとこても御揃あそハし御機嫌よく、御にきくしく御いわるあそハし、扱ハ此御もく録のことく御身鏡の御祝義御いわるあそハしりて進しられり御事ニ御座り、誠にいく干とせ萬く年も御はんしやうの御事にて、相かハらす御しうき仰被進やうにと祝ひ入らせられり、此よしよろしく御ひろう御申上成へくり、めてたくかしく、

朱カキ  
延享元年

ひし嶋 荻原  
津 人さま  
嶋 權左衛門さま 岡田  
人々 藤え

2054 繼豊公御舎弟

忠通

初忠雄 安之助 因幡

延享元年甲子十二月六日生、母近藤嘉包女、

爲禰寢孫左衛門清香養子、號小松、

寶曆六年二月廿一日去禰寢家、爲嶋津因幡忠郷後嗣、

2055

繼豊公御譜中

扣正文在右筆所

私事去亥年御暇年ニ御座り處、病氣全快不仕り付滯府仕度之旨、去々戌十二月奉願り處、願之通被 仰出、緩々遂保養難有仕合奉存り、然考來年御暇年ニ御座り間、病氣快り考來四月國元之御暇可奉願り得共、病氣今以相勝不申同篇ニ御座り、御禮日出仕及御斷申上候、右之通御座り故、何と考來年及致滯府、於爰元得と養生仕度り、尤來春迄見合、至其砌滯府之願可申上り得共、只今之躰ニ考來全快之程難計御座り付此節奉願り、以上、

十二月三日

御名

〔朱〕  
〔御付札〕

願之通可有滯府り、

〔朱〕  
〔右御書付延享元年甲子十二月三日御用御頼朽木大和守様を以被

差出り處、同四日右之通御附札出り付、翌五日御口上書ニ而

大和守様を以御禮被仰上り

2056

全上

私儀來年御暇年ニ御座り得共、先達り奉願り通病氣罷在り付、毎度滯府之儀奉願り、就夫同氏薩摩守事成長仕

外間、來年私國元江初の御暇奉願度外、私儀病氣故滯

府仕、久々國元江差越不申外、同氏上總入道ニ及老年罷

成外間、薩摩守對面爲仕度奉存外、尤來年可奉願外得共

用意を及仕置度外付、御内意相伺申外、以上、

〔延享元年〕十二月十一日 御名

〔米〕右松平左近將監様へ朽木大和守様を以被差出外處、翌十二日

右御付紙之通被仰渡り、御留守居野村大右衛門被召呼、右御

伺書御渡被成外、右御禮十三日大和守様ニ而被仰上外御口上

書左之通

全上

同氏薩摩守事、來年私國元江初の御暇奉願度外付、御

内意相伺申外處、來年勝手次第相願可申旨被仰渡、難有

仕合奉存外、右御禮以朽木大和守申上外、以上、

〔米〕「延享元年」十二月十三日 御名

全上

正文在文庫

今朝蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之候、遂披露外處一段之御

仕合外、恐々謹言、

〔米〕「延享元年」十二月十八日 乘賢判

松平大隅守殿 乘賢

〔米〕「在右裏」松平能登守

2059 全上

今朝蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之外、遂披露候處一段之御

仕合外、恐々謹言、

〔米〕「延享元年」十二月十八日 乘邑判

松平大隅守殿 乘邑

〔米〕「在右裏」松平左近將監

2060 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、今度

文昭院様三十三回御忌御法事 於増上寺御執行相濟、十

月十四日 御靈屋 御參詣之儀被承之、恐悅旨尤外、紙  
面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

朱力キ  
延享元年 十二月十九日

松平左近將監  
乘邑判

松平上總入道

繼豐公御譜中  
同年十二月十九日

大樹吉宗公使山口孫次郎直倫來于芝邸、賜御鷹所、  
搏擊之鶴一隻於繼豐、即日嗣嫡宗信代繼豐繼豐旧稱未愈  
故宗信代之

至執政各位之第二奉申謝之、

○今茲五月二十五日吉貴代繼豐、使島津三次郎(忠憲)以吉

貴之三男承和泉家之後上、時吉貴口自見傳可與二  
所之地等於三次郎之旨甲、故十二月二十一日吉貴豫請

繼豐二分割薩州指宿郷内小牧村・岩本村・西方村、同

州類姓内池田村・仙田村周廻十里七町余、其入  
都三千五百六拾式石余、新名今和泉

其名称和泉者三次郎之元祖下野守忠氏領薩  
州出水郷故世以和泉為家号云是以魏旧名之 副地圖一以賜之三次

郎、既而明年二月朔日繼豐為書加花押、以與之三次

次郎矣、載詳于左、

全上

正文在島津因幡忠郷

三次郎

右類姓・指宿之内繪圖面之通一所之地遣外、所之名今和  
泉之可唱外、且又鹿兒嶋江屋敷願出外ハ、其節可遣候、

(忠憲)  
「延享元年」十二月廿一日

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、就寒中

公方樣 右大將樣 大納言樣御機嫌被相伺之外、益御勇

健御儀外間可御心易外、隨而鯛一箱被獻之外、各申談遂

披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ  
延享元年 十二月廿二日  
松平左近將監  
乘邑判

松平上總入道

2064  
全上

御札令披見外、就寒中

公方樣 右大將樣 大納言樣御機嫌被相伺之外、益御勇健(備脱カ)

御儀外間可御心易候、隨而鯛一箱被獻之外、遂披露外處

一段之御仕合外、恐々謹言、

宋カキ  
延享元年

十二月廿二日

松平能登守

乘賢判

松平上總入道

吉貴公御譜中

正文在文庫

返々御表よりも御申上被成り由、何も々よろしく申上まいらせり、めてたくかし、

十一月十八日附きて御文下されり、

公方様 右大將様 大納言様益御機嫌よくならせられ、御めて度思召りよし、寒中猶以て御機嫌御伺ひなされり御ふみの様、よろしく申あけまいらせり、めてたくかし、

宋カキ

延享元年

まつ平

上總入道様

御返事

豊岡

梅その

浦尾

高瀬

越前島津氏忠紀譜中

延享元年十二月朔日島津三次郎吉貴公續三男和泉家跡之謝禮

幼稚故、島津久門代而登レ城、進ニ上シテ御太刀一腰・御馬

一疋・三種六樽於 太守繼豊公ニ奉レ申ニ謝之、公依ニ病

痾ニ淹ニ留于東都、故忠紀奉レ命登レ城、代レ公而受ニ

其報禮也、勤事始ニ茲ニ故記焉、

同月二十五日越前島津氏系圖一卷・家譜六冊於ニ記録館ニ

編修甫、就テ焉ニ先皇寬保三年癸亥十二月五日比志島範房奉命、以山縣盛香傳編修

及德斯萬年也、豫備ニ吉貴公高覽、而清書裝潢簡冊全就、

呈ニ國老席、於是ニ以ニ國老連名副書ニ北條時守被レ附ニ之於ニ

盛香也、見ニ于左、

2067

覺

一越前嶋津家系圖壹卷不洗包

一右同家譜六冊

右御方事先年就越前嶋津家跡相續、此節於御記錄所右系圖家譜編集被仰付、被附與之畢、全可有筒藏之狀如件、

鎌田太郎右衛門

延享元年十二月廿五日

政直(花押) No.12

2068

吉貴公御譜中

正文在島津肥前忠紀

覺

一越前嶋津家系圖壹卷不先包類入

一右同家譜六冊

右御方事先年就越前嶋津家跡相續、此節於御記錄所右系圖家譜編集被 仰付、被附與之畢、全可有筒藏之狀如件、

延享元年十二月廿五日

鎌田太郎右衛門

政直判

嶋津周防殿(忍)

北條 織部 時守(花押) Na.13

穎娃 内膳 Na.5

嶋津 久蒙左 Na.7

嶋津 大藏 久純(花押) Na.8

嶋津 左衛門 久甫(花押) Na.14

2069

繼豊公御譜中

正文在文庫

爲歲暮之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲本多中務大輔可述外也、

(卷) 「延享元年」十二月廿七日

薩摩

中將殿



2070

全上

爲歲暮之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之外、遂披露外

嶋津周防殿

北條 織部 時守判

穎娃 内膳 久周判

嶋津 久蒙左判

嶋津 大藏 久純判

嶋津 左衛門 久甫判

處一段之御仕合、恐々謹言、

(朱)  
「延享元年」

十二月廿七日

松平大隅守殿

酒井雅樂頭  
忠知判

(表紙)

吉 貴 公  
 繼 豐 公  
 宗 信 公  
 延 享 二 年  
 自 正 月  
 至 十 月

追 舊 記 雜 録  
 卷 九 十

吉貴公御譜中

正文在文庫

誠に幾久しく萬々年と御たかひに御き嫌よく御察昌の御事ニ、相かハらす御めてたさのミといわる入らせられ、此よしよろしく御申上被成られ、やうこ、よくく申せとの御事ニ御さ、返く此はるハいつこすくれゆふくといたし、となたもおなし御事ニ御悦ニ思召ハんと、是より御子様方御めてたき御事共にて

總州様はしめられ、方々様こ、御ほとこていかほと

か御めて度御悦思召り、暮はる共一入御にきく御いわるあそハしり、何もよろしく御申上被成まいらせりへくり、めてたくかしく、

なをまた菊姫様こもよろしく御つて進しられたく思しめしり、よろしく御申上成へくり、めてかしく、あら玉りまいらせり此春の御祝義、をなし御事にいわる入らせられり、まつくその御地にて

總州様御機嫌よく被爲入、春を御むかへあそハし、御にきくく御いわるあそハしりハんと、かすく御めて度思しめしり、その御方様方御き嫌よく春に御移りあそハしり、御にきくく御いわる共御めて度思召り、こ

御ほとこても  
 大守様  
 姫君様方 御子様方御揃あそハし、はるを御むかへ被成、御にきくく御いわるあそハしり、扱ハ此御もく録のことく、年始の御ふミ初め進しられり付、わざと御祝ひあそハしりて進しられり御事ニ御さ、めてたくかし

朱力斗  
 延享二年 正月二日

あ

ひし嶋(龜房) 人さま 荻原  
 準(久通) 人さま 岡田  
 津(久通) 人さま 藤え  
 權左衛門さま 人々

全上

返く御にきくしく御いわるあそハし御事、御  
 めて度おほしめし御事、何もよろしく御申上成へく、  
 めてたくかしく、

あら玉りまいらせり年始の御祝義、をなし御事こいわる  
 入らせられり、まつく

總州様御機嫌よく被爲入、御にきくしく御いわるあそ  
 ハし、そのほか様方も御機嫌よく一しは御にきくしく  
 春に移らせられ御事、かすく御めて度思しめし、  
 こ、御ほとこても御揃あそハし御機嫌よく、御にきく  
 しく御いわるあそハし、扱ハ此御もくろくのことく、  
 年明初め御ふみて仰被進御事迄に進しられ、誠に  
 いく久しくまんく年も相かハらす仰被進やうにとい  
 わる入らせられ、此よしよろしく御申上成へく、め  
 てたくかしく、

朱カキ  
 延享二年 正月二日

6

ひし嶋 人さま 荻原  
 準 人さま 岡田  
 しま津 人々 藤え  
 權左衛門さま 人々

継豊公御譜中

正文在文庫

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之、遂披露外處一段之御  
 仕合外、恐々謹言、

〔朱〕  
 「延享二年」 正月七日 忠良判

〔鳥津繼豊〕  
 松平大隅守殿

〔朱〕  
 一在右裏  
 本多中務大輔

忠良

全上

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之候、遂披露外處一段之御  
 仕合外、恐々謹言、

〔朱〕  
 「延享二年」 正月七日 乘賢判

松平大隅守殿

乘賢

2075

吉貴公御譜中

正文在文庫

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力斗  
延享二年 正月十一日

酒井雅樂頭

忠知判

本多中務大輔

忠良判

松平左近將監

乘呂判

(爲津吉貴)  
松平上總入道

2076

全上

爲年頭之御祝儀、

右大將様 大納言様江以使者御太刀・御馬代黃金被獻之外、遂披露外之處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力斗  
延享二年 正月十一日

松平能登守

乘賢判

松平上總入道

2077

繼豐公御譜中

正文在文庫

吉書

一神社佛閣修造興行事、

一可專勸農事、

一可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨可有沙汰之狀如件、

延享二年正月十一日 繼豐御判

2078

全上

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(卷)  
「延享二年」 正月十一日 忠良判

松平大隅守殿

忠良

(卷)  
「在右裏」  
本多中務大輔

2079

全上

爲年頭之御祝儀、

右大將様 大納言様江以使者御太刀・御馬代黃金被獻之

外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(宋)「延享二年」

正月十一日

乘賢判

松平大隅守殿

乘賢

(宋)  
「在右裏」

松平能登守

2080

繼豊公御譜中

正文在彌寝式部

(島津繼豊)

(花押 No.1)

其方事依爲彌寝家猶子、相用本家小松稱號、以來嫡子代  
々可稱小松者也、仍如件、

延享二年正月廿五日

(吉貴明、忠風)  
小松安之助とのへ

2081

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 右大將様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦

旨尤外、將又舊冬十一月廿四日御曲輪之内出火之處、早

速鎮外段被承之、玆重由得其意候、紙面之趣各申談及

上聞外、恐々謹言、

朱力平

延享二年 正月廿七日

本多中務大輔  
忠良判

松平上總入道

2082

全上

御札令披見外、

公方様 右大將様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦  
旨尤外、然若舊冬十一月廿四日御曲輪之内出火之處、早  
速鎮外段被承之、玆重由得其意外、紙面趣及言上外、恐  
々謹言、

々謹言、

朱力平

延享二年 正月廿七日

松平能登守  
乘賢判

松平上總入道

2083

吉貴公御譜中

正文在文庫

なをく何もよろしく申上まいらせ外、めてたくか

しく、

正月四日付にて御文下され外、

公方様

右大將様

大納言様御機嫌よくならせられり御事、御目出度思召被成りよし、扱は大隅守殿御事いまた御病氣御全快被成りはすりニ付、當年も御滞府ニ成りて、とくと御養生被成度よし御ねかひなされり所ニ、何もく御ねかひ之ををりニ仰出させられり御事、有難思召りよしにて、右之御禮

右大將様へも仰上られり通、何もよろしく申上まいらせり、めてたくかしく、

宋<sup>カキ</sup>延享二年

松平

御返事  
かつさ入道様

人々御中

豊をか

梅その

浦尾

高瀬

6

2084

継豊公御譜中

正文在島津因幡

薩摩國穎娃郡之内、同國揖宿郡之内今度號今和泉、其方一所之地宛行之畢、至于子孫全可令領知之狀如件、

延享二年二月朔日

繼豊御判

(忠<sup>憲</sup>)  
島津三次郎殿

2085

吉貴公御譜中

正文在文庫

返くいまたひへまいらせりま、なを御さハリもあらせられりハぬやうにとおほしめしり、何もよろしく御申上成へく、

菊姫様もおなし御事御さり、よろしく仰上られたたく思しめしり、同じく御申上成へく、めてかしく、

上巳の御祝義、となたもをなし御事いわる入らせられり、まつくその御地にて

總州様御機嫌よく被爲入、その外様方も御きけんよく、御にきく鋪御祝ひあそハしりハんと、かすく御めてたく思しめしり、こも御揃あそハし御機嫌よく被爲入、御にきくしく御いわるあそハしり、扱ハ此御もくろくのことく、上巳の御しうき御いわるあそハしりて進しられり御事ニ御さり、誠にいく久しく萬々年もとの御事迄思召り、此よしよろしく御申上成へく、めてたくかしく、

朱力キ 延享二年 二月三日 方

ひち嶋 荻原  
しま津 岡田  
權左衛門さま 藤元  
人々

吉貴公御譜中  
正文在文庫

返くこゝもとこても御揃あそハし御機嫌よくいら  
せられり、廿五日ニハ御天氣よく御するくと御  
本丸へいらせられ、めてたく御悦ニ思しめしり、  
菊姫様もおなし御事り、宜申せとの御事御さり、め  
てかしく、

春なからいまたことのほか餘寒もつよく御座りへ共、ま  
つくその御地にて

總州様御きけんよく被爲入りや、被爲聞度おほしめしり、  
扱は正月廿五日ニハ

姫君様 菊姫様御同道にて 御本丸へ御年禮に被爲入、  
御にきくしく御いわるあそハしり、いかほとかく御  
悦におほしめしり御事ニ御座り、夫ニ付此御はこの内  
公方様御はいりやうあそハしりまゝ、相かハらす御す

そはけに進しられり御事ニ御座り、誠にいく久しく萬  
年もとの御事迄におほしめしり、此よしよろしく御  
ひろう御申あげ被成へくり、めてたくかしく、

朱力キ 延享二年 二月七日 方

ひち嶋 荻原  
嶋津 人さま 岡田  
權左衛門さま 藤元  
人々

全御譜中  
正文在文庫

伊作家御代々御位牌別る鹿相ニ有之、又者損り表有之り  
付る、從

總州様御再興此節出來 御入寺御遷座寺役ニ相勤り、  
右之通 思召を以被 仰出御再興之御事り故、御記録

所にも可記置り、  
朱力キ 延享二年 二月 (顯桂久周) 内膳

繼豐公御譜中

延享二年乙丑二月十二日晝自江府青山傍ニ出火、受三西北  
之風ニ人家多燒亡、屆翌早天火鎮矣、乃吾高輪第及南品

繼豊公御譜中  
正文在文庫

川之宅地亦罹「火災」也、

全上

扣正文在右筆所

昨十二日青山邊より出火、高輪下屋敷類焼仕、北東長屋之内并西長屋相殘、同所抱屋敷且又南品川抱屋敷致焼失外、此段申上候、以上、

二月十三日

松平大隅守

〔米〕  
「覺」

一御届書一通

酒井雅樂頭様

御取次

稻留善左衛門

但高輪御屋敷并同所御抱屋敷・南品川御抱屋敷御類

焼二付

右に持参仕、右御取次に差出外處、御承知被成候由、  
右同人を以被仰聞候、

二月十三日

野村大右衛門〔米〕

歳暮之 御内書可相渡外間、明日五半時 御城に家來可被差出外、以上、

〔米〕  
「延享二年」

二月廿四日

本多中務大輔

松平大隅守殿

全上

扣正文在右筆所

同氏薩摩守儀、今年私國元は初め之御暇被下候様仕度奉

願外、以上、

〔米〕  
「延享二年」

二月廿五日

〔米〕  
「右御用番酒井雅樂頭様江御用御頼御先手小笠原縫殿助様二而

被差出候、御請取被成外事」

宗信公御譜中

今茲延享二年乙丑二月二十五日繼豊 上三書 官府、願三  
嗣嫡宗信始而到三于領國〔米〕、蒙三 允容一矣、同年四月  
十六日

大樹吉宗公

右大將家重公使三 上使執政酒井雅樂頭忠知來三吾芝第一、

賜宗信始而到薩府之告、

自

吉宗公拜領紗綾二十卷統例賜時服五十、雖然享候、七年減少獻賜之品物故也

家重公亦賜縮緬十卷、即日宗信詣執政各位之第一、奉

申謝之、且阿部伊豫守正右代繼豐到執政之第二、奉

申謝前件旨趣一矣、翌十八日宗信應教登營、於白書

院拜調

吉宗公、奉申謝始而賜告、時下懇篤之尊言、祝龍

蹄一匹、是故同月二十七日發東都芝邸、一門島津玄蕃

貴儔、家老樺山主計久初、側用人市來次郎左衛門政方、

用人蒲生十郎左衛門清高、近習役岸喜右衛門章辰・土持

新八榮貞等屬從駕一矣、經東海美濃驛路、然東海道中

因霖雨、諸所大小川水汎濫而絕涉、故連日淹留、五月晦

日漸著、城州伏見旅館、六月四日出旅館、駕舩下河

流、著攝之大坂旅館、同月十一日出大坂、歷山陽道、

七月五日到豐之大里、經九州路、同月十六日到西

薩出水郷假館、時組頭番頭役島津八郎左衛門久丘豫出

薩府、此日登假館、奉宗信到國謝恩使之命、同月

二十二日宗信到著薩府、自三之城門入而直著府城

是內吉貴之兼命也、島津久丘者七月十六日夜出三出水假館、取三路於

九州、同月二十三日到豐之小倉、翌日駕舩、八月四

日著攝之大坂港止宿、同月六日泝河流到三城之伏見、

同月七日經東海路、同月十八日著東都芝邸、同月二

十一日久丘候執政酒井忠知、松平左近將監乘邑・本多中

務太輔忠良、西城執政松平能登守乘賢、執政格松平右

京太夫輝貞、若年寄本多伊豫守忠統・板倉佐渡守勝清、

西城若年寄水野壹岐守忠定・戸田淡路守氏房・堀田加賀

守正亮家治公・西尾隱岐守忠直及若年寄各位之第一、呈上

宗信之連署格書勤使節一矣、九月十四日因執政奉書、

翌十五日久丘登營、宗信之獻物捧綸子五卷・干鯛一

箱・芳酒雙樽于

吉宗公、干鯛一箱・芳酒雙樽于

家重公、拜調

兩公、奉申謝宗信初而歸國之恩篤、秋元攝津守涼朝

奏達之、久丘亦親自獻上紗綾二卷・御太刀一腰、御馬

代白銀一枚于

吉宗公、御太刀一腰・御馬代白銀一枚于

家重公、再奉拜調

台顏、松平伊賀守忠愛奏達之、乃退去矣、且登西

城、就奏者衆松平紀伊守信岑一奉申謝前條退去矣、

2094

繼豊公御譜中

扣正文在家老座

同月十七日久丘應<sub>レ</sub>教到<sub>二</sub>松平輝貞之第一、賜<sub>二</sub>宗信<sub>一</sub>之奉書使<sub>レ</sub>用人授<sub>二</sub>與之久丘<sub>上</sub>、同月十八日受<sub>二</sub>執政奉書<sub>一</sub>、是十九日登<sub>レ</sub>營、本多忠良出<sub>二</sub>席于檜之間<sub>一</sub>、手自授<sub>レ</sub>與<sub>二</sub>宗信<sub>一</sub>之奉書於久丘<sub>上</sub>、且拜<sub>二</sub>戴紗綾<sub>二</sub>卷<sub>一</sub>、松平右近將監武元執<sub>二</sub>達之<sub>一</sub>、乃奉<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>謝<sub>一</sub>之退去矣、同月二十日因<sub>二</sub>執政奉書<sub>一</sub>、到<sub>二</sub>西城執政松平乘堅之第一、賜<sub>二</sub>宗信<sub>一</sub>之奉書手自授<sub>二</sub>與久丘<sub>一</sub>矣、十月二日使節事畢、而久丘出<sub>二</sub>芝邸<sub>一</sub>、歷<sub>二</sub>東海道伊勢大和路<sub>一</sub>、同月二十五日到<sub>二</sub>大坂<sub>一</sub>、駕<sub>レ</sub>船渡<sub>二</sub>棋西海<sub>一</sub>、十二月七日還<sub>二</sub>薩府<sub>一</sub>復命、

御判物御改相濟被遊御、頂戴候<sub>レ</sub>御禮之儀、先例相糺<sub>レ</sub>外處、貞享・正徳二年・享保二年御頂戴之節<sub>者</sub>、御在國<sub>ニ</sub>、御禮使大身分被差上候、通書留相見得、御在府之節、御判物御頂戴御勤之先例見當不申候、此節之儀<sub>者</sub>、御滯府<sub>ニ</sub>被成御座候得<sub>者</sub>、於其元御勤相濟管候間、先例被相糺、御在府之御並様方被承合、御勤相濟<sub>レ</sub>様被致首尾<sub>ニ</sub>、可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之外、此段及御問合候、以上、

〔延享二年〕二月廿七日

鎌田太郎右衛門

2096

繼豊公御譜中

寫正文在江戸家老座

本文被申越趣致承知<sub>レ</sub>、於爰許<sub>レ</sub>爰先例相糺置、當御代之御判物御頂戴被遊<sub>レ</sub>節、御並様方承合達、貴間、御勤相濟<sub>レ</sub>様首尾可仕候、以上、

四月三日

〔本文書ハ二〇九四号文書ノ行間朱書ナリ〕

長野・鹿籠兩金山、多年之間漸くと出金相劣、近年<sub>者</sub>猶纒計<sub>ニ</sub>罷成、過分之御損銀相立、別<sub>レ</sub>及御不勝手<sub>レ</sub>故、金山被取細<sub>レ</sub>ハ、御損銀表致減少<sub>レ</sub>管<sub>レ</sub>外、萬一不圖宜金氣切當候<sub>レ</sub>被取廣儀共候<sub>レ</sub>ハ、何様<sub>ニ</sub>表相調<sub>レ</sub>管<sub>レ</sub>外、然共山

2095

〔御返答〕

島津左衛門殿  
(朱) 穎娃内膳殿  
(朱) 下  
(朱) 島津右平太殿

北條(朱) 織部守  
 伊勢(朱) 兵部  
 樺山(朱) 主計

中未大分人數罷居事<sup>レ</sup>故、兩山共一度ニ取細<sup>レ</sup>ル者<sup>ニ</sup>支<sup>レ</sup>可有之<sup>レ</sup>之間、先鹿籠金山を被取細、片付<sup>レ</sup>以後之様子次第、長野之儀<sup>ニ</sup>被取細筋可有之候、被取細<sup>レ</sup>付<sup>ル</sup>者御届<sup>ニ</sup>及<sup>レ</sup>之間辨儀と、去<sup>ル</sup>申年吟味之趣達 貴聞、吟味之通被仰付、鹿籠金山者其節被取細、其以來餘程御損銀相減<sup>レ</sup>、長野之儀者今以大分御損銀相立、別<sup>ル</sup>御不勝手之事之間、鹿籠金山之格ニ準、長野表此節被取細度儀と申談、比志嶋<sup>(龜)</sup>隼人殿を以達 貴聞<sup>レ</sup>處、弥吟味之通可有之候、鹿籠金山之儀者不及御届取細可有之候得共、金山之儀者巡見 上使御見分<sup>ニ</sup>及<sup>レ</sup>有之場所<sup>ニ</sup>、然者有間敷事ながら、萬一先々巡見 上使又者御目附杯金山御見分之儀共有之、以前之躰<sup>ニ</sup>各別相替候譯御沙汰<sup>ニ</sup>及<sup>レ</sup>有之、其節取細之次第等申上筋<sup>ニ</sup>及<sup>レ</sup>有者如何候間、長野・鹿籠兩金山共連々山衰出金纒計罷成、年々大分之損銀相立<sup>レ</sup>故、手細いたし、少人數<sup>ニ</sup>及<sup>レ</sup>有者候様仕度由、御届被仰上置方可然被 思召<sup>レ</sup>旨、隼人殿より承知<sup>レ</sup>、右之趣達 貴聞猶被致吟味、水野壹岐守様<sup>(忠定)</sup>に御内談之上御届有之方可然旨、是又隼人殿より致承知<sup>レ</sup>條、壹岐守様に被仰入、弥及御届方可然思召<sup>レ</sup>ハ、御届之次第<sup>ニ</sup>付<sup>ル</sup>者申談可被致首尾<sup>レ</sup>、鹿籠之儀者右<sup>ニ</sup>申達<sup>レ</sup>通、最早先達<sup>ニ</sup>取細<sup>レ</sup>爲<sup>レ</sup>有之

事候得共、長野一所此節取細之筋御届可有之<sup>レ</sup>、且又山ヶ野一團<sup>ニ</sup>及<sup>レ</sup>有者爰元<sup>ニ</sup>及<sup>レ</sup>有者山ヶ野金山と唱來<sup>レ</sup>得共、公義<sup>ニ</sup>及<sup>レ</sup>有者長野金山と爲被書出置事<sup>レ</sup>、此段者爲御存<sup>レ</sup>、尤御届相濟、其譯被申越<sup>レ</sup>節達 貴聞、取細之儀可申渡<sup>レ</sup>、以上、

〔延享二年〕 三月十三日 郷原 <sup>(久)</sup>轉

樺山主計殿 <sup>(久)</sup>初  
嶋津右平太殿 <sup>(久)</sup>轉

鎌田太郎右衛門

2097

全上  
正文在伊集院善福寺

廣濟寺住持職事、任先例可令執務之狀如件、  
延享二年三月十六日 中將繼豐御判  
守律西堂

2098

全上  
正文在國分正興寺

正興寺住持職事、任先例可令執務之狀如件、  
延享二年三月十六日 中將繼豐御判

2099

玄晋西堂

全上

正文在文庫

今度於紅葉山

御宮八講御執行相濟外爲御祝儀、以使者目錄之通被獻之

外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(卷)  
「延享二年」

三月十八日

忠良判

松平大隅守殿

忠良

(卷)  
「在右裏」

本多中務大輔

2100

全上

今度於紅葉山御宮八講御執行相濟外爲御祝儀、以使者目

錄之通被獻外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(卷)  
「延享二年」

三月十八日

乘賢判

松平大隅守殿

乘賢

(卷)  
「在右裏」

松平能登守

2101

繼豊公御譜中

扣正文在右筆所

一筆致啓達外、私召仕之女上下二人、此節從國元江戸に

差越外間、御關所罷通外御手形御出可被下外、委細其御

地外差置外家來藤野休右衛門可申上候、恐惶謹言、

(卷)  
「延享二年」

三月十八日

(前司代)  
牧野備後守様

人々

「此御書於御國元御判紙調ニ而相濟外」

2102

吉貴公御譜中

正文在文庫

今度於紅葉山

御宮八講御執行相濟外爲御祝儀、以使者目錄之通被獻之

外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(朱)  
「延享二年」

三月十八日

本多中務大輔  
忠良判

松平上總入道

2103

宗信公御譜中

正文在文庫

今度於紅葉山御宮八講御執行相濟<sub>レ</sub>爲御祝儀、以使者目録之通被獻<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>、遂披露<sub>レ</sub>處一段之御仕合<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

〔延享二年〕 三月十八日 忠良判

〔在口裏〕 松平薩摩守殿 忠良

〔在右裏〕 本多中務大輔

2104 継豊公御譜中 正文在文庫

今朝鯛一折被獻<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>、遂披露<sub>レ</sub>處一段之御仕合<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

〔朱〕 〔延享二年〕 三月廿一日 忠良判

松平大隅守殿 忠良

〔在右裏〕 本多中務大輔

2105 吉貴公御譜中 正文在文庫

御札令披見<sub>レ</sub>、

右大將様益御機嫌能被成御座、正月廿日 東叡山 惣御靈屋 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤<sub>レ</sub>、紙面之趣及言上候、恐<sub>レ</sub>謹言、

〔朱力平〕 延享二年 三月廿三日 松平能登守 乘賢判

松平上總入道

2106 全上

御札令披見<sub>レ</sub>、

右大將様益御機嫌能被成御座、正月廿四日増上寺 惣御靈屋 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤<sub>レ</sub>、紙面之趣及言上候、恐<sub>レ</sub>謹言、

〔朱力平〕 延享二年 三月廿三日 松平能登守 乘賢判

松平上總入道

197 吉貴公御譜中 正文在文庫

御札令披見<sub>レ</sub>、

公方様 右大將様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤<sub>レ</sub>、然者正月廿五日

2108

竹姫君様被爲 入<sub>レ</sub>節、菊事御懇之蒙 上意、從

公方様 右大將様拜領物被仰付、從右衛門督殿 (田安宗武) 刑部卿 (一橋宗尹)

殿爰被遣物有之、且又從

公方様同氏大隅守・薩摩守に及拜領物被仰付、重疊難有  
由得其意<sub>レ</sub>、紙面之趣各一覽之事<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

朱力平 延享二年 三月廿六日

本多中務大輔 忠良判

松平上總入道

全上

御札令披見<sub>レ</sub>、

公方様 右大將様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦

旨尤<sub>レ</sub>、然者正月廿五日大奥に

竹姫君様被爲 入<sub>レ</sub>節、菊事御懇之蒙 上意、從

公方様 右大將様拜領物被 仰付、其上 右衛門督殿

刑部卿殿より及被遣物有之、且又從

公方様同氏大隅守・薩摩守に拜領物被 仰付、重疊難有

由得其意<sub>レ</sub>、紙面之趣令承知<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

朱力平 延享二年 三月廿六日

松平能登守 乘賢判

松平上總入道

2109

經豊公御譜中

正文在種子島藏人

久

延享二丑三月廿八日 (花押 No.1) (島津經豊)

2110

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見<sub>レ</sub>、

(吉志) 公方様 (家重) 右大將様 (家治) 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦

旨尤<sub>レ</sub>、將又今度於西丸 (家重一男、重好) 萬次郎殿御誕生之段被承之、

目出度被存由得其意<sub>レ</sub>、紙面之趣各申談及 上聞<sub>レ</sub>、恐

謹言、

朱力平 延享二年 四月十三日

松平左近將監 乘邑判

松平上總入道

2111

全上

御札令披見<sub>レ</sub>、

公方様 右大將様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦

旨尤<sub>レ</sub>、將亦今度 萬次郎殿御誕生之段被承之、目出度

被存由得其意外、紙面之趣及言上外、恐く謹言、

朱力キ  
延享二年 四月十三日

松平能登守  
乘賢判

松平上總入道

2112 継豊公御譜中

同年四月十六日以

上使酒井雅樂頭忠知、初賜告於嗣嫡薩摩守宗信也、詳記于宗信之譜、

2113 宗信公御譜中

正文在文庫

明日五半時登 城、御暇之御禮可被申上外、以上、

(卷)  
「延享二年」

四月十七日

酒井雅樂頭

本多中務大輔

松平左近將監

松平薩摩守殿

2114 継豊公御譜中

正文在文庫

今朝御香具一箱并丸熨斗一箱被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐く謹言、

(卷)  
「延享二年」

四月廿一日

乘邑判

松平大隅守殿

(朱)  
「在右裏」

松平左近將監

乘邑

2115 全上

今朝御香具一箱并丸熨斗一箱被獻之候、遂披露外處一段之御仕合外、恐く謹言、

(卷)  
「延享二年」

四月廿一日

乘賢判

松平大隅守殿

(朱)  
「在右裏」

松平能登守

乘賢

2116 宗信公御譜中

正文在文庫

(宗)  
薩摩守殿近日御發足被成外よし、夫付

竹姫君より薩摩守殿へ被遣外御用にも外ハんかと 御召

の御羽織

竹姫君様へ進しられり、薩摩守殿御事、御國元の御いと  
ま初てと申御年若こ御座り、ひとしほ御いさましく、上  
總入道殿へ御對面の御事、さそ御悦りハんと

上にておめてたく思召しめさせられり、此よしよろしく

御申上りへくり、右御禮の御事は、大隅守殿 薩摩守殿

より御申上被成り御事ハ、かならずく御無用こ可被成

り、

竹姫君様へ薩摩守殿より御申上

竹姫君様よりこなたへハ仰上られりやうに、御申あけり

へくり、以上、

麴塵キチ

古法之染様

此染物近年仰付られ、吹上御庭役所こ染申り、色相

も能り故、御鷹野召ものなどに仰付られり、此御羽織

も右之きちん染こ仰付られり、呉服所にて染不申、御

庭にて手染こ致りゆへ、御紋所染り事致しかたくりま

ゝ、縫御紋こ仕立申り、

〔包紙ニ口上之覺と有之〕

一別紙書寫相渡申り間、御國元こ可被申上り、御禮之

儀者荻原殿こる大守様 薩州様より之御禮も相濟申  
り、以上、

四月廿五日

嶋津右平太(久郷)  
嶋津大藏(久郷)

樺山主計殿(久郷)

〔本文書ハ二二六号文書ノ行間朱書ナリ〕

吉貴公御譜中

正文在文庫

なをく御表向よりも御申上被成りへ共、なを又御

祝儀御申上被成りよし、何もよろしく申上まいらせ

り、めてたくかしく、

三月十三日付にて御文下されり、まつく

公方様

右大將様

大納言様御機嫌よく成せられ御事、御目出度思召被成り

よし、扱ハ今度 西之丸にて

萬次郎様御誕生あそハし御事、御目出度思召し被成り

よしにて、右之御歡御申上被成り御文のやう、何もよろ

しく申上まいらせり、めてたくかしく、

朱カキ  
延享二年

松平

上總入道様

御返事

人々御中

豊をか

梅その

浦尾

高瀬

方

2119

吉貴公御譜中

正文在文庫

返々御悦のため仰被進り、誠にいく久しく萬々  
年も御繁昌あそハし、御のほりくたりもあそハしり  
御事と、いわる入らせられり、

菊姫様も御なし御事に右之御悦仰上られ、かす々  
おほしめしり、何も宜御申上成へくり、めてたくか  
しく、

御悦のため仰被進り、まつ々その御地にて

總州様御機嫌よく被爲入り御事、かす々御めて度おほ  
しめしり、こゝ御ほとこても御揃あそハし御機嫌よく被  
爲入り、本マ、こん

薩摩守様御する々と御きけんよく御はつそくあそハし  
り、御めて度御悦におほしめしり、御道中もなを御機嫌

よく、御にき々しく御國もとへ被爲入り御事、一入御  
めてたく思しめしり、

總州様はしめさせられ、さそ々御悦と思しめさせられ  
りハんと、いかほとも々めてたくいわる入らせられり、  
此よしよろしく御申上成りへくり、めてたくかしく、

朱カキ  
延享二年

四月廿七日

ひし嶋

津

人さま

荻原

嶋

權左衛門さま

岡田

人々

藤え

按スルニ宗信公十五歳ノ御時ニ当レリ、考ニ供ス

2120

繼豊公御譜中

正文在文庫

爲端午之祝儀、帷子單物到來歡覺候、委曲松平左近將監  
可述り也、

(朱)

「延享二年」

五月二日

吉宗公  
様印

薩摩

中將殿

全上

爲端午之御祝儀、以使者御帷子單物被獻之、遂披露  
處一段之御仕合、恐々謹言、

(采)

「延享二年」

五月二日

松平能登守

乘賢判

松平大隅守殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

返々いよ／＼御き嫌よくいらせられ、御めてたく  
おほしめし、さつま守様五月中ニハ御着あそハし  
御事、御きけんよく御まちたをくあそハしハん  
と、めてたくおほしめし、

大守様も此間中ハ御きけんもよろしくいらせられ  
御事、御なし御事ニかしく思しめし、何も宜御申上  
成へく、かしく、

二月廿五日の御日付にて御ふみのやう、かたしけなく思  
しめし、まつ／＼その御地にて

總州様御機嫌よく被爲入、御めて度御悦ニ思召、こゝ  
御ほとこても御揃あそハし、御機嫌よく被爲入御事ニ

御座、

宗信公御譜中

正文在文庫

薩摩守様たん／＼御道中あそハし、御機嫌よく何の御さ

ハリもあそハし、御道中あそハし御事、御めて度

いかほとか御悦ニおほしめし、うちつゝき天氣あしく、

御かてましあそハし御事ニ御座、扱は正月廿五日ニ

ハ

御本丸へ菊姫様御同道にて

姫君様被爲入、御にき／＼しく御いわるあそハし、御

悦ニ思しめし、

大守様 薩摩守様も御はいりやう物あそハし、菊姫

様も御はいりやう物あそハし御事、御ふいてう仰被

進りよしにて、御こまやかに仰被進、かす／＼御めて度

御悦ニ思しめし、此よし宜御申上成へく、めてたく

かしく、

宋カキ 延享二年

五月三日

あ

ひし嶋

津

人さま

萩原

嶋

權左衛門さま

岡田

御返事

藤え

宗信公御譜中

正文在文庫

御札令披閱り、道中無吳儀御旅行之由珍重存り、將又於領内以使申達り謝禮之趣、御念入事り、我等無恙在之り、恐く謹言、

〔延享二年〕五月七日

尾張中納言 宗勝判

薩摩少將殿

御報

2124

吉貴公御譜中

正文在文庫

返く

薩州様御機嫌よく御道中あそハし御事、をなし御事  
ニ御めてたく御悦あそハしり、おし付その御地へい  
らせられ、御にきくしき御左右被爲聞りハんと、  
御めてたく御まちあそハしり、菊姫様も御めてたさ  
よろしく仰上られ度おほしめしり、かしく、

御生身たまの御祝義、御めてたさおなし御事にいわる入  
らせられり、まつく

總州様御機嫌よく被爲入、御にきくしく御いわるあそ  
ハしりハんと、かすく御めてたくおほしめしり、こ、  
御ほとこても御揃あそハし御機嫌よく、御にきくしく

御いわるあそハしり、扱は此御もく録のことく、御生身  
玉の御しうき御いわるあそハしりて進しられり御事ニ御  
さり、誠に幾久しく萬く年もあいかハらす御めてたさ  
仰被進りやうにといわる入らせられり、此よしよろしく  
御申上被成へくり、めてたくかしく、

朱カキ 延享二年 五月十七日

カ

ひし嶋

荻原

嶋津

岡田

權左衛門さま

人々

藤え

2125

繼豊公御譜中

去冬、薩州七島之平島船主長兵衛在薩府、渡船於琉球  
國、然琉球人上運天親雲上・伊良皆親雲上亦在薩府、  
欲歸國、從者・跟伴等總十九人駕渠船焉、及放洋不  
意遭暴風、迷惑失針路、飄蕩數月而今歲延享二年五  
月六日漂到奧州牡鹿郡寄磯濱、領主聞之稟執政、琉  
球人十九人自輿取陸護送江府、同年六月二十九日到  
吾芝邸、故以使番種子島左衛門時以新番富山傳五  
左衛門通教護送之回國、同年七月十九日發江府  
取陸、同年八月二日到大坂、駕船、著薩州、同年九

月朔日入三鷹府琉球館一矣、本船者加三修理一、自奥直歸帆也、

2126

全上

扣正文在家老座

薩州より琉球に致渡海外私領平嶋之船頭水主人數廿四人・琉球人十九人乗組逢難風、今月六日奥州牡鹿郡遠嶋之内寄磯濱と申所に漂着仕外由、松平陸奥守より注進申來承之、委細之儀者相知不申外得共、右之段申上外、以上、

五月廿二日

(島津維豐) 松平大隅守

(米) 御附札ニ而

右之琉球人松平陸奥守より其方江可送届哉之旨伺外付、可爲其通由相達外間、相談可被請取候、尤水主共者船繕出來次第歸帆可申付旨相達外

2127

(米) 一御伺書壹通

但薩州平嶋船頭水主貳拾四人・琉球人十九人乗合、奥州牡鹿郡遠嶋之内寄磯濱と申所に致漂着外付

2129

(米) 一覺

五月廿四日

野村大右衛門

酒井雅樂頭様 御取次 川田吉藏

右に參上仕外、琉球人乗組外薩州船奥州に流着仕外付、先達の御届申上置外處、先刻家來之者被召呼、右御届

2128

(米) 一覺

五月廿二日

野村大右衛門

酒井雅樂頭様 御用人 大塚又内

右より御達被成儀御座外間、私共間壹人今日中可罷出旨、御用人中より切紙到來仕、私罷出外之處、先達の差出被置外琉人乗組之平嶋之船、奥州に流着之御届書ニ、御附札ニ右御用人を以被成御渡外間、差上申外、以上、

御用番

酒井雅樂頭様

御取次

岩下新藏

書ニ御附札を以被仰渡趣、御承知被遊ハ段御取次ハ相達ハ處、御答之儀ニハ間、追テ可申上由承知仕ハ、私相勤ハ首尾申上ハ、以上、

五月廿四日

野村大右衛門

2130 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、

公方様 右大將様 大納言様益御機嫌能被成御座、今度

於紅葉山

御宮八講御執行相濟ハ段被承之、目出度被存由得其意ハ、

紙面之趣各申談及 上聞候、恐ク謹言、

朱力キ延享二年

五月廿五日

酒井雅樂頭

忠知判

松平上總入道

2131 全上

御札令披見ハ、

公方様 右大將様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦

旨尤ハ、將亦今度八講御執行相濟ハ爲御祝儀、三月廿一

日御能之節、同氏薩摩守儀初テ見物被仰付、御料理被下

之、難有由得其意ハ、紙面之趣各一覽之事ハ、恐ク謹言、

朱力キ延享二年 五月廿七日 酒井雅樂頭 忠知判

松平上總入道

2132 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、

公方様 右大將様 大納言様益御機嫌能被成御座、今度

於紅葉山

御宮八講御執行相濟ハ段被承之、目出度被存由得其意ハ、

紙面之趣及言上ハ、恐ク謹言、

朱力キ延享二年

五月廿八日

松平能登守

乘賢判

松平上總入道

2133 全上

御札令披見ハ、

公方様 右大將様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦

旨尤ハ、將亦今度八講御執行相濟ハ爲御祝儀、三月廿一

日御能之節、同氏薩摩守儀初テ見物被 仰付、御料理被

下、難有由得其意外、紙面趣令承知、恐く謹言、

宋カキ  
延享二年 五月廿八日 松平能登守 乘賢判

松平上總入道

2134 吉貴公御譜中

正文在文庫

なをく何も宜御申あけ成へくり、めてたくかし  
く、

盆の御祝儀御めてたさ、まつく

總州様御機嫌よく入らせられ、御祝儀御にきく敷御い  
わるあそハし半と、かすく御めてたく覺しめしり、  
此御地にても

太守様

姫君様 御子様かたにも御機嫌よく御にきく敷御いわ  
るあそはしり、此段よろしく御申上被成へくり、誠に幾  
久しく萬く年あひかハらす盆の御祝儀仰しんしられり  
半と、いわる入らせられ御事ニ御さり、めてたくかし  
く、

宋カキ  
延享二年

右

比志嶋 隼 人さま 荻原  
嶋津 權左衛門さま 岡田  
人々 藤え

2135 吉貴公御譜中

延享二年乙丑四月十六日

大樹吉宗公使酒井雅樂頭忠知來芝邸上、賜于薩摩守  
宗信初歸國告、拜戴紗綾二十卷、

右大將家重公亦以忠知賜縮緬十卷矣、同月十八日

登營奉禮謝之、則

吉宗公下懇篤尊言、且賜龍蹄一匹、同月二十日宗  
信發江都、赴于薩府也、於茲吉貴遙上書奉申謝  
之、因執政見投奉書、

2136 正文在文庫

御札令披見、

公方様 右大將様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦  
旨尤、將又今度同氏薩摩守儀、大隅守國許に初御暇、  
巻物頂戴之、其上御馬被下、從

右大將様及拜領物有之、重疊難有由得其意外、紙面之趣

各一覽之事外、恐く謹言、

朱力キ  
延享二年 六月十八日

本多中務大輔  
忠良判

松平上總入道

2137 全上

御札令披見外、

公方様 右大將様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦

旨尤外、將亦今度同氏薩摩守儀、大隅守國許に初め御暇、

卷物頂戴之、其上被下御馬、從

右大將様及拜領物有之、重疊難有由得其意外、紙面之趣

令承知外、恐く謹言、

朱力キ  
延享二年 六月十八日

松平能登守  
乘賢判

松平上總入道

2138 全御譜中

正文在文庫

なをく御表よりも御申上被成りへ共、なを御申上

被成りよし、何もよろしく申あけまいらせり、めて

たくかしく、

五月十八日付にて御文下され外、

公方様

右大將様 大納言様ますく御機嫌よく被成られ、御目

出度思召被成りよし、扱ハ今度 上使にて御同姓薩摩守

殿御事、初め大隅守殿御國もとへの御暇 仰出され、御

卷物拜領被成、そのうへ

御前にて御懇の

上意、殊に御馬拜領被成

右大將様よりも御卷物拜領被成、御手前様にも有難思召

被成りよしにて、御禮御申上被成り御文のやう、何もよ

ろしく申上まいらせり、めてたくかしく、

朱力キ  
延享二年

松平

上總入道様

御返事

豊をか

梅その

人、御中

浦尾

たかせ

右同文にて右大將様へも御札御申上云々異同アルノミ、名前モ宛書モ替らず故  
略ス

2139

吉貴公御譜中  
正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、四月廿日東叡山 御靈前

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上

聞外、恐く謹言、

朱力平

延享二年 六月廿二日

本多中務大輔

忠良判

松平上總入道

2140

継豊公御譜中

正文在文庫

端午之 御内書可相渡外間、明日五半時 御城の家來可  
被差出外、以上、

朱

延享二年 六月廿四日

松平左近將監

松平大隅守殿

2141

全上

今朝琉球布一箱・砂糖漬天門冬一器・赤貝塩辛一器・琉  
球泡盛酒二壺被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐  
く謹言、

朱

延享二年 六月廿六日

忠良判

2142

松平大隅守殿

忠良

朱  
在右裏  
本多中務大輔

全上

今朝琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・赤貝塩辛一器・琉  
球泡盛酒二壺被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐  
く謹言、

朱

延享二年 六月廿六日

乘賢判

松平大隅守殿

乘賢

朱  
在右裏

松平能登守

2143

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、就酷暑之節

公方様 右大將様 大納言様御機嫌被相同之外、益御勇  
健御儀外間可御心易外、隨御輕節一箱被獻之外、各申談  
遂披露外處一段之御仕合外、恐く謹言、

朱力平

延享二年 六月廿六日

本多中務大輔

忠良判

松平上總入道

2144 御札令披見<sub>レ</sub>、就酷暑之節

公方様 右大將様 大納言様御機嫌被相伺之<sub>レ</sub>、益御安

全御事<sub>レ</sub>間可御心易<sub>レ</sub>、隨<sub>レ</sub>干鱸殘魚一箱被獻之<sub>レ</sub>、遂披露

<sub>レ</sub>處一段之御仕合<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

朱カキ 延享二年

六月廿六日

松平能登守

乘賢判

松平上總入道

2145 宗信公御譜中

正文在文庫

御狀令披見<sub>レ</sub>、就酷暑之節

公方様 右大將様 大納言様御機嫌以使者被相伺之<sub>レ</sub>、

益御安全御儀<sub>レ</sub>間可御心易<sub>レ</sub>、隨<sub>レ</sub>干鱸殘魚一箱被獻之

<sub>レ</sub>、各申談遂披露<sub>レ</sub>處一段之御仕合候、恐<sub>レ</sub>謹言、

朱 「延享二年」

六月廿六日

本多中務大輔

忠良判

松平薩摩守殿

2146 全上

御狀令披見<sub>レ</sub>、就酷暑之節

公方様 右大將様 大納言様御機嫌以使者被相伺之<sub>レ</sub>、

益御安全御儀<sub>レ</sub>間可御心易<sub>レ</sub>、隨<sub>レ</sub>干鱸殘魚一箱被獻之

<sub>レ</sub>、遂披露<sub>レ</sub>處一段之御仕合<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

朱 「延享二年」

六月廿六日

松平能登守

乘賢判

松平薩摩守殿

2147 吉貴公御譜中

正文在文庫

なをく御表よりも御あげ被成<sub>レ</sub>りへとも、よろしく

なをまた申上まいらせ<sub>レ</sub>り、めてたくかしく、

五月廿三日付にて御文下され<sub>レ</sub>り、

公方様

右大將様 大納言様ますく御安全に被成<sub>レ</sub>られ御事、御

目出度思召被成<sub>レ</sub>りよし、土用中なをもて

右大將様御機嫌御伺被成<sub>レ</sub>り御文のやう、何もよろしく申

あげまいらせ<sub>レ</sub>り、めてたくかしく、

朱カキ

延享二年

豊をか

あ

全上

松平

上總入道様

御返事

梅その

浦尾

人々御中

たかせ

なをく何もよろしく申あげまいらせり、かしく、

五月廿七日付こゝ御ふみ下されり、

公方様

右大將様 大納言様益御機嫌よく御座なされ、御めてた

く覺しめしり由、扱は御同姓薩摩守殿、此度御暇被遣、

發足被成りにつき、

公方様御召の御羽織

竹姫君様へしんしられり、たんく御懇の上意も御座

り御事にて、薩摩守殿御拜領被成り御事、冥加のいたり、

御てまへ様も有かたくおほしめしり由、右之御禮御申

上なされり御ふみのとをり、よろしく申あげまいらせり、

めてたくかしく、

朱力キ  
延享二年

6

豊岡

梅園

松たいら

上總入道様

御返事

浦尾

高瀬

吉貴公御諸中

正文在文庫

なをくこゝ御ほとこても御そろひ被成御機けんよ

く入らせられり、

菊姫様にもおなし御事こよろしく被仰上たく覺しめ

しり、かしく、

時分からことのほか御あつさに御さりへとも

總州様御機嫌好被爲入、御さわりもあらせられすりや、

さかせられたくおほしめしり、さやうこ御さりへは、來

ル八月五日

(吉貴堂)  
靈龍院様御ほとなふ御七回忌になりまいらせられり、御

年月のたゝせられり御事ハ御間もあらせられすり御事、

總州様何かと〱思し召出まいらせられり御事、こゝ御

程にも

太守様

姫君様過させられり御事のみおほしめし出まいらせられ

り御事こ御さり、いよ〱御機けん御障もあらせられ

すひ哉、きかせられたく覺しめしひ、それニ付この御目録の通、御なくさみこあそはしひ様としんしられひ、此よしよろしく御ひろう御申あけへくり、かしく、

朱カキ  
延享二年

ひち嶋  
隼 人さま  
荻原  
しま津 岡田  
權左衛門さま 人々 藤え

2150 継豊公御譜中

正文在文庫

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之候、遂披露ひ處一段之御仕合ひ、恐く謹言、

朱  
「延享二年」七月六日 乘邑判

松平大隅守殿  
朱  
「在右裏」  
松平左近將監 乘邑

2151 全上

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之ひ、遂披露ひ處一段

之御仕合ひ、恐く謹言、

朱  
「延享二年」七月六日 乘賢判

2152 宗信公御譜中

正文在文庫

御狀令披見ひ、

公方様益御機嫌能被成御座、去月九日東叡山  
淨圓院様御位牌所 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤ひ、紙  
面之趣各申談及 上聞候、恐く謹言、

朱  
「延享二年」七月廿五日 松平左近將監 乘邑判

2153 吉貴公御譜中

正文在文庫

返く菊姫様ニもをなし御事ニ御祝義仰上られひ、  
よろしく御申上成へくり、なをめてたくかしく、

重陽の御祝義御めてたさ、をなし御事にいわるいらせられ、まつくその御地にて

總州様御機嫌よく被爲入、其ほか様方も御機嫌よく御にきくしく御いわるあそハしハんと、かすく御めて度御ほしめし、

薩摩守様も御機嫌よく、七月ニハ御するく御着あそハし、一入御にきくしく御いわるあそハし御事、御めてたくおほしめし、こ御ほとこても

大守様御はしめさせられ、御機嫌よく御にきくしく御いわるあそハし、扱は此御もく録の通、重陽の御しう義御いわるあそハし進しられ、誠ニ幾久しくとの御事ニ御さ、此よしよろしく御申上成へく、めてたくかしく、

<sup>朱力キ</sup>延享二年 七月廿七日

ひち嶋

嶋津

隼

権左衛門さま

人、

人さま

萩原

岡田

藤え

繼豊公御譜中

同年七月二十八日以ニ 上使與津帶刀、<sup>(忠通)</sup>賜御鷹所、攫之

雲雀於芝邸、有病故、島津但馬守忠就代ニ繼豊、到ニ執政之各第一禮ニ謝之一也、

繼豊公御譜中

正文在文庫

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之外、遂披露外處一段之御仕合、恐く謹言、

<sup>(朱)</sup>「延享二年」 八月四日

忠知判

松平大隅守殿

<sup>(朱)</sup>「在右裏」

酒井雅樂頭

忠知

全上

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之外、遂披露外處一段之御仕合、恐く謹言、

<sup>(朱)</sup>「延享二年」 八月四日

乘賢判

松平大隅守殿

<sup>(朱)</sup>「在右裏」

松平能登守

乘賢

2157 宗信公御譜中

正文在文庫

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被獻之外、遂披露<sup>レ</sup>處一段之御仕合<sup>レ</sup>、恐<sup>レ</sup>謹言、

〔延享二年〕八月四日

酒井雅樂頭 忠知判

本多中務大輔 忠良判

松平左近將監 乘呂判

松平薩摩守殿

2158 全上

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被獻之外、遂披露<sup>レ</sup>處一段之御仕合<sup>レ</sup>、恐<sup>レ</sup>謹言、

〔延享二年〕八月四日

松平能登守 乘賢判

松平薩摩守殿

2159 宗信公御譜中

正文在文庫

御札令披閱<sup>レ</sup>、御手前路次無恙、去月十六日御同氏大隅

守殿國元<sup>レ</sup>到着之由珍重<sup>レ</sup>、依之入御念<sup>レ</sup>段欣然之至存<sup>レ</sup>外、我等無吳在之事<sup>レ</sup>、恐<sup>レ</sup>謹言、

〔延享二年〕八月十五日 尾張中納言 宗勝判

松平薩摩守殿 御報

2160 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見<sup>レ</sup>、

公方樣益御機嫌能被成御座、六月九日 東叡山

淨圓院樣御位牌所 御參詣之儀被承之、恐悅旨尤<sup>レ</sup>、紙

面趣各申談及 上聞<sup>レ</sup>、恐<sup>レ</sup>謹言、

〔延享二年〕八月廿一日 酒井雅樂頭 忠知判

松平上總入道

2161 宗信公御譜中

同年九月朔日

吉宗公讓<sup>ニ</sup>與政務及將軍職<sup>於</sup>

右大將家重公<sup>ニ</sup>、因同月二十五日

吉宗公隱栖移<sup>ニ</sup>徙 西城<sup>ニ</sup>、宗信在<sup>レ</sup>國而豫聞<sup>レ</sup>之、是故應<sup>レ</sup>

2163

正文在琉球國國司

全上

爲年始之嘉儀被差渡使簡、殊目錄之通贈給之、入念外段令祝着外、猶期後喜之時外、恐惶不宣、

2162

繼豐公御譜中

將軍吉宗公將讓政務於

右大將家重公而隱居上、以故延享二年乙丑九月朔日徵侯伯論焉、時繼豐養病故、水野肥前守忠見代繼豐登營、列繼豐官位之席、井伊掃部頭直定・松平讚岐守頼恭共聞詰、酒井雅樂頭忠知・松平左近將監乘邑・本多中務大輔忠良・松平能登守乘賢共執政出席矣、乘邑傳嚴命於侯伯、忠見退去、而傳繼豐、

2166

全上

爲重陽之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐、謹言、

2165

全上

爲重陽之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲本多中務大輔可述外也、

九月七日



薩摩

中將殿

2164

全上

芳翰令披見外、去秋月桂院殿卒去付（吉原傳書、おすま）、被差渡與古田親方被示聞之段入念儀存外、恐惶不宣、

〔延享二年〕

九月二日 中將繼豐御判

謹上 中山王

〔延享二年〕

九月二日 中將繼豐御判

謹上 中山王

〔延享二年〕 九月七日

酒井雅樂頭 忠知判

松平大隅守殿

2167 宗信公御譜中

正文在文庫

御狀令披見外、

公方様 右大將様 大納言様御機嫌被相同之外、益御勇健御儀外間可御心易外、隨而干鯛一箱被獻之候、各申談遂披露外處一段御仕合外、恐々謹言、

〔延享二年〕 九月十三日

本多中務大輔 忠良判

松平薩摩守殿

2168 全上

御狀令披見外、

公方様 右大將様 大納言様御機嫌被相同之外、益御安全御事外間可御心易外、隨而干鯛一箱被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔延享二年〕 九月十三日

松平能登守 乘賢判

松平薩摩守殿

2169 継豊公御譜中

正文在文庫

〔宗信〕 薩摩守國許到着御禮之使者嶋津八郎左衛門、明十五日五時

御城に可差出外、且亦自分之御禮及可申上外條、可存其趣外、以上、

〔延享二年〕 九月十四日

本 中務

松平大隅守殿

留守居

2170 継豊公御譜中

正文在島津因幡忠郷

一 和泉家系圖壹卷不洗包 箱入

一 右同古文書五通壹卷

右御方事、就和泉家跡相續、此節右系圖於御記錄所編集被仰付、古文書壹卷相添被附與之早、全可有箭藏之狀如件、

延享二年九月十五日

鎌田太郎右衛門 政直判

北條 織 部 時守判

2171

全上

正文在琉球國國司

芳翰令披見外、今度薩摩守初の入國之爲祝詞、被差渡具志川按司、殊太刀・馬代并目錄之表被相贈之、入念儀欣然之至外、恐惶不宣、

〔延享二年〕

九月十五日 中將繼豐御判

謹上 中山王

2172

宗信公御譜中

正文在文庫

御狀令披見外、

公方様 右大將様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦

鳴津三次郎殿

〔久壽〕

顯 娃 内 膳 久周判

樺 山 主 計 久初判

鳴 津 左 衛 門 久 豪 判

鳴 津 左 衛 門 久 甫 判

2173

全上

御狀令披見外、

公方様 右大將様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然者七月十五日御曲輪之内出火之處、早速鎮外段被承之、玆重由得其意外、紙面趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

〔延享二年〕

九月十六日

松平薩摩守殿

本多中務大輔

忠良判

2174

全上

御狀令披見外、

公方様 右大將様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦

旨尤外、將又今度初の御暇、巻物頂戴之、其上御馬被下、從 右大將様及拜領物有之、重疊難有由得其意外、國許到着付の爲御禮、以鳴津八郎左衛門目錄之通被獻之外、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

〔延享二年〕

九月十五日

松平薩摩守殿

松平右京大夫

輝貞判

旨尤<sub>レ</sub>、然者七月十五日之夜御曲輪之内出火之處、早速  
鎮<sub>レ</sub>段被承之、玆重由得其意<sub>レ</sub>、紙面趣及言上<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>  
謹言、

(奉)  
「延享二年」  
九月十六日  
松平能登守  
乘賢判

松平薩摩守殿

2175 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見<sub>レ</sub>、

公方様 右大將様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悅  
旨尤<sub>レ</sub>、然者七月十五日御曲輪之内出火之處、早速鎮<sub>レ</sub>  
段被承之、玆重由得其意<sub>レ</sub>、紙面趣各申談及 上聞候、  
恐<sub>レ</sub>謹言、

<sup>朱力半</sup>  
延享二年  
九月十六日  
本多中務大輔  
忠良判

松平上總入道

2176 全上

御札令披見<sub>レ</sub>、

公方様 右大將様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悅

旨尤<sub>レ</sub>、然者七月十五日之夜御曲輪之内出火之處、早速  
鎮<sub>レ</sub>段被承之、玆重由得其意<sub>レ</sub>、紙面趣及言上<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>  
謹言、

<sup>朱力半</sup>  
延享二年  
九月十六日  
松平能登守  
乘賢判

松平上總入道

2177 繼豊公御譜中

正文在文庫

以上

薩摩國鹿兒嶋城下東口番所通良方外北東之間、土居四ヶ  
所崩<sub>レ</sub>付<sub>レ</sub>、築直之事繪圖朱引之通得其意<sub>レ</sub>、願之通如  
元可有修補<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

延享二丑九月十八日  
本多中務大輔  
忠良判

松平左近將監  
乘邑判

酒井雅樂頭  
忠知判

松平大隅守殿

2178 全上

薩摩守國許到着御禮之使者嶋津八郎左衛門、明日四時御城に可差出外、以上、

〔延享二年〕九月十八日 本 中務

松平大隅守殿 留守居

2179 全上

薩摩守國元到着御禮之使者、明日九時我等宅に可差出外、以上、

〔延享二年〕九月十九日 松 能登

松平大隅守殿 留守居

2180 宗信公御譜中

正文在文庫

御狀令披見外、

公方様 右大將様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦

旨尤外、將亦今度初の御暇、巻物頂戴之、其上御馬被下、

從 右大將様及拜領物有之、重疊難有由得其意外、國許

到着付の爲御禮、以嶋津八郎左衛門論子五巻并御樽有被獻之外、遂披露外處

御前に被召出之、入念外段御喜色之御事外、恐々謹言、

〔延享二年〕九月十九日 本 中務大輔 忠良判

松平左近將監 乘邑判

酒井雅樂頭 忠知判

松平薩摩守殿

2181 宗信公御譜中

正文在文庫

御狀令披見外、

公方様 右大將様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦

旨尤外、將亦今度初の御暇、巻物頂戴、其上御馬被下之、

從

右大將様及拜領物有之、重疊難有由得其意外、國許到着

付の爲御禮、以使者御樽有被獻之外、遂披露外處、

御前に被召出、入念外段御喜色之御事外、恐々謹言、

〔延享二年〕九月十九日 松平能登守 乘賢判

松平薩摩守殿

2182 吉貴公御譜中

同年九月朔日應<sub>レ</sub>教侯伯各登<sub>レ</sub>城、老中及松平讚岐守賴

恭・井伊掃部頭直定列座、松平左近將監乘邑演<sub>レ</sub>說

大樹吉宗公命<sub>レ</sub>曰、

右大將家重公御年爲<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>長故、讓<sub>三</sub>政務<sub>二</sub>而將<sub>レ</sub>老<sub>二</sub>於<sub>レ</sub>西

城、因告<sub>二</sub>京師<sub>一</sub>稟<sub>二</sub>將軍<sub>一</sub>宣下<sub>一</sub>、即宜<sub>レ</sub>奉<sub>二</sub>事

家重公<sub>一</sub>也、同月二十五日

家重公移<sub>二</sub>徙于<sub>一</sub>本城<sub>一</sub>、

吉宗公退<sub>二</sub>老于<sub>一</sub>西城<sub>一</sub>、稱<sub>二</sub>

大御所<sub>一</sub>矣、吉貴奉<sub>レ</sub>賀<sub>レ</sub>之、以<sub>二</sub>小松中太兵衛政<sub>一</sub>(林)<sub>二</sub>爲<sub>レ</sub>番頭役

爲<sub>二</sub>使節<sub>一</sub>、獻<sub>二</sub>鯛一箱于

家重公<sub>一</sub>、且以<sub>二</sub>伊地知千左衛門季伴<sub>一</sub>(御用人假爲番頭役)爲<sub>二</sub>使節<sub>一</sub>、獻<sub>二</sub>

鯛一箱于

大御所<sub>一</sub>也、

2183 正文在文庫

今度 御本丸御移徙爲御祝儀、以使者目錄之通被獻之外、

遂披露<sub>レ</sub>外處一段之御仕合<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

朱力<sub>レ</sub>年 延享二年 九月廿七日

松平能登守 乘賢判

本多中務大輔 忠良判

酒井雅樂頭 忠知判

松平上總入道

2184 全上

今度 西丸御移徙爲御祝儀、以使者目錄之通被獻之外、

遂披露<sub>レ</sub>外處一段之御仕合<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

朱力<sub>レ</sub>年 延享二年 九月廿七日

本多中務大輔 忠良判

松平上總入道

2185 宗信公御譜中

正文在文庫

今度 御本丸御移徙爲御祝儀、以使者目錄之通被獻之外、

遂披露<sub>レ</sub>外處一段之御仕合<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

朱力<sub>レ</sub>年 延享二年 九月廿七日

松平能登守 乘賢判

本多中務大輔 忠良判

2186

松平薩摩守殿

酒井雅樂頭  
忠知判

全上

今度 西丸御移徒爲御祝儀、以使者目錄之通被獻之、  
遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔延享二年〕 九月廿七日

本多中務大輔  
忠良判

松平薩摩守殿

2187

繼豊公御譜中

同年九月二十五日

吉宗公從<sup>ニ</sup> 武城本丸<sup>ニ</sup>移<sup>ニ</sup>徙於 西丸<sup>一</sup>、同日

家重公從<sup>ニ</sup> 西丸<sup>ニ</sup>移<sup>ニ</sup>徙於 本丸<sup>一</sup>焉、翌<sup>ニ</sup>二十六日繼豊以<sup>ニ</sup>

使者家老島津右平太久郷<sup>ニ</sup>獻<sup>下</sup>鹽鶴一箱・鯛一箱・昆布<sup>一</sup>

箱・御樽<sup>ニ</sup>荷於

家重公於 本丸<sup>上</sup>、以<sup>ニ</sup>使者番頭三崎平太久迢<sup>ニ</sup>獻<sup>下</sup>鹽鶴<sup>一</sup>

箱・鯛一箱・御樽一荷於

吉宗公於 西丸<sup>上</sup>、而奉<sup>レ</sup>述<sup>ニ</sup>賀儀<sup>一</sup>、

218

全上

扣正文存家老座

御代替御禮之覺

初日 正月朔日出仕之分

二日め 同二日出仕之分

三日め 同三日出仕之分

右之通可被相心得外、御太刀目錄可有獻上外、日限之

儀者追可相達外、

一前々眞御太刀獻上之面々は、此度者

上様は作り御太刀・御馬裸背一疋可有獻上旨相達置候、

大御所様 大納言様は若作り御太刀・御馬代可有獻上

外、

一右之外之面々者、先例之通作り御太刀・御馬可有獻上

外、

大御所様 大納言様は若御同様可有獻上候、

一初日二日御禮者、直垂・狩衣・大紋・布衣・素袍可有

着用外、

一三日め之御禮者長袴着用可有外、

一大御所様 大納言様は獻上之御太刀目錄者、以使者

西丸御納戸は可被相納候、

一在國在所之面々者名代之使者、元日御禮之衆者初日、  
二日御禮之衆者二日め、年始之通御太刀可有獻上、尤  
使者素袍可着外、

但在府之分も病氣ニ出仕難成面々者、是又初日二  
日め之内、以使者御太刀・馬代可被差上候、

一萬石以上之隠居・部屋住、在國在所又者在府之分も、  
病氣幼少之面々者、以使者御太刀・馬代可被差上外、

一萬石以下之諸太夫并三千石以上在所又者御役所ニ有之  
面々、且又病氣幼少之分者、三日め以使者御太刀可被  
差上外、

一御禮申上外面々、同日爲御祝儀 西丸ニ出仕、夫より  
老中・右京大夫・隠岐守・若年寄中ニ可被相廻り、尤  
不込合様可被心得外、且又病氣幼少隠居之面々者、月  
番老中隠岐守へ使者可被差越外、  
一在國在所之面々者使札可差越外、

右之通可被相觸外、以上、  
(卷)  
「延享二年」 九月

2189

全御譜中

將軍家嗣位之後當家始參觀之年者、進獻鞍馬二匹ニ爲、

是當家之先躰也、繼豐頃年雖養病ニ留於江府、

家重公嗣位之後、來歲正當ニ繼豐始參觀期、以故預今茲  
延享二年乙丑九月二十七日窺ニ於執政、則有可獻鞍  
馬一匹ニ之令上矣、然獻二匹ニ是先躰也、乃同年十月  
再訴ニ於執政、而受可獻鞍馬二匹ニ之令上、詳開ニ于  
後、

2190

全上

正文在文庫

御代替ニ付御祝儀申上外節者、作御太刀一腰・裸背御

馬一疋獻上可仕旨、被仰渡趣承知仕外、前々御代替之

節者、眞御太刀・御馬代黃金獻上仕、翌年參府仕外節、  
來年參勤之時節、數置御馬一疋可有獻上候

鞍置御馬二疋獻上仕來候、此節之儀者先達而被仰渡候通、  
作御太刀・裸背御馬一疋獻上可仕外、病中滯府仕外得共、

來寅年私參府年御座外付、參府之時節先規之通鞍置御馬  
二疋獻上仕度奉存候、此段申上外、以上、

(卷)  
「延享二年」 九月廿七日 松平大隅守

2191

繼豐公御譜中

正文在文庫

全御譜中

家重公嗣位、以故從<sub>二</sub>先蹤<sub>一</sub>繼豐及嗣適薩摩守宗信欲<sub>レ</sub>捧<sub>二</sub>誓書<sub>一</sub>、然繼豐頃年養<sub>レ</sub>病、宗信亦在<sub>二</sub>薩州<sub>一</sub>俱不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>捧<sub>二</sub>誓書<sub>一</sub>、故今歲九月廿七日請<sub>二</sub>制於執政本多中務大輔忠良<sub>一</sub>、

松平大隅守殿

忠良

〔在右裏〕  
本多中務大輔

全上

松平大隅守殿

忠良

〔在右裏〕  
本多中務大輔

今度 西丸御移徙爲御祝儀、以使者目錄之通被獻之<sub>レ</sub>、遂披露<sub>レ</sub>處一段之御仕合<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

〔朱〕  
「延享二年」  
九月廿七日

忠良判

全上

扣正文在右筆所

御代替<sub>二</sub>付私儀早速誓詞願可申上候得共、病氣<sub>二</sub>の罷在<sub>一</sub>外條、快氣仕<sub>レ</sub>節誓詞願可申上哉、將又同氏薩摩守儀<sub>二</sub>當分私國許に罷在<sub>一</sub>外間、來年參府仕候節誓詞仕差上可申<sub>レ</sub>外、此段何分<sub>二</sub>及御差圖被成可被下候、以上、

〔朱〕  
「延享二年」  
九月廿七日

〔朱〕  
「大目付に

御代替誓詞相願<sub>レ</sub>萬石以上及交替寄合之内、長病之分快氣次第相同<sub>レ</sub>様可被達<sub>レ</sub>、且又右之内十六歳より以下之分誓詞<sub>二</sub>ハ不及<sub>一</sub>外、是又可被達<sub>レ</sub>、

二月二日」

〔朱〕  
一堀田相摸守殿御渡<sub>レ</sub>御書付壹通相達<sub>レ</sub>外、被得其意無<sub>レ</sub>遲

滯順達、留<sub>レ</sub>水野對馬守方<sub>二</sub>に可被相返<sub>一</sub>外、以上、

二月三日 大目付

(23)

一御代替ニ付御誓詞御願、去年九月御用番本多中務大輔様ニ被仰出外處、追る御挨拶可被成由御用人石原彌左衛門を以被仰聞置候處、此節大目付御廻狀を以、長病之分快氣次第可相伺外、十六歳以下老誓詞不及旨、被仰渡候、依之

太守様御誓詞老御廻狀之通御心得被成被置、薩州様ニ老御參勤之節御伺可被仰上哉、最前追る御挨拶可被成由被仰聞置候付、右之趣御用人彌左衛門ニ致内談外様、御留守居野村大右衛門ニ申聞、彌左衛門ニ致内談外處、御退出之節可申上旨申聞外、左外而以後左之通被仰渡候、

御代替ニ付誓詞之儀、病氣快氣之節可被相調旨、此間相達外、且又同氏薩摩守御代替誓詞之儀、先達る被相伺候、參府之節誓詞相調候様可被致外

2195 吉貴公御譜中

同年十月自朔日至二日、侯伯各登レ城、奉レ賀ニ御代替之儀、吉貴亦以三島津十太右衛門久命御用人假為番頭役爲ニ使者、

御太刀一腰・御馬代黄金一枚獻于

家重公、以三同品于

大御所上、川上彦九郎親英馬廻假為留守居役勤ニ使節一、又同品獻于

大納言家治公、川上親英爲ニ使一箱、御樽代三百

匹獻于

御部屋子時家治公實之御母公、一居ニ之丸稱之曰御部屋里村藤太夫景典伊番勤ニ使節一

也、且奉レ賀ニ

大御所之退老一、以三川上孫八久福勤爲ニ使者一、獻于三箱

一箱于

家重公、同品于

大御所、和田次右衛門助品普請奉行假為御頭役勤ニ使節一、又和田助

品爲ニ使一、同品獻于

家治公焉、

2196

繼豊公御譜中

正文在文庫

來寅年

御代替初而私參府年御座外付而、先規之通鞍置御馬二疋一疋一御付札

獻上可仕旨申上外處、鞍置御馬一疋獻上可仕旨被仰渡趣鞍置御馬二疋可有獻上候

承知仕外、右ニ付る老重而難申上儀御座外得共、例年參

全御譜中  
同年十月二日有下

全上  
正文在文庫

〔延享二年〕十月  
松平大隅守

府仕外節委 御本丸に裸背御馬二疋 西御丸に一疋献上  
仕來り付、來年献上仕外節鞍置御馬一疋献上仕外る者、  
家格相替申様ニ御座外間、何とそ家格不相替鞍置御馬二  
疋献上仕度儀御座外、夫共鞍置御馬一疋献上仕儀御座外  
者、何とそ裸背御馬一疋相添献上仕度外、此儀相同度存  
外得共、先達る御付紙ニ由爲被仰渡儀御座外條、御了簡  
被成可被下候、以上、

來寅年  
御代替初る私參府年御座外付る  
〔卷ニ御付札  
不及献上候〕  
大御所様 大納言様は鞍置御馬一疋宛献上仕度御座外、  
此段被成御差圖可被下候、以上、

〔延享二年〕十月  
松平大隅守

家重公嗣位之拜禮上、在府之諸侯咸登レ替焉、繼豐有レ  
病不能登、故此日以ニ使者家老島津大藏久純ニ獻下御太  
刀一腰・御馬深背御馬四疋、寸五分藥州立一匹於

家重公於 本丸上、以ニ使者番頭代宮之原甚五兵衛通與一  
獻下御太刀一腰・御馬一匹黃金十兩於

大御所吉宗公於 西丸上、以ニ同人一獻下同品於

大納言家治公於 西丸上、以ニ留守居代里村藤太夫景典一  
進下上干鯛一箱・昆布一箱・御樽代五百匹於 御部屋  
家治御寶篋、逆稱平心院殿

於 二丸上、而奉レ賀ニ 嗣位、

○同日遣下使者於酒井忠知・松平乘邑・本多忠良・松平乘  
賢共執、松平右京大夫輝貞御老中格之各亭上、各呈ニ太刀一腰・  
馬代金十兩一、以奉レ賀ニ 嗣位、

○同日奉レ賀ニ

吉宗公隙居、以ニ使者番頭代鎌田六郎太夫政方一獻下干  
鯛一箱・昆布一箱・御樽一荷於

家重公於 本丸上、以ニ使者番頭代二階堂林左衛門行  
通一獻下同品於

吉宗公於 西丸上、以ニ同人一獻下干鯛一箱・御樽代五百  
匹於

家治公於 西丸上、

全上

正文在文庫

御代替爲御禮、以使者御太刀一腰・御馬一疋被獻之外、遂披露<sub>レ</sub>處一段之御仕合<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

〔延享二年〕<sup>(朱)</sup> 十月二日 忠知判

松平大隅守殿

忠知

酒井雅樂頭

全上

御代替爲御祝儀、以使者御太刀・御馬代被獻之外、遂披露<sub>レ</sub>處一段之御仕合<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

〔延享二年〕<sup>(朱)</sup> 十月二日 忠直判

松平大隅守殿

忠直

西尾隱岐守

全上

御代替爲御祝儀、

大御所様江以使者御太刀・御馬代被獻之外、遂披露<sub>レ</sub>處一段之御仕合<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

〔延享二年〕<sup>(朱)</sup> 十月二日 忠知判

松平大隅守殿

忠知

酒井雅樂頭

吉貴公御譜中

正文在文庫

御代替爲御禮、以使者御太刀・御馬代被獻之外、遂披露<sub>レ</sub>處一段之御仕合<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

〔延享二年〕<sup>(朱)</sup> 十月二日

松平能登守

乘賢判

本多中務大輔

忠良判

酒井雅樂頭

忠知判

松平上總入道

全上

御代替爲御祝儀、以使者御太刀・御馬代被獻之外、遂披

露<sub>レ</sub>外處一段之御仕合<sub>レ</sub>外、恐<sub>レ</sub>謹言、

朱力キ  
延享二年 十月二日

西尾隱岐守  
忠直判

松平上總入道

2204

御代替爲御祝儀、

大御所様<sub>レ</sub>以使者御太刀・御馬代被獻<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>外、遂披露<sub>レ</sub>外處

一段之御仕合<sub>レ</sub>外、恐<sub>レ</sub>謹言、

朱力キ  
延享二年 十月二日

酒井雅樂頭  
忠知判

松平上總入道

2205

宗信公御譜中

延享二年十月二日基太村助大夫尚香登<sub>レ</sub>營、獻<sub>二</sub>御太刀

一腰・御馬代黃金十兩<sub>一</sub>勤<sub>二</sub>使价<sub>一</sub>、奉<sub>レ</sub>伸<sub>二</sub>

家重公御代替之賀儀、川上孫八久福亦登<sub>レ</sub>營、獻<sub>二</sub>錫<sub>一</sub>

箱<sub>一</sub>勤<sub>二</sub>

吉宗公隱栖之賀使、同日今井與平次兼能登<sub>二</sub>西城<sub>一</sub>勤<sub>二</sub>

使价<sub>一</sub>、獻<sub>二</sub>御太刀一腰・御馬代黃金十兩<sub>一</sub>于<sub>二</sub>

吉宗公<sub>一</sub>、御太刀一腰・御馬代黃金十兩<sub>一</sub>于<sub>二</sub>

家治公<sub>一</sub>、奉<sub>レ</sub>伸<sub>二</sub>御代替之賀儀<sub>一</sub>、且獻<sub>二</sub>干鯛一箱<sub>一</sub>于<sub>二</sub>

吉宗公<sub>一</sub>、同品<sub>一</sub>于<sub>二</sub>

家治公<sub>一</sub>、奉<sub>レ</sub>伸<sub>二</sub>

吉宗公隱栖之賀儀、執政各贈<sub>二</sub>奉書<sub>一</sub>、開<sub>二</sub>于左<sub>一</sub>、同日里

村藤太夫景典<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>干鯛一箱・御樽代金子三百

匹<sub>一</sub>、登<sub>二</sub>二之城<sub>一</sub>、獻<sub>二</sub>御部屋御方<sub>一</sub>、勤<sub>二</sub>御代替之賀

使<sub>一</sub>、

2206

全上

正文在文庫

御代替爲御禮、以使者御太刀・御馬代被獻<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>外、遂披露

外處一段之御仕合<sub>レ</sub>外、恐<sub>レ</sub>謹言、

悉  
「延享二年」十月二日  
松平能登守  
乘賢判

本多中務大輔  
忠良判

酒井雅樂頭  
忠知判

松平薩摩守殿

2207

全上

御代替爲御祝儀、以使者御太刀・御馬代被獻<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>外、遂披

露<sub>レ</sub>處一段之御仕合<sub>レ</sub>、恐<sub>ク</sub>謹言、

〔卷〕「延享二年」十月二日

西尾隠岐守

忠直判

松平薩摩守殿

2208 全上

御代替爲御祝儀、

大御所様<sub>ニ</sub>以使者御太刀・御馬代被獻<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>、遂披露<sub>レ</sub>處一段之御仕合<sub>レ</sub>、恐<sub>ク</sub>謹言、

〔卷〕「延享二年」十月二日

酒井雅樂頭

忠知判

松平薩摩守殿

2209 吉貴公御譜中

正文在文庫

なをく

薩州様<sub>ニ</sub>も御機けんよく入らせられ<sub>レ</sub>御事、御めてたく御悦<sub>ニ</sub>おほしめし<sub>レ</sub>、

菊姫様<sub>ニ</sub>も右の御ふいてうよろしく被仰上たきとの

御事<sub>ニ</sub>御さ<sub>レ</sub>、めてたくかしく、

御よろこひのためおほせ進しられ<sub>レ</sub>、時分柄したひこひえく敷御さ<sub>レ</sub>へ共、まつく

總州様御機嫌好被爲入、御めてたくおほしめし<sub>レ</sub>、このたひ

御本丸

西之御丸<sub>ニ</sub>の御移徙の御祝儀御するく<sub>レ</sub>と濟せられ<sub>レ</sub>こ

つき

姫君様へ 上使<sub>ニ</sub>の御拜領物

太守様 菊姫様へも御祝儀御はい領あそはし、御にき

く<sub>レ</sub>敷御祝あそはし<sub>レ</sub>、去ル二日<sub>ニ</sub>御代替の御祝儀

上様より 上使<sub>ニ</sub>の、

姫君様

太守様 菊姫様へ御拜領ものあそはし、

大御所様より 御隠居被遊<sub>レ</sub>御祝義御拜領ものあそは

し、御にきく<sub>レ</sub>敷御いわるあそはし<sub>レ</sub>、御めてたく幾ま

んく<sub>レ</sub>年もといわるおほしめし<sub>レ</sub>、右の御悦被仰進<sub>レ</sub>ま

く、此段よろしく御申上被成へく<sub>レ</sub>、めてたくかしく、

〔朱力キ〕延享二年 十月四日

ひち嶋

準

人さま

萩原

しま津

權左衛門さま

岡田

人、

藤原

2210

全上

御隠居之爲御祝儀、

上様 大御所様<sup>ニ</sup>以使者如目錄被獻之外、遂披露<sup>ハ</sup>處一

段之御仕合<sup>ハ</sup>、恐<sup>ク</sup>謹言、

<sup>朱力キ</sup>延享二年

十月五日

酒井雅樂頭

忠知判

松平上總入道

2211

御隠居之爲御祝儀、以使者如目錄被獻之外、遂披露候處

一段之御仕合<sup>ハ</sup>、恐<sup>ク</sup>謹言、

<sup>朱力キ</sup>延享二年

十月五日

西尾隠岐守

忠直判

松平上總入道

2212

継豊公御譜中  
正文在文庫

御隠居之爲御祝儀、

上様 大御所様<sup>ニ</sup>以使者如目錄被獻之外、遂披露<sup>ハ</sup>處一

段之御仕合<sup>ハ</sup>、恐<sup>ク</sup>謹言、

<sup>朱</sup>延享二年

十月五日

忠知判

2213

全上

松平大隅守殿

<sup>朱</sup>在右裏

酒井雅樂頭

忠知

御隠居之爲御祝儀、以使者如目錄被獻之外、遂披露<sup>ハ</sup>處

一段之御仕合<sup>ハ</sup>、恐<sup>ク</sup>謹言、

<sup>朱</sup>延享二年

十月五日

忠直判

松平大隅守殿

<sup>朱</sup>在右裏

西尾隠岐守

忠直

2214

宗信公御譜中  
正文在文庫

御隠居之爲御祝儀、以使者如目錄被獻之外、遂披露<sup>ハ</sup>處

一段之御仕合<sup>ハ</sup>、恐<sup>ク</sup>謹言、

<sup>朱</sup>延享二年

十月五日

西尾隠岐守

忠直判

松平薩摩守殿

2215

全上

御隣居之爲御祝儀、

上様 大御所様<sup>レ</sup>以使者如目錄被獻之<sup>レ</sup>、遂披露<sup>レ</sup>處一

段之御仕合<sup>レ</sup>、恐<sup>レ</sup>謹言、

<sup>(朱)</sup>「延享二年」十月五日

酒井雅樂頭

忠知判

松平薩摩守殿

2216

継豊公御譜中

正文在文庫

德川右衛門督殿御簾中安産付<sup>ル</sup>、爲御祝儀干鯛一箱被遂

<sup>(田友(依武))</sup>

披露<sup>レ</sup>處一段之御仕合<sup>レ</sup>、恐<sup>レ</sup>謹言、

<sup>(朱)</sup>「延享二年」十月七日

忠知判

松平大隅守殿

<sup>(朱)</sup>「在右裏」

酒井雅樂頭

忠知

2217

全上

德川右衛門督殿御簾中安産付<sup>ル</sup>、爲御祝儀

大御所様<sup>レ</sup>干鯛一箱被獻之<sup>レ</sup>、遂披露<sup>レ</sup>處一段之御仕合

<sup>レ</sup>、恐<sup>レ</sup>謹言、

<sup>(朱)</sup>「延享二年」十月七日

忠知判

松平大隅守殿

<sup>(朱)</sup>「在右裏」

酒井雅樂頭

忠知

2218

吉貴公御譜中

正文在文庫

德川右衛門督殿御簾中安産付<sup>ル</sup>、爲御祝儀干鯛一箱被獻

之<sup>レ</sup>、遂披露<sup>レ</sup>處一段之御仕合<sup>レ</sup>、恐<sup>レ</sup>謹言、

<sup>(朱)</sup>「延享二年」十月七日

酒井雅樂頭

忠知判

松平上總入道

2219

全上

德川右衛門督殿御簾中安産付<sup>ル</sup>、爲御祝儀

大御所様<sup>レ</sup>干鯛一箱被獻之<sup>レ</sup>、遂披露<sup>レ</sup>處一段之御仕合

<sup>レ</sup>、恐<sup>レ</sup>謹言、

<sup>(朱)</sup>「延享二年」十月七日

酒井雅樂頭

忠知判

松平上總入道

宗信公御譜中

正文在文庫

徳川右衛門督殿御簾中安産付ゝ、爲御祝儀干鯛一箱被獻

之候、遂披露<sub>レ</sub>處一段之御仕合<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

(朱)「延享二年」

十月七日

酒井雅樂頭

忠知判

松平薩摩守殿

全上

徳川右衛門督殿御簾中安産付ゝ、爲御祝儀

大御所様<sub>ニ</sub>干鯛一箱被獻<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>、遂披露<sub>レ</sub>處一段之御仕合

候、恐<sub>レ</sub>謹言、

(朱)「延享二年」

十月七日

酒井雅樂頭

忠知判

松平薩摩守殿

緒豊公御譜中

扣正文在家老座

私儀昨日領知之 御判物頂戴仕<sub>レ</sub>付<sub>レ</sub>、同氏上總入道於

國許承知仕<sub>レ</sub>上、御禮之儀如何相勤可申<sub>レ</sub>哉、御差圖被

成可被<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>、以上、

(朱)「延享二年」

十月十二日

緒豊公御譜中

正文在北郷權五郎

久

延享二丑

十月十八日



緒豊公墨印

緒豊公御譜中

同年十月十九日

吉宗公自賀<sub>ニ</sub>隱居<sub>一</sub>、教<sub>ニ</sub>上使若年寄加納遠江守久通<sub>一</sub>

到中<sub>ニ</sub>繼豊之芝邸<sub>上</sub>、賜<sub>ニ</sub>雄刀<sub>一</sub>延享長式尺參寸七分銘 一腰・箱有一種

於繼豊、雄刀<sub>半磨上無銘代金參拾枚</sub> 一腰、箱有一種於嗣適薩摩

守宗信<sub>上</sub>也、時繼豊有<sub>レ</sub>病、宗信在<sub>ニ</sub>薩國<sub>一</sub>、故島津但馬守

忠就代<sub>ニ</sub>繼豊父子<sub>一</sub>、迎<sub>ニ</sub>上使於芝邸<sub>一</sub>、請<sub>ニ</sub>大書院<sub>一</sub>、謹

承<sub>ニ</sub>上旨<sub>一</sub>、置<sub>ニ</sub>恩賞品物於上段<sub>一</sub>、忠就拜<sub>ニ</sub>戴<sub>ニ</sub>之<sub>一</sub>而傳<sub>ニ</sub>

之於繼豊<sub>一</sub>、則敬拜<sub>ニ</sub>戴<sub>ニ</sub>焉<sub>一</sub>、乃以<sub>ニ</sub>忠就<sub>ニ</sub>奉<sub>レ</sub>伸<sub>レ</sub>並<sub>レ</sub>賜父子<sub>一</sub>

懇篤之辱於<sub>ニ</sub>上使<sub>上</sub>也、而忠就代<sub>ニ</sub>繼豊<sub>一</sub>、登<sub>ニ</sub>兩丸<sub>一</sub>奉<sub>レ</sub>

謝<sub>レ</sub>之、尋到<sub>ニ</sub>執政之各亭<sub>一</sub>及<sub>ニ</sub>上使久通之亭<sub>一</sub>禮<sub>ニ</sub>謝<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>、

宗信公御譜中

同年十月十九日自

且遣三家老島津右平太久郷於若年寄之各享禮謝之一、同日以三使者贈太刀・金馬代・二種千匹於久通、謝三上使之勤二矣、而後日宗信在三薩國拜賜之、事記宗信譜中、

大御所喜宗使三上使若年寄加納遠江守久通來于芝第一、

島津但馬守忠就代繼豐、招迎大書院、今般因二

吉宗公告レ老見レ祝レ之、寶刀一腰延壽長二尺三寸七分半・箱肴一種賜二

之繼豐委見繼豐之譜中、且寶刀一腰代金三十枚和州則長長二尺三寸七分半・箱肴一種宗

信拜三領之、忠就代繼豐・宗信奉申謝之一、即忠就代繼豐・宗信一登レ營、又登三西城一奉申謝之一、

二十五日宗信拜領之寶刀一腰家臣野間孫右衛門政春馬・

川上正右衛門親芳番・步士中村源左衛門・指宿土佐土原

新左衛門其外輕卒等警衛之發芝邸、歷東海山陽西海

之三驛、十一月二十一日到着薩城、宗信即拜戴之一、

是故宗信呈上謝三恩篤書牘上、使下菱刈次郎左衛門實輝

馬廻此時到用番酒并雅樂頭忠知家重公、大御所執政、家治公、西尾隱岐守忠直執政

各之第上、勤二使价二矣、同月七日應レ教養刈實輝到二

三御所執政之第一、賜二宗信二之奉書以二用人二授二與之實

輝一、

繼豐公御譜中

正文在文庫

重陽之御内書可相渡外間、明日五半時御城の家來可

被差出外、以上、

〔延享二年〕十月廿日

松平大隅守殿

本多中務大輔

全上

寫正文在家老座

松平大隅守

來月三日公家衆御馳走御能之節、御折一合可有獻上外、

〔延享二年〕十月

越前島津氏忠紀譜中

同二年壬戌十月二十二日勝浦山別莊於須磨方與忠紀一假

亭營作共就焉、且忠紀創建稻荷社、於須磨方造立神

體、今日以吉日一故、淨妙院憲英爲導師、奉遷之於

社内每歲以三月初五日、以爲忠紀生土神也、乃忠紀與於

須磨方一俱到二別莊一、初詣三稻荷社一、事詳三于左一、

於須磨御方及島津周防忠紀

上棟薩州鹿兒島勝浦山稻荷大明神寶殿創建

寛保二年壬戌十月二十二日

故 母公於須磨御方寫此神體、忠紀構社堂、寛保二年壬戌十月二十二日導師淨妙院大僧都法印憲英奉遷座之、永崇此地守護神者也、至祝至禱、

(前条記事及文書ハ編年ノ場ヲ違ヘリ)

御隱居御方御家老 比志島隼人源範房

同大御目附 鎌田衛衛藤原政興

同御用人 山澤十太夫平盛香

同御普請奉行 吉井新右衛門泰平

同御普請方檢者 黒田次郎兵衛清安

右同 宮内辨助友照

右同 竹之内三之丞實壽

總大工 吉元八右衛門正實

石切頭 肱岡武左衛門起柄

忠紀家臣寄檢者 肥後 善助盛方

右同 川村慶右衛門末存

裏

薩城之良位勝浦山山莊者忠紀拜賜之地也、不可無鎮護神、嚮是忠紀生于 大磯館地在稻荷神社、是則爲生土神矣、

(表紙)

追 錄 舊 記 雜 錄 卷九十一	吉 貴 公 繼 豐 公 宗 信 公	自延享二年十一月 至同 年十二月
------------------------------------	---	------------------------

2230 宗信公御譜中

正文在琉球國國司

芳翰令披見外、去秋月桂院殿就卒去、(吉貴側室、おすま)被差渡與古田親方

被示聞之段入念儀外、恐惶不宣、

(卷)

「延享二年」十一月二日 侍從宗信(花押 No.9)

謹上 中山王

繼豐公御譜中

正文在文庫

今朝御折一合被獻之候、遂披露外處一段之御仕合外、恐

謹言、

(卷)「延享二年」十一月三日 忠良判

松平大隅守殿

忠良

(卷)「在右裏」本多中務大輔

2232 宗信公御譜中

正文在琉球國國司

爲年首之嘉儀被差渡使簡、殊別錄之通贈給之、入念外之段令祝着外、猶期後喜之時外、恐惶不宣、

(卷)

「延享二年」十一月四日 侍從宗信御判

謹上 中山王

2233 全上

芳翰令披見外、如來意我等今度初之御暇被 仰出候爲祝儀、被差渡具志川按司、殊太刀一腰・馬代白銀百兩并別錄之通贈給之、入念外之段令祝着外、恐惶不宣、

(卷)

「延享二年」十一月四日 侍從宗信御判

謹上 中山王

重豪公御譜中

重豪

初久方 忠洪 善次郎 兵庫 善次郎 又三郎

薩摩守 從四位下侍從左近衛少將 從四位上左近衛

中將 上總介 榮翁 從三位

延享二年乙丑冬十一月七日初午上誕三生於薩府、母島津玄

著貴備之嫡子女於富○久方生髮未燥於富享年十九、法名正賢院殿貞龜妙雅

大姉、葬于關州加治木長年寺、重妻及繼正統、別安靈神主於

惠德院、既又耐於福昌寺祖廟而、支族村橋兵十郎久昌勤三鳴弦、

祭以誦快、蓋母以子貴之義云 目之役、

大信公

諱重豪 初諱久方 又改忠洪 小字善次郎 冠禪兵

庫 又改又三郎 又稱薩摩守 轉任從四位下左近衛

少將從四位上中將 老改上總介 陞從三位號榮翁

延享二年乙丑十一月六日生於薩府、母島津備前貴備考母

名於登美、翌七日卒年十九、葬于松城長年寺、法名正賢院殿貞龜妙雅大姉

其葬禮城以 豐德公、時為鄉主故也、迄 大信公立禰封爵、始耐其主於福

昌寺祖廟、而祭式、亦以諸侯 命也

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

三御所樣益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤外、然者

公方樣口御政務被遊 御讓

大御所樣御隱居之儀被 仰出外段被承之、目出度被存由

得其意外、依之被差越使者外、紙面之趣各申談及 上聞

外、恐々謹言、

朱力平

延享二年 十一月七日

松平上總入道

本多中務大輔

忠良判

全上

御札令披見外、

三御所樣益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤外、然者

公方樣口御政務被遊 御讓

大御所樣御隱居之儀被 仰出外段被承、目出度被存由得

其意外、依之被差越使者外、紙面之趣及言上外、恐々謹

言、

朱力平

延享二年 十一月七日

松平上總入道

西尾隱岐守

忠直判

全上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然者

公方様<sup>ニ</sup>御政務被遊 御讓

大御所様御隠居之儀被 仰出外段被承之、目出度被存由

得其意外、依之被差越使者外、紙面趣各申談

大御所様<sup>ニ</sup>及 上聞外、恐<sup>ク</sup>謹言、

<sup>朱カキ</sup>

「延享二年」十一月七日

本多中務大輔  
忠良判

松平上總入道

宗信公御譜中

正文在文庫

御狀令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然者

公方様<sup>ニ</sup>御政務被遊 御讓

大御所様御隠居之儀被 仰出外段被承之、目出度被存由

得其意外、依之被差越使者外、紙面趣各申談及 上聞外、

恐<sup>ク</sup>謹言、

<sup>朱</sup>

「延享二年」十一月七日

本多中務大輔  
忠良判

(島津宗信)  
松平薩摩守殿

全上

御狀令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然者

公方様<sup>ニ</sup>御政務被遊 御讓

大御所様御隠居之儀被 仰出外段被承、目出度被存由得

其意外、依被差越使者外、紙面之趣及言上外、恐<sup>ク</sup>謹言、

<sup>朱</sup>

「延享二年」十一月七日

西尾隱岐守  
忠直判

松平薩摩守殿

全上

御狀令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然者

公方様<sup>ニ</sup>御政務被遊 御讓

大御所様御隠居之儀被 仰出外段被承之、目出度被存由

得其意外、依之被差越使者外、紙面之趣各申談

大御所様<sup>ニ</sup>及 上聞候、恐<sup>ク</sup>謹言、

<sup>朱</sup>

「延享二年」十一月七日

本多中務大輔  
忠良判

松平薩摩守殿

2242 吉貴公御譜中

正文在文庫

今度

將軍 宣下相濟<sup>レ</sup>爲御祝儀、

公方様 大御所様<sup>レ</sup>以使者御太刀・御馬代被獻<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>、遂披露<sup>レ</sup>處一段之御仕合<sup>レ</sup>、恐<sup>レ</sup>謹言、

<sup>朱力キ</sup>延享二年 十一月十二日

松平能登守

乘賢判

本多中務大輔

忠良判

酒井雅樂頭

忠知判

松平上總入道

2243 全上

今度

將軍 宣下相濟<sup>レ</sup>爲御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被獻<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>、遂披露<sup>レ</sup>處一段之御仕合<sup>レ</sup>、恐<sup>レ</sup>謹言、

<sup>朱力キ</sup>延享二年 十一月十二日

西尾隱岐守

忠直判

松平上總入道

2244 宗信公御譜中

同年十一月二日

家重公轉<sup>ニ</sup>任正二位内大臣征夷大將軍<sup>一</sup>、修<sup>ニ</sup>飾將軍

宣下之儀<sup>一</sup>、於<sup>ニ</sup>柳營<sup>一</sup>禮演歡成、因<sup>レ</sup>茲同月十二日獻<sup>ニ</sup>御

太刀一腰・御馬代黃金十兩<sup>一</sup>、鎌田六郎太夫政方勤<sup>ニ</sup>使价<sup>一</sup>、

登<sup>レ</sup>營奉<sup>レ</sup>賀<sup>ニ</sup>將軍

宣下<sup>一</sup>、且土持平右衛門辰昌亦登<sup>ニ</sup>西城<sup>一</sup>、奉<sup>レ</sup>獻<sup>ニ</sup>御太刀

一腰・御馬代黃金十兩<sup>于</sup>、

吉宗公<sup>一</sup>、同品<sup>于</sup>、

家治公<sup>一</sup>、勤<sup>ニ</sup>將軍

宣下之賀使<sup>一</sup>、執政各贈<sup>ニ</sup>奉書<sup>一</sup>載<sup>ニ</sup>于後<sup>一</sup>、同日以<sup>ニ</sup>干鯛<sup>一</sup>

箱・御樽代金子三百匹<sup>一</sup>獻<sup>ニ</sup>御部屋御方<sup>一</sup>、奉<sup>レ</sup>賀<sup>ニ</sup>將軍

宣下<sup>一</sup>、大野清太夫清房<sup>政方・辰昌・清房共勤在干支邸</sup>登<sup>ニ</sup>二之城<sup>一</sup>、勤<sup>ニ</sup>使

价<sup>一</sup>、

2245 正文在文庫

今度

將軍 宣下相濟<sup>レ</sup>爲御祝儀、

公方様 大御所様<sub>ニ</sub>以使者御太刀・御馬代被獻之外、遂披露<sub>ハ</sub>處一段之御仕合<sub>ハ</sub>、恐<sub>ク</sub>謹言、

〔延享二年〕十一月十二日

松平能登守 乘賢判

本多中務大輔 忠良判

酒井雅樂頭 忠知判

松平薩摩守殿

2246 全上

今度

將軍 宣下相濟<sub>ハ</sub>爲御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之外、遂披露<sub>ハ</sub>處一段之御仕合<sub>ハ</sub>、恐<sub>ク</sub>謹言、

〔延享二年〕十一月十二日

西尾隱岐守 忠直判

松平薩摩守殿

2247

絲豊公御譜中 扣正文在右筆所

同氏薩摩守當年四月私國許<sub>ニ</sub>初<sub>ル</sub>御暇被<sub>レ</sub>下置<sub>ハ</sub>、依之來

年參勤時分之儀奉伺<sub>ハ</sub>、御差圖次第國許<sub>ニ</sub>申遣度奉存候、以上、

〔延享二年〕十一月十一日

〔島津總督〕松平大隅守

〔中務大輔様江御留守居<sub>ニ</sub>而被差出<sub>ル</sub>處御請取被置、追而御挨拶可被成旨被仰聞<sub>ハ</sub>〕

2248

全上

正文在文庫

同姓薩摩守參府時節之儀被相伺<sub>ハ</sub>、來年三月中參府候之樣<sub>ニ</sub>可被致<sub>ハ</sub>、

〔延享二年〕十一月

〔在口裏〕松平大隅守<sub>ニ</sub>

2249

全御譜中

同年十一月二日於<sub>ニ</sub>東武營中<sub>ニ</sub>

家重公蒙<sub>ニ</sub>將軍宣下<sub>ニ</sub>、轉<sub>ニ</sub>任正二位内大臣兼右近衛

大將<sub>ニ</sub>、源氏長者兩院別當矣、繼豐養<sub>レ</sub>病、故此日不能<sub>ハ</sub>

與<sub>ニ</sub>列侯<sub>ニ</sub>登<sub>上</sub>營、故以<sub>ニ</sub>留守居<sub>ニ</sub>爲<sub>ニ</sub>使者<sub>ニ</sub>、稟<sub>ニ</sub>之於執

政本多中務大輔忠良<sub>一</sub>矣、

○同月四日有<sub>下</sub>在府諸侯登<sub>ニ</sub>西城<sub>ニ</sub>奉<sub>レ</sub>伸<sub>ニ</sub>

將軍 宣下之賀詞於

大御所吉宗公

大納言家治公之 令上也、繼豐有<sub>レ</sub>病不能<sub>レ</sub>登<sub>二</sub>西

城<sub>一</sub>、故以<sub>二</sub>留守居<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>使者<sub>一</sub>、稟<sub>三</sub>之於執政本多忠良、西

尾隱岐守忠直家治公、御政中、

○同月十一日・十二日・十三日有<sub>レ</sub>在府諸侯當<sub>二</sub>登<sub>レ</sub>營拜

禮<sub>二</sub>之 令上也、十二日繼豐拜禮之日也、然有<sub>レ</sub>病、故當

日以<sub>二</sub>使者家老島津右平太久郷<sub>一</sub>獻<sub>二</sub>御太刀一腰・御馬代

黃金十兩於

家重公<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>使者番頭代町田直右衛門俊方<sub>一</sub>獻<sub>二</sub>同品於

吉宗公<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>同人<sub>一</sub>獻<sub>二</sub>同品於

家治公<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>使者留守居代大野清太夫清房<sub>一</sub>進<sub>二</sub>上干鯛

一箱・昆布一箱・御樽代五百匹 御部屋家治公於 二九一

奉<sub>二</sub>拜賀<sub>一</sub>馬、

○同日遣<sub>二</sub>使者於酒井雅樂頭忠知・本多忠良、松平能登守

乘賢・西尾忠直共執、政、松平右京大夫輝貞御老中格之各亭<sub>一</sub>、各

呈<sub>二</sub>太刀一腰・馬代金十兩<sub>一</sub>、其外如<sub>二</sub>先規<sub>一</sub>以<sub>二</sub>使者<sub>一</sub>呈<sub>二</sub>

祝物于各官<sub>一</sub>奉<sub>レ</sub>賀<sub>レ</sub>之、

正文在文庫

今度

將軍 宣下相濟<sub>レ</sub>爲御祝儀、

公方様 大御所様<sub>レ</sub>以使者御太刀・御馬代被獻<sub>レ</sub>之外、遂

披露<sub>レ</sub>處一段之御仕合<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

〔采延享二年〕

十一月十二日

忠良判

松平大隅守殿

忠良

〔采在右裏〕

本多中務大輔

2251 全上

今度

將軍 宣下相濟<sub>レ</sub>爲御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代

黃金十兩被獻<sub>レ</sub>之外、遂披露<sub>レ</sub>之處一段之御仕合<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>

謹言、

〔采延享二年〕

十一月十二日

忠直判

松平大隅守殿

忠直

〔采在右裏〕

西尾隱岐守

繼豐公御譜中

同年十一月十五日

家重公祝<sub>二</sub>將軍<sub>一</sub>、宣下<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>上使三浦志摩守忠次<sub>一</sub>到<sub>二</sub>繼豐之芝邸<sub>一</sub>、賜<sub>二</sub>縮緬二十卷於繼豐<sub>一</sub>、同十卷於老父吉貴、同十卷於嗣適宗信<sub>一</sub>、繼豐有<sub>レ</sub>病、吉貴・宗信共在<sub>二</sub>薩州<sub>一</sub>、以故島津但馬守忠雅代<sub>二</sub>繼豐<sub>一</sub>、迎<sub>二</sub>上使於芝邸<sub>一</sub>、請<sub>二</sub>大書院<sub>一</sub>敬承<sub>二</sub>上旨<sub>一</sub>、預置<sub>二</sub>賜物於上段<sub>一</sub>、忠雅代<sub>二</sub>繼豐<sub>一</sub>及吉貴・宗信<sub>一</sub>拜<sub>二</sub>戴之<sub>一</sub>、而傳<sub>二</sub>繼豐<sub>一</sub>、則雖<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>病敬拜戴焉、乃以<sub>二</sub>忠雅<sub>一</sub>奉<sub>レ</sub>伸<sub>二</sub>並<sub>二</sub>賜三人<sub>一</sub>懇篤之辱於<sub>二</sub>上使<sub>一</sub>也、而即日忠雅登<sub>レ</sub>營奉<sub>レ</sub>謝<sub>レ</sub>之、尋到<sub>二</sub>執政各亭<sub>一</sub>演<sub>二</sub>謝禮<sub>一</sub>、且以<sub>二</sub>家老島津大藏久純<sub>一</sub>使若年寄各亭<sub>一</sub>伸<sub>二</sub>謝禮<sub>一</sub>、同日以<sub>二</sub>使者<sub>一</sub>贈<sub>二</sub>太刀・金馬代於忠次<sub>一</sub>、謝<sub>二</sub>上使之勤勞<sub>一</sub>、而吉貴・宗信在<sub>レ</sub>國拜戴之、事記<sub>二</sub>於各譜<sub>一</sub>、

繼豐公御譜中

寫正文在家老座

鞍置御馬御獻上之儀、水野壹岐守様(忠定)に御相談之上、酒井雅樂頭様に別紙之通被<sub>レ</sub>伺置<sub>レ</sub>段者、今月十三日御使便申越通<sub>二</sub>外處<sub>一</sub>、去ル十七日雅樂頭様より御留守居被<sub>レ</sub>召呼、

公方様に鞍置御馬二疋被<sub>レ</sub>獻、

大御所様 大納言様に者被<sub>レ</sub>獻<sub>二</sub>不及旨<sub>一</sub>、御附紙を以<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰渡旨、左外の御取次御用人を以<sub>レ</sub>、雅樂頭様に先達の御内意被<sub>レ</sub>仰聞置<sub>レ</sub>外鞍置御馬御獻上之儀に付外ハ、先頃被<sub>レ</sub>仰渡爲<sub>レ</sub>相濟儀に者外得共、御家格不相替二疋御獻上被<sub>レ</sub>成度と之儀に外得者 御上に相通シ外様被<sub>レ</sub>成度被<sub>レ</sub>思召、段々御口上共被<sub>レ</sub>相添、先右之通相濟、御間柄之故雅樂頭様にも御大慶被<sub>レ</sub>思召外、最前壹岐守様御世話も被<sub>レ</sub>成レり間、二疋御獻上相濟候段爲<sub>レ</sub>御知被<sub>レ</sub>仰進外様可被<sub>レ</sub>成旨をも、野村大右衛門に被<sub>レ</sub>仰聞外由申出、達 貴聞御承知被<sub>レ</sub>成外、御受雅樂頭様に則日大右衛門を以<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰出外、且又右付外者先達の御内意之趣有レ外處、今日御付紙を以<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰渡被<sub>レ</sub>仰聞趣承知仕、段々御世話を以<sub>レ</sub>、家格不相替二疋獻上之筋被<sub>レ</sub>仰渡、忝被<sub>レ</sub>思召外、御禮之御口上大右衛門を以<sub>レ</sub>雅樂頭様に被<sub>レ</sub>仰達、壹岐守様に及大右衛門被<sub>レ</sub>差越、右之通被<sub>レ</sub>仰渡御安堵被<sub>レ</sub>成外、此間より段々御世話之故右通被<sub>レ</sub>仰渡外、雅樂頭様にも爲<sub>レ</sub>御知申入外様御達被<sub>レ</sub>成外趣を以<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰進外處、壹岐守様にも雅樂頭様に御挨拶一通り可被<sub>レ</sub>仰進由被<sub>レ</sub>仰聞候段、大右衛門申出達 貴聞外、右付外者最前より壹岐守様何

角御丁寧被仰進<sub>レ</sub>付、壹岐守様<sub>レ</sub>に猶御禮大藏御使者<sub>二</sub>可被仰進旨被仰付、昨十九日御使者相勤御禮相濟申<sub>レ</sub>、雅樂頭様段々御懇意<sub>二</sub>付<sub>レ</sub>る<sub>ハ</sub>被遺物等之儀、是又壹岐守様思召<sub>レ</sub>可有御座<sub>レ</sub>付、御内談被仰入<sub>レ</sub>答<sub>レ</sub>、壹岐守様<sub>レ</sub>に表右相究<sub>レ</sub>節被進物可有御座<sub>レ</sub>、御兩所様御丁寧<sub>二</sub>付<sub>レ</sub>る<sub>ホ</sub>、

總州様 薩州様より御挨拶等も可有御座哉、此段<sub>ホ</sub>被相伺 御意次第奉存候、

一鞍置御馬二疋御献上<sub>二</sub>付<sub>レ</sub>る<sub>ホ</sub>、御老中様方<sub>レ</sub>に御殘馬一疋宛致進覽來候間、來年献上<sub>レ</sub>之節、御殘馬一疋宛致進覽心得<sub>二</sub>御座<sub>レ</sub>、此段<sub>ホ</sub>可申達置旨被仰付<sub>レ</sub>由、右付紙<sub>二</sub>の<sub>レ</sub>被仰渡<sub>レ</sub>節、御取次<sub>レ</sub>に大右衛門より口達<sub>二</sub>の<sub>レ</sub>申達候處、追<sub>レ</sub>可申上<sub>レ</sub>由、然處雅樂頭様<sub>レ</sub>大右衛門被召呼、御殘馬御老中様方被遣爲被來<sub>レ</sub>由<sub>レ</sub>得共、

西御丸<sub>二</sub>さへ献上<sub>二</sub>不及事<sub>二</sub>付<sub>レ</sub>、御老中様方<sub>レ</sub>に被遣及間敷儀<sub>二</sub>被思召<sub>レ</sub>、然共御一分<sub>二</sub>の<sub>レ</sub>難被成候間、右之趣御書付<sub>レ</sub>の被差越<sub>レ</sub>ハ、御同席様方<sub>レ</sub>に御相談可被成旨、被仰聞<sub>レ</sub>由申出達 貴聞、今日右御書付被差出<sub>レ</sub>答<sub>レ</sub>、雅樂頭様被仰聞<sub>レ</sub>趣を以<sub>レ</sub>、御老中様方へ被遺儀<sub>レ</sub>ハ、相究<sub>レ</sub>節早々可申越<sub>レ</sub>、御献上<sub>レ</sub>之御

馬手當被申渡置<sub>二</sub>の<sub>レ</sub>可有之<sub>レ</sub>ハ、

右申越<sub>レ</sub>條可被達 貴聞<sub>レ</sub>、御家格不相替御願<sub>レ</sub>之通 鞍置御馬二疋御献上<sub>二</sub>被仰渡、恐悅奉存<sub>レ</sub>、別紙御同書貳通差越申<sub>レ</sub>、以上、

但去ル十三日御使便差越<sub>レ</sub>御同書<sub>ホ</sub>、御案文取違御右筆差出<sub>レ</sub>付、少々御文言相替<sub>レ</sub>所御座<sub>レ</sub>、今日差越<sub>レ</sub>御同書を以書留可被申付置<sub>レ</sub>、

〔延享二年〕十一月廿日

〔朱〕 鳴津右平太  
〔上〕 鳴津大藏

- 樺山主計殿 (久)初
- 顯娃内膳殿 (久)周
- 伊勢兵部殿 (朱)下
- 北條織部殿 (時)守
- 鎌田太郎右衛門殿 (政)直
- 比志嶋隼人殿 (範)原
- 鳴津權左衛門殿 (久)進

2254  
〔朱〕 本文被申越候趣致承知、御兩殿様達 貴聞<sub>レ</sub>處、御挨拶不及旨 御意<sub>レ</sub>間、左様可被相心得<sub>レ</sub>、御献上<sub>レ</sub>御馬手當之儀得其意<sub>レ</sub>、御案文寫此方<sub>レ</sub>に扣置<sub>レ</sub>、

十二月廿一日

(本文書八二二五三号文書ノ行間朱書ナリ)

2255

全上

扣正文在家老座

口上覺

御代替初の來寅年私參府年故、乍病中家格之通鞍置御馬二疋獻上仕度旨申上外處、御本丸に鞍置御馬二疋獻上可仕旨被仰渡承知仕外、先規御馬獻上仕外節者、各様に及御殘馬一疋宛致進覽來外、此度者西丸兩御所様に者御馬獻上仕不及之由、被仰渡外に付る者、各様に馬致進覽外儀如何可致哉、御了簡被成可被下候、

(卷)「延享二年」十一月廿三日

全上

扣正文在家老座

鞍置御馬獻上仕外節、御殘馬各様に致進覽儀得御意候處 西丸兩御所様に不及獻上之旨被仰渡外付、各様に御殘馬不及致進覽之由被仰聞致承知外、御代替初の參府年鞍置御馬二疋獻上可仕旨被仰渡、家格不相替難有奉

存外、其節祝外の卷物十卷・御肴一折各様に致進覽度存候、此段如何可有御座哉、御了簡被成可被下外、以上、

(卷)「延享二年」十一月廿七日

2257

全上

扣正文在右筆所

私儀病氣に付、當年滯府奉願、緩々遂保養難有仕合奉存外、左外得者來年者參勤年御座外間、在府之心得に可罷在外、依之申上置外、以上、

(卷)「延享二年」十一月廿七日 (鳥津總書) 御名

(卷)「卷裏之方口に松平大隅守江と有之」

2258

(卷)「其方儀病氣に付、當年滯府、來年者參勤年に外之間、在府之心得に可被罷在由、以書面被届外、各に表相達承置外、

十二月

2259

継豊公御譜中

正文在文庫

大御所様より爲 上使若御年寄加納遠江守様(久應)五月十日

九日芝御屋敷に御出、鳴津(忍)但馬守殿御門地幅外迄御出迎 太守様御病中故 御名代之段被仰達、大御書院中

段之頭ニ御案内 上意、此節

御隱居御祝儀付御祝被成

太守様に御腰物一腰延壽長サ貳尺 參寸七分半

但銘象眼入代金子參拾五枚

御拵御三所物金獅子程乗作

箱御肴一種

薩州様に御腰物一腰和州則長長サ 貳尺參寸九分半

但磨上無銘也代金子參拾枚

御拵御三所物色繪梅壽乗作

箱御肴一種御拜領被成り段但馬守殿御承知、御道具御頂戴、御勝手に被爲入 上意之趣但馬守殿(久徳)鳴津大藏に被仰聞

太守様に申上、御道具御頂戴、右御請御禮、且又 薩

州様に次御拜領難有被 思召り段をも、大藏ニ而但馬

守殿に御達、 上使に但馬守殿に御受御禮被仰上、

上使御立被成り、御料理御斷故御鬘斗・御茶迄差、

一右付則日爲御禮 御名代但馬守殿

兩御丸に御登 城御禮被仰上、直ニ御老中様方并 上

使遠江守様に御廻御禮被仰置り、若御年寄様方に老島津右平太御使等、御側衆に老物頭御使者ニ御禮相濟

り、

一右付 太守様御内證御勤、則日

御本丸に村路被差上御禮被仰上り、

一薩州様御拜領之御腰物、江戸より十月廿五日三道中急

ニ而、御馬廻野間孫(家)右衛門・新御番川上正右衛門(親)・御

步行中村源左衛門・指宿衆中佐土原新左衛門幸領ニ而

被差越、御當地に十一月廿一日相届、於御對面所被遊

御頂戴候、

一右付 總州様より御飛札、

薩州様より老御使札、丑十二月六日御日附ニ而 薩州

様御使著江戸詰合り御馬廻菱刈次郎左衛門(實)に被仰付、

閏十二月五日 總州様 薩州様御書御文左之通被差出

御禮御勤相濟り、

公方様

大御所様御方

一御連署四通

御用番

酒井雅樂頭様

總州様 薩州様方

大納言様御方

一 御格書二通

西尾隲岐守様

薩州様 薩州様方

處、右之通御用人を以御渡被成候ニ付、本書老於江戸  
御右筆江相渡外、

右之通 總州様御飛札老御留守居岩下佐次右衛門持參

一 御老中様方・若御年寄様方 薩州様方御自分御禮之御

仕、薩州様御使札右次郎左衛門儀佐次右衛門案内ニ

書も被差出、尾張様江老御間柄之譯表外付、御書被進

ル罷出、御取次江御書差出外、三御所様江 總州様

外、

薩州様方御内證方及御禮御文右同日被差出外、則御返

右之通御勤相濟外旨申來外、

事被下外、

總州様御方御奉書寫御返事老磯御方江差上、薩州

公方様

様御方御奉書寫御返事老御右筆江相渡置外、

一 御奉書二通

酒井雅樂頭様

總州様 薩州様江

可相載外、

大御所様御方

十一月

(北條時元  
織部)

一同 二通

松平能登守様

總州様 薩州様江

吉貴公御譜中

大納言様御方

正文在文庫

一同 二通

西尾隲岐守様

御代替之御祝儀献上之使者、明日四時 御城江可差出外、

總州様 薩州様江

以上、

右老閏十二月七日御奉書御渡可被成外間

朱力平  
延享二年 十一月廿八日

酒 雅樂

總州様御方老御留守居罷出、薩州様御方老御使者同

松平上總入道

道ニ罷出外様、御銘々御用人方申來、御留守居野村

留守居

大右衛門并御使者右次郎左衛門御留守居致案内罷出外

2260

宗信公御譜中

正文在文庫

御代替之御祝儀獻上之使者、明日四時 御城に可差出、

以上、

〔卷〕「延享二年」

十一月廿八日

酒 雅樂

松平薩摩守殿

留守居

宗信公御譜中

正文在文庫

御狀令披見、

三御所様益御機嫌能被成御座、九月廿五日

公方様 大御所様御移徙相濟、目出度被存由

得其意、依之被差越使者、紙面趣各申談及 上聞、

恐、謹言、

〔卷〕「延享二年」

十一月廿八日

本多中務大輔 忠良判

松平薩摩守殿

御狀令披見、

三御所様益御機嫌能被成御座、九月廿五日

公方様 大御所様御移徙相濟、目出度被存由

得其意、依之被差越使者、紙面趣及言上、恐、謹

言、

〔卷〕「延享二年」

十一月廿八日

西尾隠岐守 忠直判

松平薩摩守殿

御狀令披見、

三御所様益御機嫌能被成御座、九月廿五日

公方様 大御所様御移徙相濟、目出度被存由

得其意、依之被差越使者、紙面趣各申談

大御所様、及言上、恐、謹言、

〔卷〕「延享二年」

十一月廿八日

本多中務大輔 忠良判

松平薩摩守殿

宗信公御譜中

正文在文庫

なを、表向より御申上被成、共、なを御祝儀御

申上なされ、とをり、何もよろしく申上まいらせ、

めてたくかしく、

十月廿三日付にて御文下されり、

三御所様御機嫌よくならせられ、御日出度思召りよし、

扱ハ先月廿五日

上様御本丸へ御移徙濟せられ

大御所様御隠居被遊、西之丸へ移らせられ御事、御目

出度さ、右之御祝儀御申上被成り御文のやう、何もよろ

しく申上まいらせり御事ニ御座り、めてたくかしく、

〔巻〕  
「延享二年」

松平

薩摩守様

御返事

人々御中

豊をか

梅その

まつ嶋

山の井

うら尾

瀬かわ

たきつ

さえた

大右衛門盛凭一、所附之令書載ニ於左、

2267

全上

正文在文庫

覺

一 萬石以上之面ニ領知之 御判物 御朱印被下付也、

秋元攝津守・本多紀伊守可相改旨被 仰付事、

一 御代々之 御判物 御朱印所持之面ニ者 御判物 御

朱印に寫を差添出之、右兩人 御本書拜見之上寫を可

留置り、勿論國郡鄉村高述注帳面可被差出之、 御朱

印無之面ニ者、領知之高國郡鄉村委細書注、兩人に可

被渡之事、

一 御加増拜領或所替之面ニ、或

御判物 御朱印高之内領知分り面ニ、其旨趣具書注、

兩人迄可被達之事、

右之外可被相伺儀者兩人に可被承合り、以上、

〔巻〕  
「延享二年」 丑十一月

2266

継豊公御譜中

同年十一月二十九日、執政松平能登守乘堅招ニ留守居野村

2268

全上

扣正文在江戸家老座

口上覺

松平大隅守領内鹿籠并長野、右兩所に先年取立り金山年々金氣少ク、其上位惡敷罷成、入用及損亡り得共少くも堀出り得者、世上之重寶罷成事り故、當時迄者大分之用を掛堀せ申り得共其詮及無之、漸々衰出金纒計二、年々大分之損銀相立申り間、兩金山共致手細、少人數二、堀堀せ可申り、此段申上り、以上、

十一月晦日

御名内

野村大右衛門

一寶永十七年より長野金山堀初、同二十年相止、

一明曆二年又々長野金山國中入夫を以堀、

一寛文二年自他國之者共堀、

一天和三年より鹿籠金山堀初、

十一月

〔十一月晦日〕

一右御取細之書付壹通・金山堀初年間付壹通、水野壹岐守様は持參仕、御用人川上林右衛門は取逢、鹿籠金山・

長野金山此節御取細付、先年芹ヶ野金山中休被仰付り

節、其節之御勘定奉行大久保下野守様は御内談有之、中

休之御届被仰上り、此節右兩金山御取細被仰付り付

ハ、御届被仰上筋ニ及可有御座哉之旨御内談申上り處、

御勘定奉行神尾若狹守様は書付持參仕、壹岐守様御差

圖之旨申達御相談可申上り、當月者逸見出羽守様御月

番二り得共、御事多可有之り間、御明番り得共若狹

守様は參上仕、御内談申上り可然り、此儀及壹岐守様

被仰聞り由可申上旨、右林右衛門を以被仰聞り、

但金山御取細之書付壹通差出り處、堀初年間之儀林

右衛門より相尋り故、私爲覺書付致持參り由二

差出り處、壹岐守様被成御覽、兩通共若狹守様は

持參可仕旨被仰聞り付、兩通共差出り、

一神尾若狹守様は參上仕、御用人兒玉繁右衛門は取逢、

壹岐守様御差圖之旨申達書付二通差出り處、得と被成

御承知り、弥御届被仰出方可然り、右書付直ニ被留置、

御勘定所に可被差出り旨、右御用人を以被仰聞、御届

相濟申り、

但兩金山只今迄之出金及何程り哉、且又堀子幾人罷

居、此節被取細り付ハ幾人被減り哉、右兩様之

譯被聞召置度旨、右御用人を以被仰聞り付、御當

地二る者相知不申り間薩州に可申越り、遠國之儀

ハ故間及可有之り、此段者御聞置可被下旨、野村

大右衛門申出り事、一

正文在文庫

御狀令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又今度徳

(田安宗武)

川右衛門督殿御簾中安産之段被承之、目出度被存由得其

意外、紙面趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

(朱)

「延享二年」十二月朔日

本多中務大輔  
忠良判

松平薩摩守殿

御狀令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將亦今度徳

川右衛門督殿御簾中安産之段被承之、目出度被存由得其

意外、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

(朱)

「延享二年」十二月朔日

西尾隠岐守  
忠直判

松平薩摩守殿

正文在文庫

御狀令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又今度徳

川右衛門督殿御簾中安産之段被承之、目出度被存由得其

意外、紙面趣各申談 大御所様口及言上外、恐々謹言、

(朱)

「延享二年」十二月朔日

本多中務大輔  
忠良判

松平薩摩守殿

正文在文庫

猶く御表より御申上被成り由、何もくよろしく

申上まいらせり、めてたくかしく、

十月廿七日付にて御ふみ下されり、

三御所様ますく御機嫌よく御座なされ、恐悦に覺しめ

し外由、しかれば今月朔日、徳川右衛門督様御簾中様御

安産、御男子御出生の御事、御めてたく覺しめし外由、

右之段御申上被成り趣、よろしく申上まいらせり、めて

たくかしく、

(朱)

「延享二年」

2274

御狀令披見外、

全上

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然者十月三

松平薩摩守殿

〔延享二年〕  
十二月二日

酒井雅樂頭

忠知判

2273

宗信公御譜中

正文在文庫

御狀令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然者十月三日御曲輪之内出火之處、早速鎮り段被承之、玆重由得其意外、紙面趣各申談及 上聞外、恐く謹言、

松平

薩摩守様

人々御中

梅その

まつ嶋

山の井

うら尾

せかわ

たきつ

さゑた

2276

吉貴公御譜中

正文在文庫

返くことのほかひへまいらせ外、なぞ御機嫌よく

いらせられ外やうにとおほしめし外、菊姫様もおな

(繪置女)

し御事外、御祝義承申外、御禮御ふい長の御事、よ

松平薩摩守殿

〔延享二年〕  
十二月二日

本多中務大輔

忠良判

2275

全上

御狀令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然者十月三日御曲輪之内出火之處、早速鎮り段被承之、玆重由得其意候、紙面趣各申談

大御所様及言上候、恐く謹言、

松平薩摩守殿

〔延享二年〕  
十二月二日

西尾隱岐守

忠直判

ろしく御ほせ上られ度おほしめしり、

信證院様 (編貫御意) 御多(編貫女)い様 (吉貴女) とく姫様そのほか様方も御

しうき御もく録の通進しられり、めてたく御悦ニ御

ほしめしり、なを萬々年もといわぬ入らせられり、

何も々よろしく御申上被成へくり、めてたくかし

く、

御悦之爲仰被進り、時分からことこのほかの寒しニて御座

りへとも、まつ々その御地ニて

總州様御機嫌よく被爲入り御事、御めて度思召り、その

ほか様方も御機嫌よく、さつま守様ニも御機嫌よくい

らせられり御事、御めて度かしく思召り、こニ御ほとニ

ても御揃あそハし、御きけんよくいらせられり、先月廿

三日ニハ御日からもよく

菊姫様御はろく初の御いわるあそハしりて、めて度御悦

ニ御ほしめしり、

公方様

大御所様より 御上使も御いたニきあそハしり、御はい

りやう物もあそハし、御にき々しく御いわる共の御事

にて、大守様はしめさせられ、いかほとか々御悦ニお

ほしめしり、

總州様よりも御祝義御もく録の通進しられ、めて度かた

しけなくおほしめしり、誠に幾久しく萬々年も御めて

たき御事のミといわぬ入らせられり、此よしよろしく御

申上成へくり、めてたくかし、

朱カキ 延享二年 十二月三日

ひち嶋(範房)

津 人さま

嶋 權左衛門さま

權左衛門さま

人々御中

荻原

お

2277

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、將又今度徳

川右衛門督殿御簾中安産之段被承之、目出度被存由得其

意り、紙面之趣各申談及 上聞り、恐々謹言、

朱カキ 延享二年 十二月五日

十二月五日

松平上總入道

松平能登守

乘賢判

2278

全上

御札令披見り、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤<sub>レ</sub>、將亦今度徳川右衛門督殿御簾中安座之段被承之、目出度被存由得其意<sub>レ</sub>、紙面之趣及言上<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

朱力<sub>ナ</sub>  
延享二年 十二月五日

松平上總入道

西尾隼岐守  
忠直判

2279

全上

御札令披見<sub>レ</sub>、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤<sub>レ</sub>、將又今度徳

川右衛門督殿御簾中安座之段被承之、目出度被存由得其

意<sub>レ</sub>、紙面之趣各申談

大御所様<sub>ニ</sub>及 上聞<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

朱力<sub>ナ</sub>  
延享二年 十二月五日

松平上總入道

本多中務大輔  
忠良判

2280

宗信公御譜中

正文在文庫

御狀令披見<sub>レ</sub>、

三御所様益御機嫌能被成御座、今度 御代替御禮相濟<sub>レ</sub>

段被承之、目出度被存由得其意<sub>レ</sub>、依之被差越使者<sub>レ</sub>、紙面趣各申談及 上聞<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

朱  
「延享二年」 十二月七日

松平薩摩守殿

松平能登守  
乘賢判

2281

全上

御狀令披見<sub>レ</sub>、

三御所様益御機嫌能被成御座、今度 御代替御禮相濟<sub>レ</sub>

段被承之、目出度被存由得其意<sub>レ</sub>、依之被差越使者<sub>レ</sub>、

紙面之趣及言上<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

朱  
「延享二年」 十二月七日

松平薩摩守殿

西尾隼岐守  
忠直判

2282

全上

御狀令披見<sub>レ</sub>、

三御所様益御機嫌能被成御座、今度 御代替御禮相濟<sub>レ</sub>

段被承之、目出度被存由得其意<sub>レ</sub>、依之被差越使者<sub>レ</sub>、

紙面趣各申談

大御所様<sub>ニ</sub>及 上聞<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

〔延享二年〕十二月七日

松平薩摩守殿

本多中務大輔  
忠良判

宗信公御譜中

正文在文庫

猶く御表よりも御申上被成り由、何もくよろしく申上まいらせり、かしく、

十一月二日付にて御ふみ下されり、

三御所様ますく御機嫌よく御座なされ、恐悦に覺しめしり由、しかれば此度

御代替りの御作法残所なく相濟り段、御めてたく覺しめしり由

上様 大納言様へ右の御祝儀御申上被成り御ふみの趣、よろしく申上まいらせりへくり、めてたくかしく、

〔延享二年〕

豊岡

梅その

薩摩守様

御返事

人々御中

まつ嶋

山の井

うら尾

松平

せかわ  
たきつ  
さゑた

宗信公御譜中

正文在文庫

猶く御表よりも御申上被成り由、何もくよろしく申上まいらせり、かしく、

十一月二日付にて御ふみ下されり、

三御所様ますく御機嫌よく御座なされ、恐悦に覺しめしり由、しかれば此度

御代替りの御作法残所なく相濟り段、御めてたく覺しめしり由

大御所様へ右御祝儀御申上被成り御ふみのおもむき、よろしく申上まいらせりへくり、めてたくかしく、

〔延享二年〕

豊岡

梅その

薩摩守様

人々御中

まつ嶋

山の井

2285

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然者十月三日御曲輪之内出火之處、早速鎮外段被承之、玆重由得其意候、紙面之趣各申談及 上聞候、恐々謹言、

朱カキ  
延享二年 十二月九日

松平能登守  
乘賢判

松平上總入道

うら尾  
せかわ  
たきつ  
さゑた

2286

全上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然者十月三日御曲輪内出火之處、早速鎮外段被承之、玆重由得其意外、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

2287

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然者十月三日御曲輪之内出火之處、早速鎮外段被承之、玆重由得其意外、紙面之趣各申談

大御所様及言上外、恐々謹言、

朱カキ  
延享二年 十二月九日

本多中務大輔  
忠良判

松平上總入道

朱カキ  
延享二年 十二月九日

西尾隱岐守  
忠直判

松平上總入道

全上

2288

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、九月廿五日公方様 大御所様御移徙相濟外段被承之、目出度被存由得其意外、依之被差越使者外、紙面趣各申談及 上聞候、恐々謹言、

朱力キ  
延享二年 十二月十二日  
松平能登守  
乘賢判

松平上總入道

全上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、九月廿五日

公方様 大御所様御移徙相濟外段被承之、目出度被存由  
得其意外、依之被差越使者外、紙面之趣及言上外、恐々  
謹言、

謹言、

朱力キ  
延享二年 十二月十二日

松平上總入道

西尾隠岐守

忠直判

全上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、九月廿五日

公方様 大御所様御移徙相濟外段被承之、目出度被存由  
得其意外、依之被差越使者外、紙面趣各申談

大御所様外及 上聞外、恐々謹言、

朱力キ  
延享二年 十二月十二日

本多中務大輔  
忠良判

松平上總入道

吉貴公御譜中

正文在文庫

猶く御表よりも御申上被成り由、何もくよろし  
く申上まいらせり、めてたくかしく、

十一月四日付にて御ふミ下され外、

三御所様ますく御機嫌よく御座なされ、恐悦ニ覺しめ  
しり由、扱は九月廿五日

上様御本丸に御移徙相濟

大御所様御隠居被遊、西御丸へ移らせられ外段、御めて  
たく覺しめしり由、右之御祝儀御申上被成り御ふミの趣、  
よろしく申上まいらせり、めてたくかしく、

朱力キ  
延享二年

豊岡

梅その

まつ嶋

山の井

うら尾

せかわ

松平

上總入道様  
御返事

吉貴公御譜中

正文在文庫

猶く御表よりも御申上被成り由、何もくよろしく申上まいらせり、めてかしく、

十一月四日付にて御ふミ下されり、

三御所様ますく御機嫌よく御座なされ、恐悦に覺しめし由、扱は九月廿五日

上様御本丸へ御移徙相濟

大御所様御隠居被遊、西御丸へ移らせられり段、御めてたく覺しめし由、右之御祝儀

大御所様へ御申上被成り御ふミの趣、よろしく申上まいらせり、めてたくかしく、

朱カキ  
延享二年

たきつ  
さゑた

吉貴公御譜中

正文在文庫

猶く何もくよろしく申上まいらせり、めてたくかしく、

十一月四日付にて御ふミ下されり、

三御所様ますく御機嫌よく御座なされ、恐悦に覺しめし由、さては九月廿五日御移徙相濟り御祝儀として

上様

大御所様より菊姫方御拜領物仰付られり御事、ありかたき仕合に覺しめし由、右之御禮御申上被成り御ふミの趣、よろしく申上まいらせり、めてたくかしく、

朱カキ  
延享二年

うら尾  
せかわ  
たきつ  
さゑた

松平

上總入道様

御返事

豊岡

梅その

まつ嶋

山の井

松平

上總入道様

御返事

豊岡

梅その

まつ嶋

2294

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、今度 御代替御禮相濟外、

段被承之、目出度被存由得其意外、依之被差越使者外、

紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

朱カキ

延享二年

十二月十二日

松平能登守

乘賢判

松平上總入道

2295

全上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、今度 御代替御禮相濟外、

段被承之、目出度被存由得其意外、依之被差越使者外、

紙面之趣及言上外、恐々謹言、

2296

朱カキ

延享二年

十二月十二日

西尾隠岐守

忠直判

松平上總入道

全上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、今度 御代替御禮相濟外、

之段被承之、目出度被存由得其意外、依之被差越使者外、

紙面趣各申談

大御所様及言上候、恐々謹言、

朱カキ

延享二年

十二月十二日

本多中務大輔

忠良判

松平上總入道

2297

継豊公御譜中

同年十二月十六日以(陸雄)上使川勝權之助<sub>二</sub>賜<sub>一</sub>御鷹所<sub>レ</sub>攫之

鶴於繼豊<sub>一</sub>、有<sub>レ</sub>病故、島津但馬守忠雅代<sub>二</sub>継豊<sub>一</sub>、到<sub>二</sub>執政

之各第<sub>二</sub>禮<sub>一</sub>謝<sub>一</sub>之<sub>一</sub>也、

2298

全上

正文在文庫

覺

御狀令披見外、

正文在文庫

宗信公御譜中

2300

御朱印頂戴之寺社之輩、不依寺社領之多少ニ、境内計之雖爲 御朱印、於令所持者 御朱印可被下之間、御料・私領に在之寺社領之

御朱印に寫を差添、來寅三月より五月迄之内江戸に致持參、秋元攝津守・本多紀伊守所は相達外様可被觸外、以上、

〔延享二年〕 丑十二月

2299

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、十月十四日増上寺 御靈屋御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

朱力キ 延享二年 十二月十八日

松平上總入道

松平能登守

乘賢判

2302

吉貴公御譜中

正文在文庫

なをく御表より御申上被成外へ共、なを又御申上被成外とをりよろしく申上まいらせ外、めてたくかしく、

十二月朔日付にて御文下され外、

三御所様御機嫌よくならせられ、先月二日

2301

継豊公御譜中

扣正文在祐筆所

將軍 宣下爲御祝儀、各様致招請御祝仕度存外得共、私病中故、來寅年同氏薩摩守參府仕外節、御祝仕度存外、此段申上置外、以上、

十二月廿二日

〔延享二年〕 十二月十八日 松平能登守 乘賢判

松平薩摩守殿

將軍 宣下御任槐の御規式しゆひよく濟せられり御事、  
御目出度思召りよし、右の御祝儀

公方様

大納言様へ御申上被成り御文のやう、何もよろしく申上  
まいらせり、めてたくかしく、

朱カキ  
延享二年

豊をか

梅その

まつ嶋

松平  
上總入道様

山の井

うら尾

瀬かわ

たきつ

さえた

6

2303

吉貴公御譜中

正文在文庫

此よろしく御ひろう御申上被成りやう、よく  
く申せとの御事御座り、なをく 菊姫様もお  
なし御事に、くれの御しうき宜仰上られまいらせり

へくり、何もよくく申せとの御事ニ御さり、めて  
たくかしく、

歳暮の御祝義おなし御事ニいわる入らせられ、まつく  
その御地にて

總州様御機嫌よく被爲入、その外様方も御きけんよく御  
にきく鋪御いわるあそハしりハんと、かすく御めて  
度おほしめしり、こゝ御ほとこも御揃あそハし御機嫌  
よく、御にきくしく御いわるあそハしり、さては此御  
もくろくのことく歳暮の御祝義御いわるあそハしりて進  
しられり御事ニ御さり、誠にいく久しく萬く年も相か  
はらす御しうき仰被進りやうにといわる入らせられり、  
めてたくかしく、

朱カキ  
延享二年

6

ひちしま

隼

します

權左衛門さま

人々

萩原

岡田

藤元

2304

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

三御所様益御機嫌能被成御座、今度

將軍 宣下御任槐相濟外段被承之、目出度被存由得其意  
外、依之被差越使者外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐  
々謹言、

朱力平  
延享二年 閏十二月三日

酒井雅樂頭

忠知判

松平上總入道

2305

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、今度  
將軍 宣下御任槐相濟外段被承之、目出度被存由得其意  
外、依之被差越使者外、紙面趣及言上外、恐々謹言、

朱力平  
延享二年 閏十二月三日

西尾隰岐守

忠直判

松平上總入道

2306

全上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、今度  
將軍 宣下 御任槐相濟外段被承之、目出度被存由得其  
意外、依之被差越使者外、紙面之趣各申談

大御所様外及 上聞外、恐々謹言、

朱力平  
延享二年 閏十二月三日  
松平能登守 乘賢判  
松平上總入道

2307

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、十一月八日東叡山 御靈屋  
御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上  
聞外、恐々謹言、

朱力平  
延享二年 閏十二月四日

酒井雅樂頭

忠知判

松平上總入道

2308

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、十一月九日増上寺 御靈屋  
御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上  
聞候、恐々謹言、

朱力平  
延享二年 閏十二月四日

酒井雅樂頭

忠知判

松平上總入道

正文在文庫

御狀令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、今度

將軍 宣下 御任槐相濟外段被承之、目出度被存由得其

意外、依之被差越使者外、紙面之趣各申談及 上聞外、

恐々謹言、

〔延享二年〕 閏十二月三日

松平薩摩守殿

酒井雅樂頭

忠直判

御狀令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、今度

將軍 宣下 御任槐相濟外段被承之、目出度被存由得其

意外、依之被差越使者外、紙面趣及言上外、恐々謹言、

〔延享二年〕 閏十二月三日

松平薩摩守殿

西尾隱岐守

忠直判

御狀令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、今度

將軍 宣下 御任槐相濟外段被承之、目出度被存由得其

意外、依之被差越使者外、紙面之趣各申談

大御所様及 上聞外、恐々謹言、

〔延享二年〕 閏十二月三日

松平薩摩守殿

松平能登守

乘賢判

御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、十一月九日増上寺 御靈屋

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上

聞候、恐々謹言、

〔延享二年〕 閏十二月四日

松平薩摩守殿

酒井雅樂頭

忠直判

御狀令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、十一月八日東叡山 御靈屋

御參詣之儀被承之、恐悅旨尤り、紙面之趣各申談及 上  
聞り、恐々謹言、

〔延享二年〕 閏十二月四日 酒井雅樂頭 忠知判

松平薩摩守殿

2314 繼豊公御譜中

扣正文在右筆所

(の1) 御代替付る琉球中山王より先規之通以使者御祝儀爲申上

度り、右使者私召連參府仕り例り得共、私病氣故奉願滞  
府仕儀り得者、順快之程及難計御座り付、同氏薩摩守來  
り卯年御暇被下り者、辰年參府之節爲召連度奉存り、先  
格不相替様被仰付被下度り、琉球之儀渡海不自由之所り  
之故、時節を以申越、其支度不仕り得者調兼申事り間、  
此節奉願り、御差圖被成可被下り、以上、

〔延享二年〕 閏十二月四日

〔米〕 御付札

薩摩守辰年參府之節召連り様可被致り

〔米〕 右之通閏十二月七日之夜、酒井雅樂頭様より御留守居被召  
呼、御付札を以被仰渡り付、翌八日之朝御請、別紙之通

御名書ニ而御留守居野村大右衛門を以雅樂頭様江被仰進、  
外之御老中様方江被仰進り

(の2) 一來寅年中順風琉球より唐に進貢使差渡申管り、右進

貢使卯年勤方仕、其後皇帝より暇給事り、右相濟獻上  
物等并使者從者共支度用意相調、遙々之海陸罷歸申事  
り得者、到卯冬及琉球に歸着難仕積御座り、然者中山  
王使者差上り儀、若辰年より以前に差上り様被仰付り  
る者獻上物等及相調不申り間、辰年召連度段相願り儀  
御座り、

一享保元年 御代替之節者 薩摩守同年九月十一日參

府仕、琉球中山王より先例之通以使者御祝儀爲申上度  
旨相伺り處、來り戌年薩摩守召連參府可仕旨被仰渡、  
其節者琉球に渡海時分り間則申越、三年目ニ使者召  
連致參府り、此節之儀者最早琉球に之便、時分後ニ罷  
成り付、來春便申越管り、右次第り故、當年より四  
年目使者召連り様相願申儀御座り、以上、

〔米〕 〔延享二年〕 閏十二月四日

右水野壹岐守様少々御取直

〔米〕 右之通閏十二月朔日、水野壹岐守様江野村大右衛門ニ而被

差出外、此段者壹岐守様御内、被聞召、御用番江被差出儀

ニ而無之由外間、御名書御日付成無之、此通被仰外處、聞

十二月四日御用番酒井雅樂頭様江野村大右衛門を以琉球使

者御願書ニ此書付<sub>成</sub>被相添御出シ被成外事、

一琉球使者御同書ニ者、辰年琉球使被召連外ニと御付札を以

本文御下ケ被成外得共、此例書者不相下外事」

(03) 此節 御代替琉球中山王より先規之通以使者御祝儀爲申

上度旨相同外處、來ル辰年同氏薩摩守召連參府可仕旨被

仰渡奉承知外、琉球江申越外様國元江可申遣外、此段御

請申上外、以上、

<sup>(朱)</sup>「延享二年」 閏十二月八日

「右御口上書、御留守居野村大右衛門を以、御用番酒井雅樂

頭様江被差出外事」

2315 吉貴公御譜中

同年十月十九日

吉宗公賀<sub>一</sub>其退老<sub>一</sub>以 上使加納遠江守久通<sub>御側衆</sub>賜<sub>三</sub>於腰刀

及佳肴繼豐<sub>ニ</sub>宗信<sub>一</sub>、因吉貴呈<sub>ニ</sub>書翰<sub>一</sub>奉<sub>レ</sub>謝<sub>レ</sub>之、執政投<sub>ニ</sub>

奉書<sub>一</sub>答<sub>レ</sub>之、

2316 正文在文庫

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤外、將亦先頃從

大御所様以上使御隱居爲御祝儀、同氏大隅守・同薩摩

守御腰物并御肴拜領之、難有由得其意外、紙面之趣各申

談及 上聞外、恐々謹言、

<sup>朱カキ</sup>延享二年 閏十二月六日 酒井雅樂頭 忠知判

松平上總入道

2317 御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤外、將亦先頃從

大御所様以上使御隱居爲御祝儀、同氏大隅守・同薩摩

守御腰物并御肴拜領之、難有由得其意外、紙面之趣及言

上外、恐々謹言、

<sup>朱カキ</sup>延享二年 閏十二月六日 西尾謙岐守 忠直判

松平上總入道

2318 全上

御札令披見外、

2319

宗信公御譜中

正文在文庫

御狀令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將亦先頃從大御所様以上使、御隠居爲御祝儀、御腰物并御肴拜領之、難有由得其意外、依之爲御禮被差越使者外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

(奉)

「延享二年」

閏十二月六日

酒井雅樂頭

忠知判

松平薩摩守殿

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將亦先頃從大御所様以上使、御隠居爲御祝儀、同氏大隅守・同薩摩守御腰物并御肴拜領之、難有由得其意外、紙面之趣各申談  
大御所様以上 上聞外、恐々謹言、

(奉)

「延享二年」 閏十二月六日

松平能登守

乘賢判

松平上總入道

2321

御狀令披見外、

大御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又先頃御隠居爲御祝儀、以上使御腰物并御肴拜領、難有由得其意外、依之爲御禮被差越使者外、紙面之趣各申談大御所様以上 上聞外、恐々謹言、

(奉)

「延享二年」

閏十二月六日

松平能登守

乘賢判

松平薩摩守殿

2322

吉貴公御譜中

正文在文庫

返く御表より御禮御申上被成り由、何もよろしく  
申上まいらせりへくり、かしく、

十二月六日付にて御ふみ下されり、

三御所様ますく御機嫌よく御座なされ、恐悦ニ覺しめ  
しり由、扱は十月十九日

大御所様より 上使にて御隠居御祝儀として、御同氏大  
隅守殿 薩摩守殿御腰物并御肴御拜領被成、御手まへ様

も有かたく覺しめしり由、右之御禮御申上被成り御ふ  
みの趣、よろしく申上まいらせりへくり、めてたくかし  
く、

朱カキ  
延享二年

松平

上總入道様

御返事

豊岡  
梅その

松しま

山の井

うら尾

せかわ

たきつ

さゑた

2323 吉貴公御譜中  
正文在文庫

なをく御表より御禮御申上被成り由、何もよろし  
く申上まいらせり、めてたくかし、

十二月六日付にて御ふみ下されり、

三御所様ますく御機嫌よく御座なされ、恐悦ニ覺しめ  
しり由、扱は十月十九日  
大御所様より

上使にて御隠居御祝儀として、御同氏大隅守殿 薩摩守  
殿御腰物并御肴御拜領被成、御てまへさまも有かたく  
覺しめしり由、右之御禮

大納言様へ御申上被成り御ふみの趣、よろしく申上まい  
らせりへくり、めてたくかし、

朱カキ  
延享二年

松平

上總入道様

御返事

豊岡

梅その

まつ嶋

山の井

うら尾

せかわ

吉貴公御譜中

正文在文庫

なをく御表よりも御禮御申上被成り由、何もよろしく申上まいらせりへくり、かしく、

十二月六日付にて御ふみ下されり、

三御所様ますく御機嫌よく御座なされ、恐悦ニ覺しめしり由、扱ハ十月十九日

大御所様より

上使にて御隠居御祝儀として、御同氏大隅守殿 薩摩守殿御腰物并御肴御拜領被成、御てまへさまより有かたく覺しめしり由、右之御禮

大御所様へ御申上被成り御ふみの趣、よろしく申上まいらせりへくり、めてたくかしく、

朱力キ 延享二年

たきつ  
さゑた

松平

上總入道様

御返事

豊岡

梅その

まつ嶋

吉貴公御譜中

正文在文庫

なをく何もよろしく申上まいらせりへくり、かしく、

十二月六日付にて御ふみ下されり、

三御所様ますく御機嫌よく御座なされ、御めたく覺しめしり由、さては十月十九日

大御所様より

上使清崎にて御隠居御祝儀として 菊姫(總臺女)の方三代集賀歌

并御肴御拜領被成、御手まへさまも有かたく覺しめしり由、右之御禮御申上被成り通、よろしく申上まいらせりへくり、めてたくかしく、

朱力キ 延享二年

山の井  
うら尾  
せかわ  
たきつ  
さゑた

豊岡

松平

上總入道様

御返事

梅その  
まつ嶋  
山の井  
うら尾  
せかわ  
たきつ  
さゑた

吉貴公御譜中

正文在文庫

返々何も々よろしく申上まいらせりへくり、め  
てたくかしく、

十二月六日付にて御ふミ下されり、

三御所様ます々御機嫌よく御座なされ、御めてたく覺  
しめしり由、さては十月十九日

大御所様より

上使清崎にて御隠居御祝儀として 菊姫の方三代集賀歌

并御着御拜領被成、御てまへさまも有かたく覺しめし

り由、右之御禮

大御所様へ御申上被成り御ふミの様、よろしく申上まい

らせりへくり、めてたくかしく、

朱カキ  
延享二年

松平

上總入道様

御返事

豊岡  
梅その  
まつ嶋  
山の井  
うら尾  
せかわ  
たきつ  
さゑた

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、就寒中

三御所様御機嫌被相伺之り、益御安全御儀外間、可御心  
易り、隨る鯛一箱被獻之り、各申談遂披露外處一段之御  
仕合り、恐々謹言、

朱カキ

延享二年

閏十二月七日

酒井雅樂頭

忠知判

松平上總入道

全上

御札令披見<sub>レ</sub>、就寒中

三御所様御機嫌被相同<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>、益御安全之御事<sub>レ</sub>間、可御心易<sub>レ</sub>、隨<sub>レ</sub>鯛一箱被獻<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>、遂披露<sub>レ</sub>處一段之御仕合<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

朱力<sub>キ</sub>延享二年 閏十二月七日

西尾隱岐守

忠直判

松平上總入道

全上

御札令披見<sub>レ</sub>、就寒中

大御所様御機嫌被相同<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>、益御勇健御儀<sub>レ</sub>間、可御心易<sub>レ</sub>、隨<sub>レ</sub>鯛一箱被獻<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>、各申談

大御所様<sub>レ</sub>遂披露<sub>レ</sub>處一段之御仕合<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

朱力<sub>キ</sub>延享二年 閏十二月七日

松平能登守

乘賢判

松平上總入道

三御所様御機嫌以使者被相同<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>、益御安全御儀<sub>レ</sub>間、可御心易<sub>レ</sub>、隨<sub>レ</sub>鯉節一箱被獻<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>、各申談遂披露<sub>レ</sub>處一段之御仕合<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

朱「延享二年」 閏十二月七日

酒井雅樂頭

忠直判

松平薩摩守殿

全上

御狀令披見<sub>レ</sub>、就寒中

三御所様御機嫌以使者被相同候、益御安全御儀<sub>レ</sub>間、可御心易<sub>レ</sub>、隨<sub>レ</sub>鯉節一箱被獻<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>、遂披露<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>處一段之御仕合<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

朱「延享二年」 閏十二月七日

西尾隱岐守

忠直判

松平薩摩守殿

全上

御狀令披見<sub>レ</sub>、就寒中

大御所様御機嫌以使者被相同<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>候、益御安全御儀<sub>レ</sub>間、可御心易<sub>レ</sub>、隨<sub>レ</sub>鯉節一箱被獻<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>、各申談

大御所様<sub>レ</sub>遂披露<sub>レ</sub>處一段之御仕合<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

宗信公御譜中

正文在文庫

御狀令披見<sub>レ</sub>、就寒中

〔延享二年〕 閏十二月七日

松平薩摩守殿

松平能登守  
乘賢判

吉貴公御譜中  
正文在文庫

なをく御表方も御申上被成り由、何もよろしく申  
上まいらせり、めてたくかしく、

十二月七日付にて御ふみ下されり、

三御所様ますく御安全に御座なされ、御めてたく覺し  
めしりよし、寒中なを以

大御所様御機嫌御うかひなされり御ふみの趣、よろし  
く申上まいらせり、めてたくかしく、

朱カキ  
延享二年

松平

上總入道様

御返事

豊岡

梅その

まつ嶋

山の井

うら尾

せかわ

たきつ

全上

さゑた

なをく御表方も御申上被成り由、何もよろしく申上  
まいらせり、めてたくかしく、

十二月七日付にて御ふみ下されり、

三御所様ますく御安全に御座なされ、御めてたく覺し  
めしり由、寒中なをもつて

公方様 大納言様御機嫌御うかひ被成り御ふみのおも  
むき、よろしく申上まいらせり、めてたくかしく、

朱カキ  
延享二年

松平

上總入道様

御返事

豊岡

梅その

まつ嶋

山の井

うら尾

せかわ

たきつ

さゑた

全上

なをく御表方も御申上被成り由、何もよろしく申  
上まいらせり、めてかしく、

十二月七日付にて御ふみ下されり、

三御所様ますく御安全に御座なされ、御めてたく覺し

めしり由、寒中なをもつて

公方様 大納言様御機嫌御うかひ被成り御ふみのおも  
むき、よろしく申上まいらせり、めてたくかしく、

朱カキ  
延享二年

豊岡

梅その

まつ嶋

山の井

うら尾

せかわ

たきつ

さゑた

十二月十一日附にて御文下されり、

三御所様益御機嫌よくならせられ、御めてたく思しめし  
りよし、さては先月十二日

公方様

大御所様より御文にて

菊姫の方へ拜領物仰付られ、有かたき御事と思しめしり

よし、右の御禮

公方様

大納言様へ御申上被成御文の趣、よろしく申あけまいら  
せり、めてたくかしく、

朱カキ  
延享二年

お

豊岡

梅その

松しま

山の井

うら尾

せかわ

たきつ

さえた

まつ平

かつさ入道様

御返事

全上

なをく何も宜申上まいらせり、めてたくかしく、

正文在文庫

今朝蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之、遂披露外處一段之御仕合、恐々謹言、

〔朱〕「延享二年」 閏十二月十三日 忠知判

松平大隅守殿

忠知

〔朱〕「在右裏」 酒井雅樂頭

今朝蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之、遂披露外之處一段之御仕合、恐々謹言、

〔朱〕「延享二年」 閏十二月十三日 忠直判

松平大隅守殿

忠直

〔朱〕「在右裏」 西尾隲岐守

正文在文庫

爲歳暮之祝儀、小袖一重到來歡覽、委曲酒井雅樂頭可述外也、

〔朱〕「延享二年」 閏十二月十五日



薩摩

中將殿

爲歳暮之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之、遂披露外之處一段之御仕合、恐々謹言、

〔朱〕「延享二年」 閏十二月十五日

西尾隲岐守

忠直判

松平大隅守殿

知行目錄

高五拾斛

伊集院寺脇村之内

志布志月野村之内

谷山下福元村之内

眞幸吉田龜澤村之内

名寄帳在別冊

右其方事、御家中被召出、御切米拾五斛被下置候處、此節以地方永々被下之條、到後年全可有收納者也、仍如件、

延享二年乙丑閏十二月十八日  
鎌 太郎右衛門  
政直判

北 織 時守判

伊 兵 貞起判

穎 内 久周判

樺 主 久初判

小久保清七郎殿

2342 全上

正文在文庫

今朝御干菓子一箱被獻之外、遂披露候、恐々謹言、

(朱) 一延享二年  
閏十二月廿四日 忠知判

松平大隅守殿

(朱) 一在右裏

酒井雅樂頭

忠知

2343 全上

今朝御干菓子一箱被獻之外、遂披露候、恐々謹言、

(朱) 一延享二年  
閏十二月廿四日 忠直判

松平大隅守殿

(朱) 一在右裏

西尾隠岐守

忠直

2344 全上

今朝

大御所様江御干菓子一箱被獻之外、遂披露候、恐々謹言、

(朱) 一延享二年  
閏十二月廿四日 乘賢判

松平大隅守殿

(朱) 一在右裏

松平能登守

乘賢

2345 正文在文庫

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、今度

將軍 宣下御禮相濟候之段被承之、目出度被存由得其意  
外、依之被差越使者外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐  
く謹言、

朱力キ

延享二年 閏十二月廿八日

酒井雅樂頭

忠知判

松平上總入道

2346

全上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、今度

將軍 宣下御禮相濟外段被承、目出度被存由得其意外、

依之被差越使者外、紙面之趣及言上外、恐く謹言、

朱力キ

延享二年 閏十二月廿八日

西尾隱岐守

忠直判

松平上總入道

2347

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、今度

將軍 宣下御禮相濟外之段被承之、目出度被存由得其意

外、依之被差越使者外、紙面趣各申談  
大御所様は及言上候、恐く謹言、

朱力キ

延享二年 閏十二月廿八日

松平能登守

乘賢判

松平上總入道

2348

全上

なをく御表よりも御申上被成外へ共、御文の通よ  
ろしく申上まいらせ外、めてたくかしく、

十二月十一日附にて御文下され外、

三御所様益御機嫌よくならせられ、先月十一日、十二日、

十三日

將軍 宣下の御祝義として、諸御禮しゆひよく相濟外御

事御承知被成、御めて度思しめし外由、右之御祝義

公方様 大納言様へ御申上被成御文の趣、よろしく申あ

けまいらせ外、めてたくかしく、

朱力キ

延享二年

方

豊岡

梅その

まつしま

2349

全上

まつ平  
かつさ入道様  
御返事

山の井  
うら尾  
せかわ  
たきつ  
さえた

なをく御表より御申上被成りへとも、なを又御申

上り通よろしく申上まいらせり、めてかしく、

十二月十一日付にて御ふみ下されり、

三御所様ますく御機嫌よく御座なされ、先月十一日、

十二日、十三日

將軍 宣下の御祝儀として、諸御禮御首尾よく相濟まい

らせり御事、御めてたき御儀ニ覺しめしり由、右御祝儀

大御所様へ御申上被成り御ふみの趣、よろしく申上まい

らせり、めてたくしく、

朱力キ  
延享二年

豊岡

梅その

まつ嶋

2350

全御譜中

松平  
上總入道様  
御返事

山の井  
うら尾  
せかわ  
たきつ  
さえた

同年十一月十五日

大樹家重公祝ニ將軍 宣下之賀儀ニ以ニ 上使三浦志摩守

忠次一衆御結賜ニ於卷物繼豊興ニ宗信ニ、各有レ數、吉貴亦賜以ニ

卷物十箇ニ、則使ニ比志島孫左衛門國泰使价上、呈ニ書札ニ

奉レ謝レ之、因執政所レ投ニ奉書一具ニ于左方ニ、

2351

正文在文庫

御札令披見り、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、將又今度

將軍 宣下爲御祝儀、從

公方様以上使、其方并同氏大隅守・同薩摩守儀卷物拜

領之、重疊難有由得其意り、依之爲御禮被差越使者り、

紙面之趣各申談及 上聞り、恐く謹言、

朱力キ  
延享二年 閏十二月廿八日

酒井雅樂頭  
忠知判

松平上總入道

2352  
全上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又今度

將軍 宣下爲御祝儀、從

公方様以 上使、其方并同氏大隅守・同薩摩守儀卷物拜

領之、重疊難有由得其意外、依之爲御禮被差越使者外、

紙面之趣及言上外、恐く謹言、

朱力キ  
延享二年 閏十二月廿八日

西尾隱岐守  
忠直判

松平上總入道

2353  
全上

御札令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又今度

將軍 宣下爲御祝儀、從

公方様以 上使、其方并同氏大隅守・同薩摩守儀卷物拜

領之、重疊難有由得其意外、依之爲御禮被差越使者外、

紙面趣各申談

大御所様及 上聞外、恐く謹言、

朱力キ  
延享二年 閏十二月廿八日

松平能登守  
乘賢判

松平上總入道

2354  
全上

なをく御表より御禮御申上被成りへとも、なを又

御申上り通よろしく申上まいらせり、めてたくかし

く、

十二月十三日付にて御ふみ下されり、

三御所様ますく御機嫌よく御座なされ、恐悦ニ覺しめ

しり由、扱は先月十五日

公方様より

上使にて今度

將軍 宣下の御祝儀御てまへ様 御同氏大隅守殿 薩摩

守殿御卷物御拜領なされ、重疊有かたく覺しめしり由、

右之御禮御申上なされり御ふみの趣、よろしく申上まい

らせり、めてたくかし、

朱力キ  
延享二年

豊岡

2355

松平

上總入道様

御返事

梅その

まつ嶋

山の井

うら尾

せかわ

たきつ

さゑた

全上

なをく御表より御禮御申上被成りへ共、猶又仰上  
られりとの御事、何もくよろしく申上まいらせり、  
めてたくかしく、

十二月十三日付にて御文被下り、

三御所様ますく御機嫌よく成らせられ、御めてたく覺  
しめしり由、將又先月十五日

公方様より 上使にて

將軍 宣下の御祝儀として御手前様 御同氏大隅守殿

薩摩守殿御事、御巻物御拜領被成、有かたく覺しめしり

由、右之御禮

大御所様へ御申上被成りとの御事、御文之趣よろしく申

2356

上まいらせり、めてたくかしく、

朱カキ  
延享二年

まつ平

上總入道様

御返事  
人々御中

豊岡

梅その

松しま

山の井

うら尾

せかわ

たきつ

さゑた

全上

御札令披見り、

大御所様益御機嫌能被成御座、十一月廿三日東叡山 御  
鐘屋 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤り、紙面之趣各申談  
大御所様は及 上聞り、恐々謹言、

朱カキ

延享二年

閏十二月廿八日

松平能登守

乗賢判

松平上總入道

全上

御札令披見外、

大御所様益御機嫌能被成御座、十一月廿四日増上寺 御

靈屋 御参詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談

大御所様<sup>ニ</sup>及言上候、恐<sup>ク</sup>謹言、

<sup>朱子</sup>延享二年

閏十二月廿八日

松平能登守

乘賢判

松平上總入道

御狀令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、今度

將軍 宣下御禮相濟外之段被承之、目出度被存由得其意

外、依之被差越使者外、紙面之趣及言上外、恐<sup>ク</sup>謹言、

<sup>朱</sup>「延享二年」

閏十二月廿八日

西尾隠岐守

忠直判

松平薩摩守殿

全上

御狀令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、今度

將軍 宣下御禮相濟外之段被承之、目出度被存由得其意

候、依之被差越使者外、紙面趣各申談

大御所様<sup>ニ</sup>及言上候、恐<sup>ク</sup>謹言、

<sup>朱</sup>「延享二年」

閏十二月廿八日

松平能登守

乘賢判

松平薩摩守殿

宗信公御譜中

正文在文庫

御狀令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、今度

將軍 宣下御禮相濟外之段被承之、目出度被存由得其意

外、依之被差越使者外、紙面趣各申談及 上聞外、恐<sup>ク</sup>

謹言、

<sup>朱</sup>「延享二年」

閏十二月廿八日

酒井雅樂頭

忠知判

松平薩摩守殿

全上

宗信公御譜中

延享二年乙丑十一月十五日

家重公見賀<sup>ニ</sup>

御狀令披見外、  
全上

松平薩摩守殿

〔延享二年〕 閏十二月廿八日 酒井雅樂頭 忠知判

御狀令披見外、  
將軍 宣下爲御祝儀、從  
三御所樣益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又今度  
公方樣以 上使卷物拜領之、難有由得其意外、依之爲御  
禮被差越使者外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、  
〔延享二年〕 閏十二月廿八日 西尾隱岐守 忠直判

將軍 宣下 上使三浦志摩守忠次來繼豐之芝邸賜、  
緋二十卷于繼豐、同十卷于吉貴、同十卷于宗信、時  
在國故島津但馬守忠雅代宗信拜領之、忠雅登營  
且到執政各位之第一奉申謝之、詳載繼豐之譜中、  
厥后右品到著于薩國宗信拜戴之、乃以使价呈上  
書廣於  
三御所之執政 奉禮謝之、執政贈奉書、見于左  
方、

御狀令披見外、  
全上

松平薩摩守殿

〔延享二年〕 閏十二月廿八日 松平能登守 乘賢判

御狀令披見外、

將軍 宣下爲御祝儀、從  
三御所樣益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又今度  
公方樣以 上使卷物拜領之、難有由得其意外、依之爲御  
禮被差越使者外、紙面之趣各申談  
大御所樣及 上聞外、恐々謹言、

松平薩摩守殿

〔延享二年〕 閏十二月廿八日 西尾隱岐守 忠直判

三御所樣益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又今度  
將軍 宣下爲御祝儀、從  
公方樣以 上使卷物拜領之、難有由得其意外、依之爲御  
禮被差越使者外、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又參府時分之儀、同氏大隅守に相達外付、被申越外趣得其意外、紙面之通各一覽之事外、恐々謹言、

〔延享二年〕 閏十二月廿八日 酒井雅樂頭 忠知判

松平薩摩守殿

2366 全上

御狀令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又參府時分之儀、同氏大隅守に相達外付、被申越候之趣得其意外、紙面之通各一覽之事外、恐々謹言、

〔延享二年〕 閏十二月廿八日 松平能登守 乘賢判

松平薩摩守殿

2367 全上

御狀令披見外、

三御所様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又參府時分之儀、同氏大隅守に相達外付、被申越外趣得其意外、紙面之通令承知外、恐々謹言、

〔延享二年〕 閏十二月廿八日 西尾隱岐守 忠直判

松平薩摩守殿

2368 全上

御狀令披見外、

大御所様益御機嫌能被成御座、十一月廿四日増上寺御靈屋 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談大御所様に及言上外、恐々謹言、

〔延享二年〕 閏十二月廿八日 松平能登守 乘賢判

松平薩摩守殿

2369 全上

御狀令披見外、

大御所様益御機嫌能被成御座、十一月廿三日東叡山御靈屋 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談大御所様に及 上聞外、恐々謹言、

〔延享二年〕 閏十二月廿八日 松平能登守 乘賢判

松平薩摩守殿

絲豊公御譜中

正文在文庫

覺

一 今度國々御料所村々巡見被差遣り付、右之面々相通り道筋掃除并道橋一切作申間敷り、馳走として送迎之者出り儀可爲無用事、

一 右之面々御朱印員數之外人馬入りハ、所定之駄賃錢有之者其定之通、定無之所者近邊御定之割合を以駄賃錢取之、人馬可出り、

御朱印之外ニ賃なしの人馬壹人壹疋も不可出之事、

一 巡見通り道筋にても、百姓農業之儀、少も無慮慮いとナミり様ニ可被申付事、

一 私領村々ニ若巡見令旅宿りハ、少々之小屋かけ取繕ハ不及申、疊替可爲無用、古くりも不苦り、賄道具等も有合りを借し可申事、

一 旅宿可成家、一村ニ三軒無之所者、寺又ハ村を隔りり成共不苦事、

一 泊・晝休之場所ニ入用之飯米・鹽醋・薪并酒肴、油・

野菜等ハ其所之相場次第賣り様可被申付事、

一 其所無之商賣物、脇より遣置賣せ申間敷り、衣類・諸

道具ハ勿論、酒肴ニも持寄賣り儀、堅可爲停止事、

一 右之面々金銀米錢・衣類・道具ハ不及申、酒肴・菓子等迄一切受用無之筈り間、内々ニも堅音信不仕り様

ニ、知行所之者共ニ可被申付り、若内々ニ音信仕旨相聞るにおりてハ可爲曲事り間、其旨急度可被申付事、

一 何方見分仕り共、私領方よりの音信等も一切受用無之筈り間、音物ハ不及申、使者飛脚差出り儀も堅可爲無用事、

一 右之面々家來下々迄、在々におりて衣類・道具等ハ買不申様申渡り間、得其意商賣不仕様可被申付事、

一 野道之馳走として新規茶屋等作り儀堅可爲無用事、

右者今度御料所國々巡見被差遣り付、往來之道筋ハ私領村々をも可罷通り間、書面之條々先達り地頭より領知村々ニ申觸、無相違様急度可被申付り、以上、

丑閏十二月

2371

全上

正文在文庫

覺

一 今度諸國巡見雖被 仰付、國繪圖・城繪圖無用之事、

一人馬家數改無之事、

一御朱印之外之人馬、御定之通駄賃錢取之、無滯可出之事、

一何方を見分仕り共、使者飛脚音信物一切可爲無用、

但 案内之者入り所者其斷可有之事、

一掃除等可爲無用外、

但 有來道橋往行不自由之所者各別之事、

一泊る之宿所作事等可爲無用外、并茶屋新規に作之申間

敷事、

一國廻之面々にて、つき米・大豆以其所之相場可賣之、

此外之賣物常々其所之直段ニ賣可申事、

以上

<sup>(奉)</sup>「延享二年」 丑閏十二月

全上

正文在文庫

覺

一宿る疊之表替無用にて、古外共不苦事、

一湯殿・雪隠若無之所者、成程かるく可被致事、

一燈・柄杓・鍋釜古外共不苦外、若無之所ハかるく可被

致支度事、

一宿になるへき家、一村に三軒無之所ハ、寺にても又者  
村隔りぬも不苦事、

一其所に無之賣物、脇より遣置之、うらせ申間敷事、

以上

<sup>(奉)</sup>「延享二年」 丑閏十二月